# 灯夢

zeiss

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灯夢

【Ｎコード】
Ｎ１６６０Ｙ

【作者名】
ｚｅｉｓｓ

【あらすじ】
十八の春、生きがいを探すため引越しを決意する。やりたい事を探すため、やるべき事を見つけるため、都会の喧騒を離れ、自然豊かな田舎街へと旅立つ。そこで出会ったのは自分とは正反対の人達だった。

# 夜行列車

頬杖突いて向く先は闇。何の変化も無い、ただ暗いだけの景色。深夜を走る列車から、彷徨うかのように焦点を迷わせる。

きっと、この闇の向こうには、美しい田園風景や山里の情緒あふれる景観が広がっているのだろう。どこか懐かしい古びた茅葺家屋や、いかにも涼しそうな清流もあるに違いない。けれど幾ら目を凝らしても、それが見えることはない。

窓に映るものといえば表情の読めない、つまらなそうな男の顔があるだけだ。何を無くして、何を忘れてきたのか、何かが欠けてしまっている、そんな男の顔だ。瞳が濁って見えるのは気のせいだろうか。それともガラスが単に汚れていて曇っているだけなのだろうか。向き合う瞳に無性な悲しさがこみ上げてくる。

「なぁ……お前は何がしたいんだ」

窓に映る自分に問いかけた。求める『何か』さえ分からないまま、その答えを知りたいと切に願う。けれども自分の瞳を見続けるのは苦しくて、結局目をそむけてしまう。答えを知る勇気さえ、自分には足りていないのだ。

胸の奥がチクリと痛んで、再び窓の奥に視線を向けた。車内の明かりが窓を鏡のようにしてしまうため、自分の後ろでカーテンを閉めた。

闇は重く、霧のように全てのものを霞ませている。目を細めて、ようやく見えるのは、小さな灯りが一つ二つと緩い線上となり後ろ

に流れていくだけ。目の前の光景はただ真っ暗で、小さな灯さえもいつしか闇に呑み込まれてしまいそうだ。

だからこそ重ねてしまう。自分も大切な何かを見つけられないまま、これから暗い人生を生きていくのではないだろうかと。目ぼしい変化も無いままやがて消え、忘れ去られてしまうのではないだろうかと。誰にも気に留められず『そんな奴も居たな』と、それだけで終わってしまいそうな、暗雲たる未来が自分を待っているのではないだろうか。このまま自分は消えてしまうのだ。闇に浮かぶ儚い灯が自分に似ている気がして仕方がない。

「……」

そこまで考えて、沈黙を思い出した。そして思わず失笑してしまった。消極的すぎる考えに呆れてしまったのだ。いかにも恥ずかしそうに笑う自分が窓に映り、尚更恥ずかしい。

「そうだな」

客観的に自分を見ようと声を出した。生来、自分の性格は明るいはずなのだ。友達に『悩みとかなくて幸せそうだよね』とからかわれる程、楽観的な性格をしているつもりだ。ただ大切な何かが足りてないような、ぽっかりと何かが欠けてしまっているような、そんな気に苛まれるのも一つの事実だ。もしかすると無気力といえる部類には入ってしまうのかもしれない。

気づけば趣味を無くしていた。やりたい事も消えていた。どうすれば時間を忘れられるほど楽しめるのかも忘れてしまった。一体いつから、こうなってしまったのかさえ分からない。学生の時は毎日が楽しくて楽しくて仕方無かったのに。いつの間に『何か楽しいこ

とでもないかな』が口癖になってしまったのだろうか。楽しい事はもはや存在しないようにも思えてしまう。

「楽しいことか……」

答えを教えてくれと、窓を指でノックして思索する。この列車は生まれ育った東京を離れ、右も左も分からない新しい環境へと自分を運んでいる。つまりは引越しだ。

この転換期は、楽しかった日常を思い出させてくれるのだろうか。引越し先はどんな場所で、どんな人達がいて、どんな風に仲良くなれるのだろうか。一見単純そうに見えるそれこそが、毎日を飽きてしまっている現状にはとても新鮮なことのように思えて、少なからず期待してしまう。

「新しい人生でも始めるか」

そう呟いて、自分の発言が退職した人のようだと笑ってしまう。まだ十八年しか生きていないのだ。ただ、今までの人生に一区切りをつけたいという意味では、やはり退職した人と同じ心境と言えるのかもしれない。期待と不安が入り混じるような、複雑な心境だ。

来月の四月には十九歳になる。高校は卒業したものの志望していた大学には落ちてしまった。追うべき夢も、就きたい仕事も見つからない。何もかもが八方塞のような閉塞感に悩まされて、それでもそんな自分を変えたいと思い立ち、引越しをしようと今ここにいるのだ。

自分を慰めるため、新たな力付けを得るため。何かが変わると信

じてここにいるのだ。

そうと決まれば、悲観的な考えを思い巡らすのはもう止めにしよう。後ろに流れてゆく儚い灯を眺めて、過ぎてしまった出来事はもはや思い出さないようにと決意する。カーテンをピシャリと閉めて、椅子に深く座り直した。列車の揺れも、ローカル線特有の向かい合い座席のもたれ具合も悪くない。

何より溜まった疲れが、列車の振動に伝わって体から抜けていくようで心地良い。これが幸せかと考えて携帯を取り出し、明日の朝にアラームを鳴らせる手はずを整えた。

明日はいよいよ引越し先へと着く。きっと今日以上に疲れる一日になるはずだ。夜更かしをすれば、あくびが止まらない一日になってしまうだろう。

「寝るか」

誰に言うのでもなく、垂れ下がる広告を眺めて目蓋を閉じた。

## 道中

何度目かの揺れを感じて朝を知る。辺りはすっかり眩しくて、しばしばと見渡す車内は色鮮やかで楽しげな雰囲気になっていた。あくびしながら背伸びをすれば、どうやら疲れも取れているようだ。

列車の音や揺れに気を取られることなく、朝まで寝れた自分の器用さが微笑ましい。隣では、眩しい光を透かした薄紫色のカーテンが早く外の景色を見るようにと催促していた。

「お、起きたか」

向かいに座る、旅仲間は暢気にそう告げて、携帯を眺めていた。

「おう、起きたよ。というか……外すごいな」

カーテンを開いて驚かされた。目を擦っては確かめるように凝視する。窓の向こうには、春を体現したかのような色彩豊かな景色が広がっているのだ。薄紅色の桜に、柔らかそうな緑、あれは何色だっただろうか。

いつの頃か、美術の授業で聞いた記憶がある。緑は緑でも若草色や若葉色、若芽色なんて色もあったはずだ。それがどんな色かは忘れてしまったけれど、小高い山々を覆いつくす淡くて柔らかい、透き通るような緑にも、それなりの名前があるはずなのだ。

「なぁ樹、昼と夜とじゃ全然違うのな」

感動を共有したいと旅仲間の樹に声をかける。

昨夜の暗闇からは、目の前の景色など想像さえできなかったのだ。

「そうなんか。昨日は俺、漫画見たまんま寝たからな」

樹は口一杯に弁当を頬張っていた。

「相変わらず、つまらない野郎だな。お前は」
引越し先へと向かう旅なのだ。振り返る思い出も沢山あるだろうに、漫画を読んでいつもと変わらない夜を送っては何の面白みもない。漫画を卒業して、人生のためになる本を読んで欲しいと願うのは幼なじみ故だ。
「いいだろ別に」と樹は笑って、缶コーヒーを口に運んだ。缶コーヒー片手に外を眺める瞳は楽しそうで明るい。

そんな表情に思い出してしまう。
それは樹がここにいる理由だ。そもそも自分は志望していた大学に落ちてしまった。だから半ば投げやりに考えて、祖母のいる田舎に引っ越すのも悪くないと考えた。騒がしくて忙しい都会の喧騒からも離れたかった。静かに自分と向き合い、ゆっくりと将来を考えられればと思った。だからこそ引越しを決意したのだ。

けれど樹は違う。大学には受かっていた。
無邪気な表情で窓から顔を出し、風を浴びては子供のようにはしゃぐ樹に呆れてしまう。その表情には、後悔など微塵の欠片さえ見えない。樹は入学手続きの土壇場になって『来年、もっと上の大学に行く』と急に入学するのを止めてしまった。『そいじゃ俺も一緒に勉強するとよ』と、一緒に引っ越し先まで来て勉強するはめになった。

「なあ、樹。お前本当に大学行かなくて良かったわけ？」
終始、景色に夢中な樹に尋ねた。
「お前しつこいな。いいんだよ、もっと上の大学行くから」
度重なる質問に心底呆れたと、樹は口をへの字にした。そして何も無かったかのようにイヤホンを耳にして鼻歌を口ずさむ。

来年を目指している樹にとって、この引越しは一年間だけの限定

されたものだ。そして自分も、できれば一年以内に答えを見つけたいと思っている。今は見えない何かを掴み、やるべきことを見つけ、自活できるようにするというのが本音だからだ。

「じゃあ絶対、来年受かれよ。俺に付き合わなくたっていいんだからな」

これだけは毎回伝えたい気持ちだ。

けれど樹は決まって、

「気にすんな。それより嫁探すんだろ？　嫁」と、こんな風に話題を逸らしてしまう。口元を緩ませて、にやにやしながらしきりに尋ねてくる。そんな表情を見て、どこか自分の悩みが下らなく思えてしまい、仕方なく話に乗ることにした。

「嫁なら、お前が探せって」

「そりゃあ、俺も探すけどよ」

当たり前の事を言わせんなよと、高揚した表情で樹は唾を飛ばした。その気楽さが羨ましい。

「そもそも探すって、どうやってだ？」

「決まってるだろ。運命的な出会いでだよ」

確信を込めた表情が目の前にあった。

「どういうことだ、それは」

その言葉に共感するため、どの漫画を読めばいいか教えて欲しい。目の前に座る、夢見がちな少年は、同意を得られない事を知ると、大きな溜息をついた。

「分かってないな、晴祐（ハルスケ）は」

こんな時に限って人を名前で呼ぶのが腹立たしい。樹は、やれやれと肩をすぼめてみせた。

「さりげなくて、甘酸っぱい恋だよ。甘酸っぱい恋！」

分かれよこのニュアンスを、としきりに訴えている。

「それで、運命的な出会いってなんだよ？」

誰にでも理解できるように言えと、強い思いを込めて促した。すると樹は辺りをきょろきょろと見回して、

「そうだな……まぁ別に、何でもいいんだけど」と、さっきまでの熱さは何処に行ったのか、しょんぼりと言った。

「お前、馬鹿だろ」

その姿が間抜け過ぎて、思わず、ずっと言いたくて我慢していた言葉が出てきてしまった。

「可愛い子と仲良くなれれば、それでいいんだよ」

樹の言葉に呆れてしまう。長い付き合い故に、胸中を察すれば大体の予想はつく。きっと、ひと夏の思い出など、ありふれた展開を期待しているのだ。旅の途中で起こりうるかもしれない、ドラマチックな出会いを望んで車内を見回したのだ。

残念ながら田舎の少子化は進んでいるので若い人など車内にはいない。もし仮に、若くて可愛い子がいたとしても、樹が期待するようなイベントは絶対に起こりえない。

「ほら、寝言ばかり言ってないで、そろそろ着くぞ」

窓から外を眺めれば、旅の終着駅が間近に迫っていた。外の素晴らしい景色も見ずに、実現不可能に思える御伽噺に花を咲かせてしまったのだ。

一夜を過ごした列車を名残惜しく思い、荷物を片付けて、扉へと移動した。

## 新しい我が家

ガタンと大きく揺れて扉は開いた。ひんやりとした風に迎えられて僅かに鳥肌がたつ。
期待を胸一杯に膨らませて、昔と何一つ変わらぬホームに一歩を踏み出した。

ぐるっと見渡せば、錆びた蛇口の水飲み場も、銀色の改札口も、木造の駅舎も、どれもこれも変わらぬままだ。小さい頃は、虫取り網片手に婆ちゃんちに行く日が楽しみでしょうがなかった。懐かしさがこみ上げて嬉しくなってしまう。どうせなら、このままずっと変わらないで欲しいものだ。

懐かしさを辿るように駅舎から出て、小さなターミナルを通り過ぎ、川を見下ろした峠道に行き当たる。雨が降ったのか、それとも朝露が降りたのか、しっとりと濡れたアスファルトを荷物を引いて歩いて行く。時折、山の方向から吹いてくる風は、やはりまだ冷たい。

樹との下らない話に花を咲かせて、歩き初めてから三十分。道路の分岐と共に道は開けて、田畑と家屋が入り乱れる集落の入口に到着した。山沿いにひっそりと佇む小さな村だ。

道路脇の竹林は涼しそうに揺れていて、細かな陽を散らしていた。そんな光景がやはり懐かしい。

「ついたぞ。あれだ」
小さな裏山を背中に、目的の建物はある。紺色の瓦に白壁が映える平屋の日本家屋。庭は農家故に広く、玄関から母屋まで距離があ

る。
「ハルの婆ちゃん、新しく家建てたの？」
樹は荷物を引きずりながら、額に手をかざして家を眺めていた。
「いや、改築だ。俺もこうなってから始めて来たよ」
祖母は祖父が亡くなってから家を改築したのだが、どういうわけかすぐに老人ホームへと移ってしまった。だから空き家となったこの家に住むのはどうかと勧められたのだ。こんなにきれいで立派な家を、住まずに荒れ廃れさせてはもったいない。
「平屋ってのがまた田舎らしくていいな。縁側もあるし」
樹は庭を見渡して、広い広いと感心した。

「あの畑もうちのだよ」
庭の奥にある畑を指さした。昔は、あの畑でとれた胡瓜やトマトをよく食べさせてもらった。冷水で冷やした胡瓜にはスーパーには無い、本当の胡瓜の味がした。また食べれると思うと嬉しくなる。
「でも色々植えてあるぞ。お前の婆ちゃん、住んでないんだろ」
指摘通り、畑には作物が色々と植えてあった。

畑を売ったという話は聞いていない。それなら誰かに貸しているか、もしくは婆ちゃんが時々来ては世話をしているのかの、どちらかだろう。そもそも、まだ元気なのだ。ホームに移った理由も一人暮らしが寂しくて移ったのではないだろうかと勝手に推測している程だ。

祖父と祖母は、今の祖母を除いて皆亡くなってしまった。だから婆ちゃんは一人しかおらず、爺ちゃんはもういない。そう考えると婆ちゃんの寂しさも良く分かる。

荷物を縁側一杯に放り投げて、玄関を開けるための鍵を取り出した。銅褐色をした鍵は所々錆付いて、昭和の風情を醸しだしていた。

「開いた開いた。それよっと」
日本家屋特有の、スライド式玄関戸をガラッと軽快に開け放った。
「おお、畳の匂いがする」
電気のついていない暗闇から、鼻をつく匂いがした。
「カビ臭くは無い？　本当だ、畳の匂いがする」
肩をぶつけて、あまつさえ押しやって、樹は嬉しそうに我先にと靴を脱ぎ散らかしたまま、真っ暗な廊下の向こうへと消えていった。
家主の孫を差し置いて、勝手に上がりこむ無神経さに呆れ、けれどもいつものことだと笑ってしまう。戸が閉まっているために家の中はどこも暗い。案の定、樹はスイッチが分からないと遠くで一人騒いでいた。
「時々、掃除とか喚起してくれたっぽいな」
ようやく玄関の灯りをつけて、床や靴箱を見渡した。人の住んでいない家とは思えない程、塵や埃は一つとして見当たらなかった
婆ちゃんは、今日を見越して掃除をしてくれていたのかもしれない。
「おい、ハル。手紙が置いてあるぞ」
暗闇の向こうから樹の声が聞こえた。
「婆ちゃんからの手紙だろ。きっと掃除もしといてくれたんだな」
靴を脱いで家にあがる。
樹の声を辿ると、灯りをつけた居間に樹は座っていた。テレビをつけながら、ちゃぶ台に肩肘ついて、けれども目線は携帯に落としていた。

「お前の家じゃないんだけど」
くつろぎすぎだ。せめて戸を開けて換気して欲しい。ちゃぶ台の上には手紙が置いてあり、封は閉じられたままだった。さすがの樹もそれは勝手に読まなかったらしい。
「何だって？」
蛍光灯の下で読む手紙を、樹が横から覗く。風呂の沸かし方やら、ガスの締め方、戸締りの仕方、緊急連絡先などが書き綴ってあった。
「ハルの婆ちゃん、しっかり者だな」
樹は心底感心してみせた。

確かに掃除までしてくれていたのなら用意周到だ。不覚にも、婆ちゃんに会いたくなってしまう。
「明日あたり挨拶に行かないとな」
今日は今日で、やるべきことが山積みなのだ。部屋をぐるっと見渡して畳を数える。
「ここが居間で十二畳か。婆ちゃんの部屋以外は自由に使っていいらしい」

手紙を読み終えて、ちゃぶ台の上に落とす。

平屋と言えど、家の広さは一般の二階建て住宅より広い。部屋数が襖を隔てて無数に存在する。
陽射しが恋しいと襖を開けて、雨戸も開けてゆく。幾つもの部屋の窓を開けて、程なくして縁側のある畳部屋に行きあたった。慣れない手つきで最後の雨戸をスライドさせると、目を瞑りたくなるような眩しさと暖かい風が飛び込んできた。
「やっぱいいな、ここ」
懐かしさがどっとこみ上げて、子供の頃に戻ったかのような感覚に襲われた。

縁側のある畳部屋、ここから望む景色は昔からの絶景だ。
小さい頃は、この部屋を陣取るため兄と言い争ったのを覚えている。

春は桜吹雪、夏は入道雲、秋は真っ赤な紅葉、冬は雪景色、その全てが堪能できる部屋なのだ。

縁側に立って、家の中に春を呼びこんだ。開け放った窓からは澄んだ空気が吹き抜けて、改めて新しい我が家の広さを教えてくれた。

庭には桜が咲き誇り、風が吹くたびに花びらを吹雪かせている。目を凝らせば、遠くには雪をかぶった高い山も見えていた。

「よし、メシ食いにどっか行こう」

来て良かったと、心からそう思う。好奇心を掻き立てる景色に元気付けられて、こらからの毎日に期待を膨らませる。これから住む家が満足のいくもので本当に良かったと。

家に戻ったのは二十時を過ぎてから。昼食を取り、引越しに必要な生活品を一通り買い揃えることができた。夕食と風呂を簡単に済ませると、一日の疲れがどっと襲い掛かってくる。

今はもう眠くて仕方が無い。まだまだ片付けやら整理やら、やるべき作業が沢山残っているというのに、居間で風呂上りの火照った体を冷まそうと横になると意識が遠のきそうで苦労する。指の力を借りないと目蓋が閉じてしまいそうだ。

動こうとしない体に、振り絞れる気力さえ使い果たした事に気づいて片付けを断念する。

湯気にあてられて朦朧としたまま、ダンボールから布団を引っ張り出した。それからバタンと音をたてて盛大に倒れこむ。隣を見れば、樹は既に布団の中だ。

お互い自分の部屋の片付けが済んでないので、今日は居間の隣の部屋、縁側に面した部屋で一緒に寝ることになった。火照った体を包むように、布団からは懐かしい匂いと温もりが感じられた。

仰向けになり天井を見上げ、意識が薄れゆく中で思い返す。

今日一日が、とても充実していたと。

とにかく忙しくて、あっという間に夜になってしまった。明日が楽しみだと思う、この気持ちも久しぶりだ。

明日はもっと楽しくなる。そう期待してまどろみに身を委ねた。

## 朝の騒動

眩しさから逃れるように寝返りを打ち『あぁ、引っ越して来たのか』と思い出す。

今が朝であるなら、時間的には十分寝れたはずだ。

けれど、ついさっき片づけを断念して寝たような気がする程、未だ疲れはとれていない。

全身を襲う気だるさが、もっとぐっすり眠れと強く催促している。せっかくなので、まどろみに身を任せて再び目蓋を閉じた。同時に先程から煩わしい何かに文句を言うことにした。

「やめろって……。痛いっての」

なぜか脇腹を執拗に叩かれていた。それは強く、本当に痛い。右手で空中を鞭打ち、不快感の元凶を探った。まだまだ眠っていたいのだ。

「おい樹、なんだよ。やめろっての」

こんな朝方に何の用事があるというのだ。乱暴な起こし方をする樹に、ろくな起こされ方をしないで育ったに違いないと推測する。しつこく続く頭上からの声に呆れて、仕方なく耳を傾けた。

「……兄ちゃん。兄ちゃん！」

聞こえてきた声は、よく知る樹の声ではなかった。

疲れに溺れて悪夢を見ているのだろうか。不思議に思い、重い目蓋を開けて、ぼんやりと声の主を見た。けれど窓からの日差しが眩

しくて、声の主をまともに見ることはできなかった。
おかしい。窓なら、昨日の夜に閉めたはずだ。
「兄ちゃん兄ちゃん。文江さんの親戚の方かい？」
耳に響いたのは、はっきりとした知らない男の声。
「……は？」
朝ボケの朦朧とした意識が急に熱くなるのを感じて、急いで布団から飛び起き、声の主を凝視した。
チカチカと眩しさを我慢しながら見た人物は、全くの知らない赤の他人だった。
「誰だあんた！　何やってんだここで！」
現状を理解できない怖さを克服しようと、精一杯の威勢を張って侵入者を牽制した。ところが侵入者はひどく呑気で「ようやく起きたか～」などと気の抜けた反応を見せていた。
「何をやってんだって……あ？」
口から発する言葉は徐々に小さくなり違和感を覚える。
どうにか眩しさに慣れ始め、身構えながら侵入者を見ると青いワイシャツ姿をしていた。そんな姿や呑気な態度が明らかにおかしい。
まず泥棒という格好ではない。泥棒の格好を見たことないがワイシャツ姿で泥棒する人間はいないはずだ。それに青いワイシャツには、見覚えのあるバッヂが付いていた。それはつまり。
「警察？」
「そうそう警察。警官だよ」
にこっと笑った中年男性は、あぐらをかきながら帽子で顔を仰い

でいた。
「いや、だって、え？」
納得しかけて、やはり納得できなかった。警官が目の前にいる現実が理解できないのだ。つまり悪いのはこちらだろうか。
過去に犯罪を犯した記憶は無い。それでも、もしかしたらと思い浮かぶのは、昨日道端で用をたしてしまったくらいだ。コンビニどころか建物が無い道だったので最後の手段だった。しかも小だ。まさか、それで自宅まで来たという追跡劇はないだろう。訳が分からない。
「なんで……いるんですか？」
身の危険はなくなったので体の緊張を解し『両手を前にだせ』と言われないためにも敬語を使う。
つまりは執拗に脇腹を叩いていた人物は樹ではなく警官だったわけで、それなら樹は一体何をしているのかと振り返る。まさか、この騒ぎで呑気に寝てはいないだろうと振り返って愕然とした。
樹は布団にくるまり丸まっていた。丁寧に頭の先から足の先まで布団をかぶり、音も光も全ての干渉を拒絶していた。
まったくどうかしている。もしもこれが警官でなかったら、本当に泥棒だったなら丸まったまま死んでいたかもしれないのだ。
感じる苛立ち全てをこめて、丸まった布団を蹴った。
「おい樹、ふざけんな！　起きろ！」
いくら蹴ってもモゾモゾするばかりで、まるで進展がない。仕方無しに踵落しを布団の上からくらわすと、ようやく期待していた通

り『うっ……』と、うめき声が聞こえた。

これで起きるだろうと、後ろでしつこく「君、君」と繰り返す警官のおっちゃんに向き合った。

「君、君、文江さんの孫か何かかい？」

その当たり前の質問が、尚更癪に触る。『孫に決まっているだろうが』と心の中で叫びながら、それでも大人な対応をと、警官相手に落ち着いた反応をみせることにした。

「孫ですよ……昨日から来てるんですけど」

多少ぶらっきらぼうに言ってしまうのは仕方ない。返答に安心したのか、警官のおっちゃんはハンカチで額の汗を拭きながら、いやはやと笑った。

「やっぱりそうかい。居ないはずの家に誰かが寝てるもんだからねぇ。びっくりしちゃったよ」

あえて言わせて貰っていいだろうか。

「一番びっくりしたのは俺ですけど」

それだけは声を大にして伝えたい。

叩かれて起こされれば、枕元に知らない中年男性が座っていたのだ。しかも警官だ。びっくりしたのがこちらでなくて、誰だというのだ。

ニコニコ顔の、人柄の良さそうなおっちゃんの顔を見て、はっと思い出す。

それは、昨日しておくべきだった重要なプロセスを忘れていたという過失だ。

引越ししたからには、まず近所に一報を入れとくべきだった。土産もそえてだ。田舎は近所付き合いに真面目で、それだけ敏感なのだ。

見知らぬ人が婆ちゃんの家で寝泊りしてると、どこかの誰かに勘違いされたに違いない。

けれども、おかしいと。そこまで考えて何かが矛盾している事実に気づいた。それはなぜ今朝、寝泊りしている現状に気づいたのだろうかとの疑問だ。

確かに昨日のうち、何回かは家を出たり入ったりした。通報されるのなら、その時に通報されているはずなのだ。

それが今朝に通報されている。それは今朝に寝泊りしている事実に気づいたということではなかろうか。加えて警官が難なく鍵のかかっているはずの家に侵入できているのも不思議だ。映画のように拳銃でドア鍵でも吹っ飛ばしたのだろうか。

頭の中は高回転、けれど顔は浮腫んだままの無表情であれこれと一生懸命考える。

だから、そんな中で寝ている男を許せるはずがない。立ち上がって、多少の抵抗を無視し樹の布団を引き剥がした。

「いい加減起きろっての」

樹はいつの間にか顔をだして、両足をだして、スヤスヤとあどけない寝顔で睡眠状態へと移っていた。現状の全てを無視して、今から二度寝するつもりなのかと樹の布団を剥いで、脇腹を蹴った。

続けて後ろを振り返り、ずっと困ったように笑らっている警官に「どうやってこの家に入ったんですか」と尋ねた。

「あぁ。それはねぇ」

警官は誰かを探すかのように、後ろで開け放たれている窓に目をやった。

窓の外では、割烹着姿の主婦達が心配そうな顔でこちらを覗いていた。その姿に、やり場の無い怒りを感じて溜息を吐く。初日から一体何なのだ。

「えっとね」

終始スローペースな警官が、ゆっくりと口を開いた時。

「おい晴祐！　なんだこれは！」

片手で掴んでいた布団は引っ張られ、樹が仁王立ちよろしく、勢いよく起き上がった。

その姿を見て言葉を失う。髪の毛を見事に逆立てて、パジャマは乱れに乱れていた。口をぽかんと開け広げ、一人威勢良く立っている。その姿は、縁側を通して外にいるその他大勢に丸見えなのだ。

「ふざけんなよ、お前」

そのまま何処かに行って消えて欲しい。

固まったままの樹を見て呆れてしまう。黙れと一喝しようとも思ったが、乱暴に起こしておいて、さすがにそれは可哀相だと思い留まった。

それでもこういう状況ほど説明が面倒だと思うことはない。現状

から雰囲気を感じ取って、理解して欲しいものだが。

「俺らが、勝手に婆ちゃん家に侵入したと思われてんだよ」

目と口を大きく開けている樹に説明する。親切にも警官が説明を加えてくれた。

「そうそう。変な人たちがいるって通報来たもんだからね。いやぁ、身内さんだったとは」

身内に決まってるだろう。何が楽しくて、侵入してからスヤスヤ眠る泥棒がいるのだ。居心地が良くて寝てしまいましたと。そう突っ込みたくて、けれども警官はやはり怖いのでやめておいた。

そしてもう一度、質問する。

「それで結局、誰が俺らを見つけたんですか？」

ふと、質問と同時に、二人の人影がすっと逃げるように窓の影に隠れたのが見えた。故に同時に理解する。通報したのは多分、あれなのだと。

「えっとね。文江さんの畑を世話してくれてる子達がね。文江さんから直接鍵預かってるみたいだよ」

「……鍵を？」

さらりととんでもない実態を知らされた。

鍵を渡してあるなど、随分と親しい人がいたものだ。少なくとも孫である自分は聞いた記憶がない。

この家はいつから公共で使われるようになったのだ。

「さっきまで、あそこにいたんだけどな」

おかしいなと、警官は首をひねった。
「そうですか……」
朝起きて、ずっと緊張していたせいか、今更になって考えるのが面倒になってしまった。

現状把握は完了した。けれど、ここからどうすればいいのかは分からない。遠くでは『ガラガラガラ』という朝を印象付ける陽気なうがいの音が聞こえていた。

「い、いつき！？」
驚いて見回すと、いつの間にか樹がいない。

それはつまり、これからどうしたものかと自分が悩んでいる今、この瞬間に、樹は朝のおめかしをしているのだ。確かに樹は居候の身だ。だからといって、全てを人に任せ、自分は関係ないと、思うがまま自由に行動してもいいのだろうか。理不尽な現実に頭が痛くなる。

引越し翌日の朝。新しい環境には期待していたけれど、正直こんなサプライズは望んでいない。

頭の中に溜まった、もやもやしたものを腹の底に下らせて、気道に登らせ盛大な溜息で吐き出す。

そんな濁った感情を汲み取ってくれたのか警官は、
「それじゃあ、安心したとこで私は帰るかな」と帽子を被った。
「そうしてください。って、ちょ……」

警官は、よっこらせっと人の枕を踏んで立ち上がった。おせじにも綺麗とは言えない所々茶色く染まった白い靴下で。

「ここは良い所だから、ゆっくりしていくといいよ。それと文江さんにもよろしくと伝えといてね」
そう告げた警官は、こちらに来て肩をポンポンと叩いて、縁側から外に出て行った。警官らしからぬ、優しくて柔らかい物腰をした背中は丸っこくて熱そうだ。

「お孫さんだってよ。良かったねぇ。心配ないよ」
警官が野次馬にそう言うと、主婦やジョギング姿をした男性が、大笑いをしながら散り散りに帰っていった。

しばらくして野次馬が消えると警官も庭に止めてあった白い自転車に跨り、手を振りながらフラフラと消えて行った。

## 招待

どれくらい呆けていただろうか。
ようやく静けさを取り戻した新しい我が家。望んでいたはずの平安なのに、なぜか体が動こうとしない。小鳥が囀る中ぽつんとした虚しさに襲われた。無理やり騒ぎ立てられて、いきなり放っておかれるような、一発屋の芸人が味わいそうな虚しさだ。

「まったく何だってんだ」
ようやく言葉を吐き出して、ゆっくりと立ち上がる。

未だ開きっぱなしで冷たい風を寄越すガラス戸を閉めようと縁側に出た。

すると二つの人影が視界に飛び込んできた。それは、こちらを確認すると驚いた表情を見せ、そのまま固まってしまった。

どうやら、ずっと戸袋の陰に潜んでいたらしい。見れば歳の近そうな女の子二人だ。それでいて憎き通報者でもある。

「通報したのって……君達だよね」
二人はビクンと体を強張らせ、お互いの体を寄せ合った。

その反応は、自分たちが犯人だと認めているようなものだ。二人は居心地悪そうに、何を言っていいのか分からないと心底悩んだ表情をしていた。

やれやれと背中をかいて考えた。
彼女達は、きっとご近所さんか何かで、婆ちゃんが色々とお願い

をしていたのだろう。そう考えると、目の前の彼女達を怒るに怒れない。

良かれと思って警官を呼んでくれたのだ。警官の言葉を思い出すなら、畑の管理と一緒に、家を掃除してくれていたのも彼女達であることに気づく。

「さっき聞いたけど、畑の世話とかしてくれてんだよね」
頭をぽりぽりとかいて、できる限りフレンドリーにと心の中で復唱しながら尋ねてみた。
「と……時々ですけど」
視線を合わせようとしない彼女達は、振り絞って出したかのような声で謙虚に告げた。怒っていいはずなのに怒れず、しかもこちらが悪者みたいで非常にやりづらい。

結局、推測通りなら感謝する理由はあっても責めることはできないだろう。婆ちゃんの家を不審者から守るために、今朝の出来事を起こしたのなら尚更だ。

「ここじゃなんだし、居間を整理するからあがってよ」
そう告げて居間に向かう。事の真相は話を聞かなければ進まない。

早速、迎え入れるための準備に取り掛かった。招きの返答を待てば断られてしまうので半ば強制的だ。後ろで「いえ」と遠慮した言葉が聞こえたが、もちろん聞こえない振りをして無視をする。

「いつきー。畑と家の掃除してくれてたのって、あの人達だってさ」
一足先に、おめかしを済ませた樹は、居間でごそごそと荷物を整理していた。寝巻き姿の自分とは対照的に、ジャケットとジーンズを着こなして、完全にお出かけ姿だ。

「マジか、そうだったのか」
樹はびっくり仰天な顔をしてみせた。
「……」
全てを人に丸投げして、その反応はない。空返事だけは立派で腹立たしい。近くにあった雑誌を丸めて樹の頭を殴った。

「いってぇな、何すんだ」
「少しは手伝え」
散らかったタオルや座布団を樹に投げた。無能っぷりに腹をたてているので、顔をめがけて強く投げ込んだ。それでも何の反応も示さず、かえってだるそうに片付ける樹が本当にどうしようもなくて、実に腹立たしい。そして断られないようにと笑顔で振り返る。

「片付けたから入っていいよ。遠慮しないで、どうぞどうぞ」
埃が朝の日差しにあてられて騒がしく舞う中、縁側の向こうの彼女達は互いに数秒向き合い、それから仕方無さそうに頷いた。

「おじゃまします」
来客用座布団らしきものを押し入れから引っ張りだして、彼女達を座らせる。畑仕事をしていたためか、決しておしゃれとは言えない、青いジャージ姿をした彼女達はちょこんと座って不安そうだ。

「そりゃそうか」
聞こえないように呟く。
彼女達の心情を察するに、突然、男二人が暮らす家に招待されれば確かに困るだろう。身を寄せ合っては、俯きがちにこちらの様子を伺っている。気まずい雰囲気を払拭するために、片付けついでに会話を交わすことにした。

「いつも掃除してくれてんだよね。助かったよ、ありがとう」
純粋な感謝の気持ちだ。
彼女達を見て、いつしか嬉しくなっていた。婆ちゃんには鍵を渡して、家の管理を任せられるほど信頼できる人がいたのだ。よほどの信頼関係を築かない限り鍵など渡せない。もしかすれば彼女達のおかげで爺ちゃんが亡くなっても孤独を感じることなく、楽しく過ごせていたのかもしれない。そう考えれば孫としては嬉しいものだ。

「い、いえ。そんな大したことしてないです」
しどろもどろになって否定する彼女達は、さすがにまだ気を許してくれないらしい。そんなやり取りが少し笑える。

「でも助かったよ」
気づけば朝の出来事から来る苛立ちは消えていて、心は軽く爽やかだ。樹がお茶を持ってきたところで、ようやく四人でちゃぶ台を挟み座ることにした。

## 親睦

「実は、昨日引っ越して来たばかりなんだよね」
彼女達の警戒心を少しでも解そうと、こちらの紹介から始める。
ここに来るまでの経緯を順を追って説明していく。
「婆ちゃん、何も言ってなかったのか」
「何も聞いてないですけど……」
だから悪いのは私達じゃないですと、そう言いたげに正面に座る子は拗ねた言い方をした。未だぎくしゃくした雰囲気から抜け出させそうにない。

それにこの二人、よくよく話を聞いてみれば、ご近所さんでもなんでもなく、畑を無料で借りる代わりに家の手入れをしてくれていたらしい。婆ちゃんと彼女達の親同士で親しい交友関係があるとのことだ。

話すべき内容を終えて、会話が止まり沈黙が辛くなる頃、天井を見上げて肩の力を落とした。

さて、これからどうしようかと悩んでしまう。

「あ、あの知ってます？」
静寂を破るように、突如、居間に明るい声が響いた。
「この子、実は熊手で殴ろうとしてたんですよ」
驚いて視線を正面に戻せば、しみったれた雰囲気を吹き飛ばすように、とびきりの笑顔を浮かべている子と「言わないで言わないで」と必死に懇願している子がいた。

拗ねていたはずの正面の子が、隣の子の口止めに必死になってい

た。

あまりの展開に何が起きたのか分からないでいると、
「もうだめっ。言わせてもらうから」と、とびきりの笑顔をした子がもう耐えられないと嬉しそうに顔を輝かせた。

「やめて、友子、言っちゃダメだって」
その動揺した表情から理解する。どうやら喋るなと懇願する正面の子が通報した本人であるらしい。後ろで結んだ髪を激しく揺らし、手を伸ばしては隣の子の口を塞ごうと懸命だ。

通報したのはお前かと、苛立ちは消えたと思っていたのに、いざ犯人が分かれば、冷たく睨めるほどには苛立ちが残っていたらしい。視線に気づいたのか、正面の子はますます表情を焦り顔に変貌させて応戦し始めた。

「だって、よくお爺ちゃんが熊手もってイノシシ追ってたし！」
顔を真っ赤にさせ、泣きそうな顔をして弁解を始めた。困り果てた感情がひしひしと伝わってくる。
「家の中にイノシシは居ないでしょ」
隣からは、忘れかけていた懐かしい声が聞こえてきた。黙っていた樹が狙ってか狙わずか、爽やかな顔してボケたセリフを飛ばしてきたのだ。ややこしくなるので、できれば黙っていて欲しかった。

「そうですよねー。この子抜けてるから」
友子と呼ばれた子は、まさしく満面の笑みで嬉しそうに頷いた。
「イ、イノシシじゃなくて！」
「涼音は昔からこうなのよ」
子供をあやすように、隣の子は正面の子の頭を撫でていた。

「涼音……涼音ね」
反復して記憶する。脳に深刻なダメージでも受けない限り、その名前を忘れることはないはずだ。今朝の出来事で向こう一年のサプライズなどいらなくなったのだから。

「そういや、名前言うの忘れてたね。俺、中野樹、よろしく」
にこやかに笑って、樹は自己紹介した。誰も聞いてないのに、家主の孫を差し置いての自己紹介だ。

「俺は秋津晴祐ね。ハルスケでいいから」
告げてから気づく。自分でも分かるほど、ぶっきらぼうに自己紹介してしまったと。にこにこと楽しそうな樹とは正反対だ。
「歳いくつなんですか？」
「十九だよ」
げんなりした調子で答えた。
「同い年じゃん。何か不思議！」
友子と呼ばれた隣の子は相変わらず明るく言ってみせた。

「わ、私はハル君が昔来た時、遊んだことあるから知ってたよ？気づいたのは、さっきだけど……」
そう続けたのは正面に座る涼音さんだ。そんな彼女の表情を見て、ぽかんと呆気にとられる。『あんた誰？』という発言が喉まで出かかって寸前で止める。彼女はそれこそ顔を赤くして、恥ずかしそうにしていたからだ。そして思い出す。

「あ……、あぁ」
言われてみればと、記憶が蘇る。
「そういえば、ちっちゃくて可愛い子が遊びに来てくれたことがあったな」

田舎に来ても数日が経つとすることがなく、団扇片手にだれていた小学生の頃。婆ちゃんが同い年の女の子を連れて来てくれて一緒に遊んだ記憶が確かにある。その女の子は半ば強制的に自分を遊びに連れ出した。見かけによらずスタミナがあり、最後の方は付き合いきれなかったのを覚えている。

「そう、それ私！　えと、私は氷川涼音って言います！」
ちっちゃくて可愛いというリップサービスを快く受け取ってくれたらしい。そこは逆に突っ込んでくれないと困るのだが。

「思い出したよ。そういやスズって呼んでたな・・・」
朧げな記憶が徐々に引き出されてゆく。遊んだのは幼い時のほんの数回だけだ。山や川や学校に連れて行って貰い、楽しかったのを覚えている。

けれど、どうせ思い出すなら、朝の寝顔を見た時点で思い出して欲しいものだ。警察に通報を終えた今更では遅いんだよと溜息をつく。

「よろしくっ」
樹が歯切りのいい声を発して、ちゃぶ台の上で片手を伸ばした。右手を涼音さん、もとい氷川さんに向けて。

その仕草に、皆が顔にはてなを浮かべ時間を止めた。長い付き合い故か少しの間を置いて理解する。

「握手か……お前それセクハラだぞ」
樹は握手をしようと手を差し伸べていたのだ。驚いて、困惑し、右手をかばい、けれど仕方なくすごすごと手を差し出す氷川さんが可哀想に見えた。

「あっはっは。私は、白井友子、よろしくね」
隣に座り、終始氷川さんをいじめていたショートヘアの子の苗字も判明した。白井さんも楽しそうに笑って樹と握手をしていた。もちろん自分はしない。断じてしない。

ようやく場の雰囲気も柔らかくなり、お互い色々と話せるようになった。氷川さんも人見知りなだけで打ち解ければ明るく話してくれる。彼女達は朝のハプニングを熱く語り始めた。

延々と繰り返す話を要約すれば、まず氷川さんが最初に鍵を開け、自分達の健やかな寝顔を見たとのこと。めったに見せない、あどけない寝顔だったろうにそれを見た氷川さんは一目散に逃げたのだ。そのまま倉庫に走り、熊手を取り、引き返して玄関に入りこんだ所で白井さんに捕まったらしい。白井さんが『そんなことしたらだめだよ』と諭し氷川さんは仕方なく同意した。

だから白井さんに感謝しなければならない。
熊手で叩かれていたら、きっと今は病院のベッドの上だ。

それから氷川さんの『じゃあどうするの？』の問いかけに白井さんが『普通に起こせばいんじゃないの？』と言うが『だめ。警察呼ぶっ！』と氷川さんが地元交番にＴＥＬをしたというわけだ。一一〇番ならパトカーが来てしまうため、そこは抜けた性格で助かった。交番に電話してくれたので、あの柔らか警官のおっちゃんが来てくれたのだ。

それにしても、と考えてしまう。
熊手で殴って追い返すなんて、本当に強盗が相手ならその手段は危なくないだろうかと。理解不能なので『まぁ田舎だからな』と無

理矢理に納得するしかない。

会話に会話を重ねている彼女たちは『やらなくて良かったよね～』・『だよね～』と未だ目の前で盛り上がっている。そんな和気藹々とした雰囲気を壊したいとは思わないので一緒に笑い合う。それでもいい加減、疲れてしまった。

柱の掛け時計を見上げると十時を過ぎていた。未だ朝食も取っていない。そろそろ潮時と考えて行動に移すことにした。

「もう十時か・・・」

そろそろ解散したいと、気持ちをこめて言ってみた。よくこんな時間になるまで話せたものだ。

「ホントだ。朝食食べてないな俺ら」

よく言ったと、樹を心の中で褒める。あとは彼女達が『失礼しようか』と言ってくれれば全てが順調に進むはずだ。

ところが、彼女達は二人で顔を見合わせて嬉しそうに口を開けた。

「それじゃ、ご飯食べれる所に連れてってあげようか？　まだこの辺詳しくないでしょ」

なぜか得意げに勧められた。予想していなかった返答に驚く。

「ほんと？マジで？」

隣では食いつくように、樹が嬉しそうにした。

「うん、全然いいよ」

「そうしてくれると助かるよな、ハル！」

樹のきらきらした瞳にたじろいだ。視線を自分・白井さん・自分・白井さんと何度も往復して喜んでいる。

はっきり言わせてもらえば寝させて欲しい。朝からどれだけ気力を使ったか、思い返せば計り知れないからだ。それでも、近辺を教えてくれるという提案は助かるわけで、樹もそれを望んでいる。仕方無しに同意することにした。

「そうだな、この辺、何も分からないしな」
家の前の県道を下り、駅に向かう以外は右も左も分からない。近くに買い物しやすい商店街があるかもしれず、バイトできそうな場所もあるかもしれない。

「いいよ。今日は予定無かったし、お詫びも兼ねてってことで」
氷川さんも、顎に指をあてて同調してくれた。

「ついでに、婆ちゃんのとこ行って挨拶してくるか」
それが今日、やらなければならない重要事項なのだ。朝食取る前に婆ちゃんに挨拶しようと決めて、身支度を始める。白井さん達に戸締りを手伝ってもらい、倉庫から使い古された自転車を引っ張り出して、いざ見ず知らずの田舎街へと出かけて行くことにした。

## 祖母

「後で行くからな。またな」
ガラスの引き戸が勢いよくドンと閉じて、手が挟まれそうになった。

「すげぇな、ハルの婆ちゃん」
婆ちゃんは扉の鍵を閉め、颯爽と老人ホームの中へと消えて行った。久しぶりだというのに、にべもない反応だ。
「文江さんらしいね」
氷川さんは笑って、まるでいつものことのように言ってみせる。

「いつも、あんな感じなの？」
孫ながらそれは知らなかった。
「いつもだよ。お友達さんが多いみたいだからね、文江さん」
「それはつまり、婆ちゃんは久しぶりの孫より、いつでも会える友人を優先したのか」
心に微かな痛手を受けてしまう。

「というか、若々しいよなハルの婆ちゃん」
樹が妙に感心していた。
「それ、褒めてんの？」
「悪くはないと思うけどな」

樹の言う通り、確かに悪くはない。人間そのくらい愛嬌があるほうが良いだろう。元気なのも何よりだ。それでもせっかく土産持って訪ねたのだから、もうしばらくは居させて欲しかった。

「そんなに、卓球が好きなのか婆ちゃん」
追い返す理由はホームで卓球大会があるから。
「それは知らないけど？文江さん何でもできるんじゃない？」
孫以上に孫らしく、優しそうな微笑を浮かべて氷川さんは言ってみせた。

「元気でいいじゃんか。ハルの婆ちゃんいくつだよ？」
「七十後半とかそこらだった気がするけど」
そう考えれば、ホームの中では若い方なのかもしれない。

「まぁいいか。後で来るって言ってたしな」
頭を切り替える。もはや消えてしまった婆ちゃんの事で、ぐだぐだと呟いても仕方が無いからだ。朝の出来事を伝えたとしても、どうせ流されてしまうだろう。

今はまず、婆ちゃんが元気だということさえ分かればいい。久しぶりに見る近しい親戚なわけで、これから会おうと思えばいつでも会えるのだ。ただ婆ちゃんの自己中心的な性格が、どこか自分と似ていて恥ずかしさを覚えた。

「それじゃあメシ行こう、メシ」
樹は意気揚々に白井さん達の元へ駆けて行った。
「はいはい。涼音いこっ」
白井さんは氷川さんの腕を引っ張って先陣を切った。

その後ろを、嬉しそうに付いてゆく樹は嬉しそうだ。どちらがストライクだったのか、後で聞かなければいけないと思うほどに。こうして、どこにでもあるファミレスだけには行かない事を願って彼女たちに朝食を委ねた。

「いやあ、午後は充実してたな」
暗闇の中、街灯の下でオレンジ色に照らされた樹は艶やかな顔をして言った。気づけば辺りはすっかり暗くなっている。

「そうだな、助かったよ。ほんと、ありがと」
今まで、街中をあちらこちらと案内してもらい、買い物できる場所も教えてもらった。買い物がてらに近所の人に挨拶することもできた。今朝のお詫びとはいえ、何から何まで親切丁寧に教えてくれたのだ。
「うん。何でも聞いてね、何でも知ってるから」
隣で自転車を押す氷川さんは得意げで楽しそうだ。

「頼もしいな」
樹は感心した。
「実際に決めてあげたでしょ。バイトだってね」
白井さんもまた誇らしげに言ってみせた。
「ありがとう。ほんと感謝してるよ」
そう告げて、少し大げさに頭を下げた。

思いがけず、彼女達の働きでバイト先まで決めることができたのだ。求人募集している所を良く知っているのは、さすが地元民と言うべきだろうか。樹はコンビニで働くことになった。予備校のカリキュラムと合わせてシフトを組めるのだから都合が良いだろう。

自分はといえば、
「……ハルのバイトはいつからだって？」
樹が、にやにやと人を小馬鹿にするように言った。
その表情が妙に腹立たしい。氷川さんは急に静かになって俯いて

しまい、白井さんは妖しい笑みを浮かべている。

理由は明解だ。これから自分が勤めることになったバイト先を面白がっているのだ。

見つかったバイト先、それは氷川さんの実家が経営するお店だ。

「明日からだよ。氷川さん、よろしくね」

下を向く氷川さんに軽く会釈した。

彼女達は健気にも色々と取り計らってくれたのだ。樹のバイト先は早々と決まったものの、自分のバイト先はどこも今日のうちに決めれるような所は無く、というより、今日中にバイトを決める理由など無かったのだけれど、地元の意地故か白井さんと氷川さんは一生懸命に探してくれた。しかしそれでも見つからなかったのだ。

だから氷川さんが携帯を取り出して『お父さんにウチで働かせられるかどうか聞く』と言い出した時は本当に驚いて、どうかいらないと言ってくれますようにと心から願った。

「うん。会計を勉強してたなら店のあれこれを任せられるって、お父さん喜んでたよ」

困ったことに了承され、しかも期待されてしまった。

普通は期待されれば喜ぶべきなのだろう。しかし正直困ってしまう。かなり複雑な心境だ。何やらとてつもない重圧が圧し掛かり、バイトならではの気軽さも無くなってしまった。簡単には辞められない。

それでも氷川さんが親父さんにかけあってくれたことは感謝すべきことで素直にありがたい。

「助かったよ、ありがと。お母さんが良くなるまで世話になるね」

「うん……」

言葉の最後に気を使った。バイトが決まったからといって無邪気

に喜べない理由がそこにはあった。

現在、氷川さんの実家は大変な状況にある。

氷川さんのお母さんが重い病気にかかってしまい、ずっと入院しているらしいのだ。だから店を回す人手が足りないと聞かされた。

「すぐ良くなると思うけどね。明日は九時までに来てくれればいいみたいだから」

「そっか、了解」

暗がりの中で氷川さんは笑ってみせた。まるで心配無いから気にしないでと言っているかのようで、儚くて寂しい笑顔に見えた。だからそんな表情に胸が痛んで、目をそらす。逃げるように皆からほんの少し先を歩いて、親父さんの言葉を思い出した。

氷川さんのお母さんの容態、実際は楽観できるものでは無いらしい。親父さんが電話越しに『実はですね、涼音には言うなと言われてるんですがね』と詳細を教えてくれた。それはとても重い病気で深刻なものだった。氷川さんを隣に親父さんの話をこっそり聞くのは後ろめたい気がした。しかもそれを知ったからといって、何かの役に立てるわけもなく、ただ知ってしまったことの罪悪感が残るだけだった。できる事といえば、明日から与えられる仕事を懸命にこなすという慎ましいものでしかない。

後ろを振り返って氷川さんに目をやれば、樹や白井さんと楽しそうに笑い、盛り上がっていた。辛い現実に直面しても明るく振舞えるのは心が強い証拠なのだろう。だからそんな氷川さんが格好良く見えて、羨ましく思えた。いつかは自分もそんな風になりたいと。

分かれ道を前に、彼女達と別れた。樹は手をぶんぶんと振って、また来てねなどとぬかしていた。

「さてと、帰るか」
未だ、暗闇の彼方を名残惜しそうに見つめる樹を促して自転車をまたぐ。車も人も通らない田舎道、片側に続く田んぼには街灯がゆらゆらと映っている。明るい列車の中からではなく、こうして暗がりの中に佇んで始めて、夜の田舎がそれなりに明るい事に気づく。月明かりも明るく、優しい金色が夜道を照らしていた。

「幸先すげー良くね？」
息を切らせて横に並んでみせた樹は信じられないと喜んでいた。その表情につられてか一緒に嬉しくなる。朝は最悪でも、結果として何もかもがうまく運んでくれたのは紛れも無い事実だ。

高校卒業したばかりの自分達にとって、学校に行かず勉強するだけの田舎では友達を作る機会は無いだろうと諦めていた。ところがどうしてか、今こんなことになっている。

きっかけはあまり喜べないけれど、こんな形で知り合いができたのは予想外で、とても嬉しい。それに一人でも現地で知り合いができれば芋づる式に増えていくかもしれない。疲れた時にする溜息ではなく、何かをやり遂げた時にするような、ほんの少しの嬉しさを含んだ溜息をして首をほぐした。

「そうだな。バイトも決まったしな」
半ば無理矢理ではあったけれど、これで生活の心配は無くなった。
「氷川さんと一緒に頑張ってこいよ、同じ浪人生なんだし」
「……そういや、そうだったな」
昼間、氷川さんに何処の大学に通っているか聞いたのだ。すると氷川さんは困った顔をして『お母さんが大変で大学行けなくなったから』と教えてくれた。あの時の表情を思い浮かべると、今更なが

ら聞かなければ良かったと後悔する。目指していたのは美術大学だ。

「美大を目指してるってことは、樹と一緒か」

樹もまた美大志望だったはずだ。

「いや、俺はグラフィック関係だけど、氷川さんは絵画関係だろ」

まったくの別物だと、樹は告げた。どちらも絵のような気がするが、本人達には明確な区別ができているのだろう。

「それで白井さんが看護士専門学校か」

あの誰とでも仲良くなれそうなフレンドリーさは、確かに看護士という職業に向いているかもしれない。ただし毒舌が過ぎる。今日一日でかなり堪能してしまった。初めて出会ってああなのだから、くだけた仲になれば、更に酷いかもしれない。いつか白井さんに看てもらう患者達のことが少し心配になった。

こうして、あれこれ思い返せば、本当に色々と教えてもらったと気づかされる。聞かなければ良かったと、後悔する場面もあったけれど結果としてお互いの背景を知ることができた。知らずのうちに頬が緩んでしまう自分が恥ずかしくて、スピードを緩めながら樹を先に行かせた。腕時計を見ると二十一時を少し過ぎていた。東京なら、店も閉まらず夜はこれからという時刻だ。騒がしくて騒ぎたくて、何をしようかと企んでいる、そんな時間帯だ。

前を走る樹がこちらを振り返った。

「ハル、お前はどうすんだよ」

幾分、真面目な口調で尋ねてきた。

「俺ね」

樹と氷川さんが美大、白井さんも専門なら俺は、といった具合なのだろう。結局、樹にとっては一番知りたい事なのかもしれない。

「そうだな」
一休止置いて、考える。樹との仲は年齢と同じだ。樹の母親と自分の母親が幼馴染であり、家も近所にあった。樹は生まれた時から傍に居て、兄弟といっても過言ではない程の毎日を遊んで育ってきた。

真面目な相談を真摯に理解してくれる、数少ない親友と呼べる存在だ。例え、弱音を吐いても馬鹿にはしない。そう信じる事ができる友人だ。

だから本音を告げる。
「全然分からないんだ。今のままじゃ駄目だ、とは思うんだけどさ」
こんな考えを抱いてしまう自分は駄目な人間なのだろうか。

これから大学を目指すのか、それとも就職するのか、それさえも決めていない。決めていないというより、そうする必要が無いような気さえしてしまう。もちろん、それが誤った幻想であることは分かっている。このままではいけないと、焦る気持ちだってある。でもやる気が起きない、したい事がないのだ。

だから、これからどうすると聞かれても正直分かるはずもない。そんな心境を察してか、樹は遠くを見つめながら気を使って答えてくれた。

「そか。それなら、いつか頑張って、田舎に家でも建てようぜ」
田舎暮らしにそこまで憧れてはいないけれど、樹は何かを頑張るための口実として言ってくれているのだろう。その優しさは、相変わらずだ。
「そうだな。まずは明日からバイト頑張ってみるわ」
行動しなければ、先には進めない。頬が引き締まるのを感じて明

日へのやる気を振り絞る。

ここに引越して来て良かった。まさに今日、そう思う事ができたのだ。些細な変化だけれど、明日を期待する気持ちを思い出すことができた。ただ日付が変わり、朝を待つだけの明日とは違う。

冷たい空気に体を震わせて、ペダルを押し込み家路へと急いだ。

## 氷川商店

翌日の朝。目頭に暖かさを感じてゆっくりと目を開けた。

目蓋を擦りながら起き上がり、しばし布団の上でぼんやりする。

なんと爽やかで清々しいのだろうか。

高窓から朝日が差し込む静かな部屋。警官の声も、乱暴な手も見当たらない。思わず小鳥達と一緒に鼻歌を口ずさんでしまうような、素晴らしい朝を向かえることができた。昨日とは大違いだ。

それだけではない。今日は、記念すべきバイト初日でもある。

疲れが残る体を引っ張って、約束の時間に遅れないようにと身仕度を始めることにした。朝食を済ませ、歯磨きを済ませ、髪を整えて、無難な服をチョイスして鏡の前で気合を入れる。

今から家を出れば約束の九時には余裕を持って到着するはずだ。そう考えると、緊張からか、そわそわして止まらない。

いざ玄関を飛び出して、靴を履きながら庭の倉庫へと駆けて行く。

「田舎に来たって感じだな」

踏めば押し返してくる柔らかい土の感触も、四季を感じさせてくれる風の匂いも、田舎ならではだ。

倉庫の中に入り、壁にもたれかかっている使い古した自転車を引っ張り出す。現役を引退したと言わんばかりの錆付いた自転車も、昨日今日と使い、更にこれからまだまだ働いて貰うつもりだ。

自転車に乗り込んで、ペダルを踏み込むと驚くほど前に進んだ。ペダルが軽く感じるのは逸る気持ちからなのか、それとも新しいことを始める嬉しさゆえなのか、どちらにしろ悪い気はしないので、ぐいぐいと漕いでゆく。四月を目前に控えて、春らしい暖かい風が後押しするように吹いて気持ちが良い。

地図を手がかりに［氷川商店］を目指す。

古都の雰囲気を醸し出す町並みを走り抜けて、ようやく目の前へと到着した。朝市のたつ、川沿いの道路に面した一画。賑やかな人ごみが行き交う中に氷川商店は佇んでいた。

野菜直売店や土産屋が、ずらっと並び、威勢の良い掛け声があちらこちらから飛んでいた。

自転車を道端に止めて人ごみに紛れ込む。人と人との隙間をすり抜けて、ようやく氷川商店に近づくと、遠目でも分かるほど店内は客でひしめき合っていた。そんな雰囲気に一瞬躊躇して、恐る恐る暖簾越しに覗きこむと、忙しく動き回る氷川さんと多分そうであろうと思える親父さんがそこにいた。

さて、どうしたものかと思案する。

氷川さんも親父さんも声をかけられる状態ではないのだ。レジの周りには人だかりができていて、声をかければ迷惑をかけるはずだ。自分としても、客と同化しているので気づいてはもらえない。それでも、このままではいけないと、レジ脇に近づいて親父さんらしき人に声をかけることにした。

「あの、すいません。秋津ですけど」
向けられたのは、点となった瞳。
しばらくの沈黙を過ぎてから、今度は瞳を大きくした。
「お、おぉ。早いね！よろしく」
忘れてましたよね、という言葉を飲み込んで返答する。
「いえ、忙しいのにすみません。よろしくお願いします」
人ごみから様子を見るに、開店時刻は朝早いのだろう。朝市がたつならば七時か八時のはずだ。書き入れ時に手を止めてしまった事に焦りを感じる。
「全然、構いませんよ。私が氷川です。これからよろしく頼みます」
親父さんは、深々と頭を下げた。その声は、やはり昨日の電話と同じ声だ。柔らかな物腰に加えて丁寧な口調、一目見るだけで分かる良い人だ。
「これからお世話になります」
応えるように頭を下げて、あまり期待しないで欲しいと願う。土産屋で働くのは始めてなのだから。
「それでは皆に挨拶しましょうか。こっちに来て下さい」
親父さんは手招きしつつ、レジ脇から店内の奥へと進んで行った。
振りかえって店内を見れば、氷川さんは客の対応で忙しく、自分が来ていることさえ気づいてないようだった。
やがて倉庫を通り抜け、裏口の扉も過ぎて路地を歩くと立派な蔵のある屋敷に辿り着いた。

親父さんは首に巻いてある手拭で額の汗を拭い、
「皆を呼んでくるからね。ちょっと待ってて」と言って白壁の大きな蔵の中へと消えていった。

ぽつんと一人残されて、辺りを見渡す。

氷川家であろうこの敷地内には、蔵の他にも住家が幾つかあってとても広い。庭も何処かの庭園のように風流がある。一回でもいいからこんな家に住んでみたいと、適いそうにない夢を描いていると、蔵の中からぞろぞろと沢山の人が歩いてきた。

## 職場

結局、氷川商店に戻れたのは十二時を過ぎてから。

今まで、およそ三時間近く、蔵で働いている親戚筋と思われる人たちに挨拶をしていた。

何人もの人に自己紹介を繰り返すというのは中々大変だった。自己紹介から始まり、出身地、年齢、学歴、趣味にまで話は及んだ。どうせなら皆一斉に自己紹介できればと、半ばげっそりし始めた所で、ようやく全員に挨拶を終える事ができたのだ。

親父さんは『それじゃお店のほうを任せたいんだけど、後は涼音に聞いてください』と告げ、肩をぽんぽんと叩いてから『よろしく』と告げ敷地の奥へと消えていった。

今は、客足の途絶えた氷川商店で氷川さんを探している真っ最中だ。

「氷川さん、いる？」

恐る恐るレジ裏の休憩部屋を覗いた。いない。トイレの中も確認する。いない。失礼の無いよう、毎回ノックと挨拶をしながら未知のドアを開けるのだが、誰もいない。先程までの忙しさはどこにいったのか、店内に客は一人もおらず、ひっそりとしている。

「朝市の時間過ぎるとこうなるのか」

暖簾越しに道路を見て納得する。人がまばらにしか歩いていないのだ。シャッターが閉まっている店さえあった。

「これからどうすっかな」
氷川さんは見つからないままだ。かといって、探すためにここを離れるわけにはいかない。もし離れれば、店内に誰もいなくなってしまう。

仕方なく店内を探索することにして入り口付近を見れば、先程までは気づかなかった壁と同じ色をした扉があることに気づいた。倉庫か何かだろうと開けてみると、案の定、商品の幾つかが包装待ちの状態で畳の上に転がっていた。

「誰もいないな。泥棒来たらどうすんだよ」
そう言って扉を閉めようとした時、不意に言葉を失った。

なぜかどうしてか自分の目に映る物が信じられず全身の毛が逆立った。静まり返ったその部屋には、まるで家具と同調するかのように、まったく動かないお婆さんが座っていたのだ。

「まさか……」
死んでいる、と言おうとして口を噤む。

注視すれば、小さく開いた口から、微かな寝息が聞こえていた。頭を垂れ、身動き一つしない様は、良く出来た蝋人形のようで不思議な恐ろしさを漂わせていた。とにかく起こしてはまずいと、慌ててその場を後にする。

「……誰だい？」
部屋から退出して、あとほんの少しで扉を閉め終わるという瞬間。お婆さんは「涼音かい？」とドア越しに尋ねてきた。その声に焦

り、どう言い訳をしようかと混乱する。

こちらの名前を言ったとして、分かってもらえるだろうか。知らない男が侵入して来たと、大声を出されたらどうしようかと動揺してしまう。

それでも正直に答えるしかないと、

「失礼します。今日から働くことになった秋津ですけど」

ドアを開けて「すみませんと」とお辞儀した。どうしてこの部屋に入って来たのか、あんたは誰だ、などと聞かれませんようにと願い、お婆さんの言葉を待つ。

「そうかい、よく来てくれたね。よろしくね」

お婆さんはにっこり笑って、深々と頭を下げてくれた。どうやらお婆さんにも事前に話は通じていたらしい。

「よろしくお願いします」と、同じように深く頭を下げた。

「お店の中は見たかい？」

「いえ、まだ全部は」

「そうかい」

そう言ってから、お婆さんはゆっくりと立ち上がった。目の前を通り過ぎ、徐に草履を履いて店内に入っていく。

「私は涼音を呼んでくるから、色々と見ておくといいよ」

腰に手をあてて、お婆さんは言った。その言葉に嬉しくなる。

「あ、ありがとうございます。そうします」

これで、ようやく放置状態から開放されるのだ。店内に一人は寂しかった。お婆さんは腰を叩きながら「頑張ってな」と言い残し、

レジ奥の通路へと消えていった。

「さてと。どれが何だって」

背伸びを一つ、やる気を奮い起こした。

お婆さんの言う通り、まず必要なのは商品知識だろう。生憎ここで売られているものについては全く知識が無い。入り口付近から順番に、商品を手に取った。味噌と日本酒とが主製品として陳列されており、それを補うように漬物、お米、土産物などが並んでいた。

これは思っていたより大変だ。まず料理に興味を抱いたことがない。自分で料理を作る時は、それなりに美味しければ良いと満足してしまっている。売る側にとって商品に関心がないのは致命的だ。

日本酒に限っては未成年で飲んだこともない。商品に愛着を持っていないのに、客に勧めることなどできはしないだろう。

というより、

「おせぇ。　じゃなくて、遅い！」

客商売なら、どんな時でも汚い言葉を使っては駄目だと言葉を訂正した。

時計を見れば、お婆さんが出て行ってから三十分以上が経っていた。

先程までは例え客が来て応対に困っても、お婆さんが起きて応対してくれただろう。何とかなったはずだ。けれど今は本当に一人ぼっちだ。客が来たら、もはや「店員どこだよ」と言って客の振りをするしか方法がない。

お婆さんの『頑張ってな』は『一時間ばかり放置するけど、頑張ってな』という意味だったのだろうか。人が恋しい。腹も減った。九時出勤で、既に十三時を回るところだ。

「……うまい」

心とお腹を慰めるように、試食用の漬物をつまんだ。口に入れた柴漬けは、こりこりとした食感はもちろんのこと、しょっぱ過ぎず薄すぎず、上品な味付けでとても美味しかった。ぱくぱくと、辺りの漬物をつまんで味を比べる。どの漬物も素朴で濁りの無い味わいが、文句なしに美味い。もう、これで腹を満たそうかとも考えてしまう。

全種類の試食を看破しようと歩き回っていると、突如、真後ろからドンという音が響いた。驚いて何事かと振り向くと、目の前にも自分と同じように驚いた表情があった。

「ハル君？何やってんの？」

目の前の氷川さんは慌てて来たらしく、荒い呼吸のまま驚いてみせた。『何やってんの』と言われても、放置されていたのだから答えようが無い。むしろ何かをやらせて欲しいくらいだ。

けれども、今の自分は右手に爪楊枝、左手に試食容器を手にしていた。加えて、口の中には漬物がある。喋るために口を開けれず、手で口を覆って高速で噛み砕いた。

「それ、美味しい？」

何とも答えられない姿に痺れを切らしたのか、氷川さんは『ご飯食べてないの？』と言うような眼差しを向けてきた。

「いや、別にお腹が空いてた訳じゃないよ？」

憐れむ眼差しに、男のプライドが嘘を吐かせた。そして後悔する。
本当は『ご飯、持って来てもらって良いですか？』と言いたいぐらい腹が減っている。男のプライドなど、腹の足しにもならない。いっそ捨ててしまえれば、どれだけお腹が喜ぶだろうか。

「そ、そう」
氷川さんは、こちらの言葉をどう受け取ったのか、ぎこちなく目をそらした。その仕草が嫌な予感を抱かせる。

「それよりお父さん何だって？」
やはり昼食の話題は変えられてしまった。
「……詳しくは氷川さんから聞くようにってさ」
親父さんから告げられた言葉を告げる。

「え？本当に？」
氷川さんは驚いて目を大きく開けた。

その反応に、こちらの方が驚愕する。やはり知らされていなかったのかと。そうではないかと思っていたのだ。親子のコミュニケーションはどうなっているのかと、親父さんに『頼むぜホント』と言ってやりたくなる。

氷川さんも呆れたように笑って、
「しょうがないなぁ、お父さん」とはにかんだ。

そして手馴れた様子でエプロンを着た。きりっとした横顔を見せて氷川さんは口を開けた。
「レジ打ち経験は？」
「あるよ」

「どこで？」
「時計販売店で」
「時計かぁ……」
なにやらメモ帳に一生懸命書きこんでいる。

「それでこの前までは、会計の仕事をしてたんだよね？」
頷いて返答すると、氷川さんはペンを口に当てて何やら考え込み始めた。
「接客はどう？　苦手？」
「得意だよ。超得意」
「本当に？」
疑るような視線を、わざとらしい笑顔でかわした。実際は得意でも不得意でもない。求められるなら応じる、それだけだ。

「うーん。平日は電話注文が多いから、そっちが主な仕事かな」
接客は私がするし、と付け加えた。

それはそれで、何だか戦力外通知を受けたようで釈然としない。
「それじゃあ早速レジ打ちからやってみようか」
氷川さんは、なぜか上機嫌で鼻歌を口ずさんでいる。

レジ打ちの仕方、商品知識、注文の取り方、氷川商店の歴史、家族構成、氷川さんは途切れる事なく情報を遣してきた。　そんな高速に回り続ける口を眺めて確信する。氷川さんにとって、自分が始めての部下に違いないのだと。仕事を人に教えた事が無いのだろう。仕入先との揉め事など、今言われても困るだけだ。

ひたすら文字を書き殴って、シャーペンの芯をカチカチしていると、氷川さんは一呼吸おいて「あと、みんな氷川だから名前で呼んでね？」と付け加えた。

「名前？」
「う、うん」
言うことは、もっともだ。
「えと、涼音って呼んでくれればいいから。学校でもそう呼ばれてたし」
顔を真っ赤にして、そう続けた。
その姿に固まってしまう。それは無理だ。
どう考えても上司である氷川さんにそんな呼び方はできない。
「あい、じゃあ涼音さんで」
行使したのは分かった様で分かっていない、とぼけたフリして納得する作戦だ。
そもそも『涼音』なんて親父さんの前で呼べるわけがない。幾ら温厚な親父さんでも嫌な顔をするに違いない。
氷川さんは不満そうに、違うと言いたげなので、話題を変える。
「あとさ、持ってきた方がいい物ってある？」
カッターとか必要？と言ってみせた。
氷川さんは一瞬言葉につまりながらも、投げやりな口調で「カッターはあるからいいよ」と言ってみせた。結局、それからは洪水のような講義をメモして、一通りの実習を終えて初出勤は終わった。
昼食をとれなかったのは言うまでも無い。

# 鈍感

働き初めてから、ひと月。

四月も後半、桜は世代交代して染井吉野に代わり八重桜が散り頃を迎えていた。

気づけばあっという間の出来事だ。早寝早起き、時々夜更かしでまさに青春を謳歌している。

もはや週末の休日を楽しみにしたり、まだ〇〇時なのかと溜息をつくことも無くなっていた。そしてそれを思い出す時に溜息がでてしまうのだ。

ついこの前の日常、高校生であった時。授業中には何度も時計の針を追って溜息をつき、放課後は楽しくもないバイトで忙しく働き、草食動物のように寝てはふらふらするの繰り返しをしてみたいと願っていた。

もちろん休日はそのように過ごしていたのだが、願った通りに一日を過ごすと、無駄に過ごしてしまったやるせなさに襲われた。そんな時期があったなとぼんやり考える。

「ねむい」

氷川商店の店先にある畳椅子に座って日光を浴びる。ここは試食をするための、ちょっとした茶飲み所だ。

眠気を誘う春の陽気は、体の中の悪いものを消毒してくれそうで気持ちが良い。周りを見渡せば、どの樹木も緑を装いつつある。書

き入れ時を過ぎた今の時間が数少ない幸せの時間だ。癒されるなぁとしみじみ感じてうっとりする。

今のこの仕事、氷川商店での仕事は、はっきり言って暇そのものだ。朝市の立つ七時から十時の間は忙しいものの、他の時間はのんびりと過ごせる。

以前のバイトを思い返せば、時計屋は忙しくて休憩どころではなく、会計事務所さえも数字との格闘で目と肩が疲れて大変だった。それに比べれば楽で仕方が無い。

お客さんの愛想も良く、声をかけて無視されることも無い。最近は質問されてもどうにか答えられるようになってきた。だから、やりがいも感じられるようになってきた。

労働環境の良い職場だと考えながら、ほうきを片手に、うとらうとらする。

「あったけーな、ほんと……」
きっと、こういうのを春うららと言うのだろう。

「ハル君、大丈夫？　すごい眠そうだよ？」
いつの間に隣に居たのか、氷川さんが顔を覗かせていた。いつものエプロン姿に、親父さんの健康サンダルを履いている。

「今日暖かいよね」
うつらうつらしていた言い訳をする。
「うん、あったかいよね。眠くはならないけど」
きっぱりすっぱり氷川さんは言った。

すっかり上司らしくて困る。つまりは眠気を払拭しろと言っているのだ。

氷川さん自身、レジ脇に座りながら時々居眠りしている時がある。自分は、どんなに眠くても寝る事は絶対にないと言ってやりたい。

しかしそれでも、今日の春らしさは恐ろしいくらいに眠気を催し、心をうらら状態にしてしまうのだ。

「さて、掃除頑張るかな」
頑張ってますよと、アピールするために声にだした。
椅子から立ち上がって、風に運ばれた花びらを集める。

「ねぇハル君。もうこっち慣れた？」
その声に振り返れば、氷川さんは嬉しそうな表情をしていた。

「いや、まだまだかな」
掃く手を止めて遠くに望む山々を見つめた。
「むしろ慣れたくないよ。楽しいし」
今は毎日が新鮮で楽しい。この新鮮さが無くなってしまうなら、そちらの方が怖いくらいだ。

そう言うと、氷川さんは、
「いいな。私もどっか行きたい」と残念そうな笑みを浮かべた。
「……」
桜の花びらが舞っているせいか、その笑顔は儚くて、寂しさが垣間見えた。家庭の事情を知っているだけに、無言という返事をするしかない。

「描いてみたい絵は沢山あるんだよ？」
待ちきれないように顔を綻ばせて、氷川さんは青く澄んだ空に筆を滑らせた。大学に行きたいと、そう瞳が語っている。

「いいね。俺も絵、描いてみようかな」
もしかしたら熱中できるかもしれないと笑ってみせる。

「そういえば、ハル君はどこの大学行くの？」
畳椅子から身を乗り出して氷川さんは興味深々な瞳をよこした。
「んー、どうしよっか。行く気もないんだよね」
自嘲気味に言ってみせた。

最近は毎日が楽しくて、将来を考える暇がない。

同年代の友達の中にも、フリーターのままやりたい事を探している連中が沢山いる。やりたい事も無いまま大学に行き、勉学ばかりに励んでも仕方がないと、自分は思ってる。今は、やりたい事を探すほうが優先だ。

「え。　……本当に？」
氷川さんは、冗談を言っていると思ったのか、苦笑いを浮かべた。
。

「何かさ、やりたい夢が見つかるまで、ここに住んでるかな」
水も空気も野菜も、ここは全部が美味い。いっそ、氷川商店に就職でもすれば楽しくなるのではないだろうか。こんなぽかぽかの陽気が続くなら、それも悪くない。

「夢とか……ないわけ？」
「ないない、さっぱり無い」

夢があったらこんな所にはいないと笑って、遠くに見える山並みに向けて背伸びをした。

「……」

風がさらさらと吹いて沈黙が訪れる。

反応が無いまま、不思議に思って振り返ると、畳椅子に氷川さんは居なかった。

暖簾越しに店内を覗けば、背を向けたままレジ脇から倉庫の方へと向かっていた。ここを去るなら、せめて一言告げてくれればいいのに、その背中は何だか怖そうだ。

そこまで考えて、ふと立ち止まり、嫌な感じが頭を過った。

手にしていた箒は滑り落ちてカタンと地面を鳴らした。

「まさか」

急いで箒を拾い、壁に立てかけて店内に入る。

氷川さんを怒らせてしまった。

きっとこの仮説は正しいはずだ。

あろうことか夢を追いたくても追えない、大学行きたくても行けなかった氷川さんの背景を忘れてしまった。今更になり、ようやく事態の重要性に気づく。

店内を巡り、言い訳をしようと姿を探すも、やはりその姿は無くなっていた。

「やっちまった」

本家に行ってしまったならアウトだろう。

平日の昼過ぎとはいえ、ごく稀に客足はあるのでさすがに本家まで追って言い訳することはできない。それに謝罪を受け入れられるかどうかも分からない。

どうしてあんな発言をしてしまったのだろうか。どうして口に出す前に気づけなかったのだろうか。

春のせいになどできない。自分への腹立たしさから溜息を吐いて、重く感じる足を引きずって再び花びらを片付けようと店内を後にした。

## 反省会

鈍感さを遺憾なく発揮してしまった、その日の夜。

「……ということをしちゃったわけよ。デリカシー無かったな」

夕食時、冷たい麦茶を一気飲みしながら愚痴をこぼした。思い出すだけでもやるせなくなってしまうのだ。

あれから氷川さんに再び会えたのは、一時間程経ってからのことだった。

すぐに近づいてひたすら頭を下げた。

けれど氷川さんは「何のこと？」と言うばかりで素っ気なく、そんな亀裂の入った関係を修復できないまま一日は終わってしまった。相手の背景を考えずにあんな事を言ってしまった自分が憎い。

「そりゃお前、もうちょい考えろよな」

樹がもっともらしく箸で人をさした。

「箸で人さすなよ。ってか、これからどうしよ」

幾ら悔やんだとしても、もう過ぎたことだ。くよくよ考えても時間は逆行しない。考えなければならないのは、これからのことだ。

「夢、探せよ」

味噌汁に口をつけて、樹はしれっと言った。

「夢か……。何か楽しい事でもあればな」
ぐったりと天井を見つめて、自然と口を開いたら懐かしい言葉が出た。

『何か楽しい事』

封じたはずの昔からの口癖だ。引っ越して来る前はそれこそ毎日のように言っていた口癖だ。刺激が欲しかった。どんな刺激かと言われれば困るけれど、とにかく刺激が欲しかったのだ。

「お前は欲張りなんだよ……」
だるそうな瞳を寄越して樹は言う。
「欲張り？」
「そう。俺なんか毎日勉強で忙しくて、そもそも楽しいも何もないからな」
勉強ダコができてしまったと中指を見せた。

「忙しさか。忙しさも、はまれるものも俺には羨ましいけどな」
目標を持っている人、今を夢中になっている人、そんな人達を見ると酷く羨ましく思えてしまう。

毎日それだけに没頭し必死になれる。それだけに笑って、それだけで楽しんで、それだけで泣ける、そんなものが自分にも欲しいのだ。

「じゃあ億万長者でも目指せば？」
投げやりに、いかにもどうでも良さそうに樹は言った。

「それも何か違うんだよな」
名声・富・権力、どれも手に入るなら越したことはない。けれど

必死になってまで手に入れたいとも思わないのだ。幸せとは、何か別なものの気がする。

「なんじゃそりゃ」

呆れ顔をして樹は立ち上がる。そのまま茶碗を片付け始めたので、進展の無い話は終えることにした。

「とりあえず……、明日もっかい謝って仲直りしとくわ」

今、何よりもやらなければいけないのはそれのはずだ。

「そうしな、そうしな」

樹は台所に向かう途中で叫ぶようにして返答した。

素直に謝って、仲直りして、可愛い氷川さんと仲良くしますかと、無駄にポジティブ思考を働かせて、その日を後にした。

# 梅雨

「さむ……」

白くなる息をふうっと吐いて、寒さを奥歯でかみ締める。

季節は六月も後半だ。今日も雨はしんしんと降り続いており、明日も明後日もぐずついた天気は止みそうにない。

仕事に携わる毎日、気づけば木々は緑の葉をうっそうと装い、周りの景色も濃い緑で賑やかになっていた。そんな気持ちの良い夏の始まりは楽しんでいたのに、梅雨に入り雨が降り続けると鳥肌が立つほどに寒くなる。朝から晩まで雨が降り続けると余計寂しい。

店内は外の気温と大して変わらず、寒い時にはそれこそ寒いので、今日は暖かい格好をと薄手のパーカーを羽織ってきた。客足も途絶えた雨の中、賑わいのない店先の道路には水溜りができていて忙しく波紋を広げている。そんな雨景色を見て暇を思い出し、パーカーのフードをかぶってレジカウンターの脇に座った。

次いで、フードの中から目線を悟られないように俯いて、気になる人物を目で追うことにした。

その人物は相変わらずこちらを気に入らない対象と見ているようで、寂しい店の雰囲気を明るくしようともせず、するべき仕事がないのなら休めばいいのに、ひたすら忙しそうに商品の埃を払っていた。

そんな姿を見て、寒さも相伴ったのか自分の心が落ち込んでいく

のが分かった。さーっという雨音が店の中を満たして尚更寂しい。

思えば無神経トークを重ねてしまったあの日から、かなりの日数が経ってしまっている。四月の終わりから六月の終わりなので、ふた月程経過しているのだ。

すぐに仲直りできる、という考えは非常に甘かった。事態を楽観的に捉えすぎていたのだ。得意のポジティブ思考は通用せず、謝っても『そんなこと気にしてないけど？』と氷川さんは言うだけだった。

いつもいつも反応はひんやりと冷たい。当たり障りの無い近況の話をふっても『そうなんだ』とか『良かったね』とか、会話が続かない反応を返してくる。

つまりは適当に流されているのだ。梅雨もそろそろ終わりに近づいているというのに、どうにもこうにも冷めた関係は終りそうにない。回復する見込みも見えないままだ。

「雨のせいならいいのにな……」

相変わらずここの景色はきれいで、仕事場までの行き帰りは気分が高揚するのだが、冷たい氷川さんの態度でどうもげんなりしてしまう。

フードの陰からチラ見する氷川さんは、自分が座っている事が気に入らないのか、時々こちらをチラリと見てはやめていた。基本は控えめで大人しくても、腹の中ではどんな事を思っているのか分からない。もしかしたら聞いてびっくりな恐ろしい言葉を心の中で言っているかもしれない。『あの、甲斐性無しめ』くらいには思っているのかもしれない。

毎度のことだが氷川さんでさえ、さぼっている時がある。撮り貯めたドラマを見るために、自分に仕事を丸投げするのだ。自身に甘く、人に厳しい氷川さん。

せめて始めての部下なのだから優しく扱って欲しい。

「さっむ」

入り口から風が吹き荒んで鳥肌をたたせた。

寒さには弱いのだ。とりわけここの田舎はよく冷える。どこかの山から風と呼ばれる、冷たい風が下ってくるのだ。

縮こまるように丸まっていると、またしても氷川さんがピタっと手を止めて、こちらをふっと一瞬見た。そして遠い眼差しで、少し悩むしぐさをしたので、

「さてと、客注文の整理でもするかな」と、叱られる前に仕事に戻ることにした。

もちろん客注文、もとい電話注文の整理など、する必要はない。毎日、自分が整理整頓きちんと扱っているのだ。

「どうしよう……することがない」

客注整理を五分たらずで終らせ、再び呆ける。

残る仕事は掃除くらいなもの。けれど掃除するといっても、どこもかしこも先程したばかりで、していない場所などない。加えて、現在進行中で氷川さんが掃除している。あまりにも暇で、つまらなくて半ば自暴自棄になる。

「叱られてもいいか」
どうせ、する事ないのだ。氷川さんと仲良く話せていない今、小言でも聞けば賑やかになってマシではないかと、どうしようもない案を考えた。とにかく暇をもてあまして処理できない為、何を言われようが座ってぼうっとすることに決めた。

レジ裏の休憩部屋から小さなハロゲンヒーターを持ってきて、レジ脇にスタンバイさせる。外気にさらされる店内で、足元を暖めるだけの簡単な暖房器具だ。こんな暖房器具をひっぱるよりも、暖かい格好をしてくれれば良かったのだが今更ぼやいても仕方ない。

「さむ。雪振るかもよ、これ」
勝手に暖房をつけて暖をとるのだからオーバーに言い訳しておく。このヒーターも、もう使わないと思っていた。梅雨に入るとここまで冷えるものかと感心する。それでも十度位なのだが、とにかく寒いのでヒーターを自分の手前に置く。電源を入れてしばらくすると、何とも気持ちの良い暖かさが自分を包み込み始めた。

蕩けてしまいそうで、幸せが身に沁みる。しばらくの時間を経て、幸せの絶頂に到達したため、どこから沸いたのか何者をも恐れぬ勇気を得ることになった。ちらちらと、落ち着き無い様子でこちらを見る氷川さんをぼうっと見つめ返す。フードを脱いで一直線に氷川さんを見据える。

「することないんだ、しょうがないじゃんか」
自分の行動を正当化するように、小声で言い聞かせる。視線の先には手が冷えてしまったのか、手を口元に寄せては吐息で温めている氷川さんがいた。正直可愛い、じゃなくて可哀想だ。

自分はといえば、暖気でぬくぬくと頬を赤らめのぼせている。け

れど氷川さんは言いたい事を我慢して、寒さも我慢して、暇も我慢して働いているのだ。『お茶でも入れるから暖まらない？』と氷川さんに言えたら、どんなに大物だろうか。小一時間も氷川さんをほったらかしにして、時々寄せられる目線にものぼせた瞳で見つめ返し、今更になって暖に誘える程、できた性格はしていない。

それでも、この寒さのゆえか氷川さんの動きがぎこちなくて本当に寒そうだ。

「……涼音さん」

今更声をかけても遅い。けれども、声をかけなければ後々、更に後悔するだろう。そう決意して声をかけた。氷川さんは案の定ぴたっと手をとめて、きょとんとこちらを見つめ返した。

「続き、俺するよ」

ずっと暖まってました、すみません、と心の中で謝った。どうせ店中を決まったルートで、ぐるぐると回りながら整理と掃除するだけなのだが、そう言って立ち上がる。

「ついでにお茶も煎れるからさ」

これも断られたらどうしようもないので、返事を聞かずにレジ裏の休憩部屋に向かう。その行為が、いつかの朝のようで笑ってしまう。

お茶を煎れて店内に戻ると、氷川さんは不満そうな顔をして待ち構えていた。恐る恐る声をかける。

「そいじゃ続きするよ。雑巾貸して」

空拭き雑巾を受け取ろうと手を差し出した。

「いい。一通りしたから」
「……」
もう手を差し出しているのだ。それなのに拗ねた表情でそんなこと言われても困る。もし氷川さんが樹ならば『いいからよこせバカが』とでも言って奪えるのだが、氷川さんにそれはできない。
それに今は氷川さんが視線を斜めにして瞳を合わせようとしない。暖房とお茶を勧めるといういきなりの好意に戸惑っているのか、微妙な表情だ。
幾ら考えても、もはや掃除と商品整理以外することが無いわけで、「商品を覚えるついでに掃除もするから」と、氷川さんが持つ雑巾を一瞬の隙をついて奪い取った。さりげなく、スリのように抜き取った。
当然のごとく、その行為に驚いた氷川さんはますます不満そうな顔をしたので、さっさと退散することにした。
「雷……鳴らんかな」
奪い取った雑巾を片手に店の入口へと赴き、藍色の暖簾を押しやって、雨を落とす灰色の空を見上げた。
願うのは梅雨が終ることだ。雷が鳴れば梅雨の終わりを知れる。そうすれば、この心も幾分晴れるに違いない。ふと氷川さんを見ると、未だ意味ありげな視線を寄越していた。
「案外、しつこかったりしてな」
目線が合うと、慌てて逸らす。
気まずいムードにも、慣れつつある自分が恐ろしい。

こうして、微妙なやり取りをするだけで夜になり、一日は終ってしまった。振り返れば何も変わっていない。いつ変わるかさえも分からない。

## 散策

翌朝。

雨のため一枚余分に掛け布団を増やしたせいか、寝心地が悪くて目が覚めた。時計を見ると朝の七時を指していた。仕事を始めてから習慣になってしまった起床時刻だ。

「まだ七時か」

今日は仕事休みで、月に二度の定休日だ。

高窓から漏れる眩しい陽に、どうやら良い天気であることを知る。天気予報は嬉しい方向に外れたらしい。

雨が散々と降った昨日を思い出して、今日が定休日で良かったと欠伸をした。昨日は氷川さん相手に強気な行動をしてしまった。明日までに機嫌を直してくれれば助かるのだけれど。

「はぁ……」

気持ちの良い天気とは裏腹に、朝一番に溜息を吐いて起き上がる。

寝巻き姿のまま隣にある居間に行くと、樹がコーヒーの香りを漂わせて新聞を読んでいた。

「随分と様になった朝を送ってるな」

いつの間に漫画を卒業したのだろうか。スーツを来てくれれば『お父さん』と呼べたのに。

「おう、起きたか。　外いい天気だぜ？」

「知ってる」
髪を整えるのも、歯を磨くのも、顔を洗うのも面倒に感じて、そのまま居間に座り込んだ。理由は単純だ。晴れやかな天気とは裏腹に、心がもやもやして雨が降っているからに違いない。

「氷川さんと仲直りできてないんだけど、ほんと、どうしよう」
一晩寝ても消化できなかった。黒い光沢を放つ、ひんやりとしたちゃぶ台に上半身を預けて、しばしの冷たさを味わう。

「頑張れよ。　そんなことより」
樹は興味を示さずに新聞を畳んでいる。
「このままだと、俺の夏は来ないかもしれね」
ずっと寂しい思いをしながら夏が来て、終わってしまうのだろうか。

「聞けよ」
苛立つ樹に、お前も聞けよと言いたくなったが、こちらは完璧に愚痴なので言わないことにした。
「今夜、九時まで予備校だけど、お前どうすんだ？」
「あぁ、俺か。どうしよっか」

草食動物のような一日を過ごそうかと考える。けれど、それをすると夕方あたりで後悔するのだ。

「そうだな、暇だからブラブラして買い物しとくよ」
今の自分に足りないもの、それはきっと気分転換だ。

たかが可愛い女の子と、というより職場の上司と関係がぎくしゃくしているだけで、毎日が退屈になってしまうのは損に違いない。外に出ればまだまだ知らない場所だってあるはずだ。久しぶりに美

味いものを食べたり、気の向くままにあちこち探検してみるのも良いかもしれない。そう思うと少なからずわくわくした気持ちになる。

「そいじゃ何かうまいものよろしく。夕食とらないで帰るからな」
樹は食器をまとめ、台所に運んでいった。
「生き生きしやがって」
忙しそうな後ろ姿に文句を言わずにはいられない。

いつから予備校はそんなに楽しい所になったのだ。
「俺も行っちゃうよ？予備校」
誰も居ない居間で独り言を呟き、一人で笑う。もちろん落ち込む。突っ込み役さえいない自分は寂しすぎて哀れだからだ。

窓から外を見れば、やはり生き生きとした樹が自転車にまたっがって颯爽と走り去っていった。まるで青春映画の一コマのように。

「まさか、好きな女でもできたとか……」
けれども、それならそうと樹は言うはずだ。

結局、予備校の楽しさを追求しても意味がない。樹の姿が見えなくなった所で下らない思考をやめる。今日一日、樹以上に楽しんでやろうと、そう決意したからだ。

「さて出かけるか」
残された楽しみは、もはやピクニックしかない。

早速準備に取り掛かる。出かけると決めたなら、今更ゆっくり朝食を作って食べるという気分にはなれない。ひとまず牛乳を飲み、出かけ先で美味しい昼食を食べればいい。買ったばかりの一眼デジタルをリュックの中に固定し、他にも必要そうなものを詰めて一目

散に玄関を飛び出した。

外は忘れかけていた晴天の眩しさを思い出させてくれた。

しっとりと濡れた緑の葉が、朝のすがすがしい光を反射していて優しい景色を作っている。これなら、どこまでも気持ちよく走って行けそうだ。

目指すのは『抜群な景色を見せてくれる清流』と印つけられたガイドブックお勧めの場所。

地図と格闘しながら、あちらこちらに視線を迷わせた末、長く不安定な砂利道を進んで行くと、ようやく目の前に期待していた景色が広がった。

覚束ない足取りで、ふらふらと歩き、立ち止まった。

襲われるかのような風景に、まるで自分が小さくなってしまったかのような錯覚に陥った。四方を緑の山に囲まれて、青い空が、透明な川が、どこまでも果てしなく続いていた。自然の壮大さが迫るようで感嘆の声が漏れた。

「すげえ……」

欄干の無い沈下橋の上に一人立つ。欄干が無いからこそ生身で自然に触れているようで、頬に飛ぶ清流の水しぶきは、一歩後に安全地帯へと下がらせた。遠くを眺めれば真っ青な空と、濃緑に茂った山並みが水面に映されて、それを囲むように河原が白く輝いていた。上流から向かってくる風は少し冷たくて、荒んでいる。

「こんな場所が、まだあるんだな」
昔の日本はこんな感じだったのだろうと、しみじみ思う。ここから写真を撮るのなら誰が撮ってもコンテストに入賞できるに違いない。そう思わせる程の絶景だ。長い竿をしならせて、鮎の友釣りに励む釣り人の姿も情緒を加えている。

気づけば一眼を片手にもっといいアングルをと、息を弾ませて走り回る自分がいた。

青空を大きく入れて低い位置から清流を写すなら、奥行きのある写真が撮れるはずだ。浅瀬に見え隠れする美味しそうな魚も、偏光フィルターを駆使すれば涼しげに写ってくれるだろう。ファインダーを幾度も覗いては、試行錯誤を繰り返す。更に贅沢を言うならば、最高に楽しい今の自分を誰かに撮ってもらいたかった。あまりにも自分が我を忘れている事に気づき、笑ってしまう。

「まだまだ子供だな」
夢中になって走り回れる程の好奇心が、自分にもまだあったらしい。

こんなにも爽やかな気分はいつぶりだろうか。ここなら何を食べても美味いだろう。ここなら、ただ景色を眺めていても飽きないだろう。釣りも散歩も写真もしてみたい事は沢山ある。本当に来て良かったと心からそう思って、背筋を伸ばした。

「うし、昼食でも食べるか」
もう大分腹が減っている。遠目に向ける視線は山際にある古めかしい民家。先ほどシャッター越しに見つけた食事処だ。

せっかくここまで来たのだ。それなりの値段を払ってでも、美味しい食事をとりたいと願うのは当然のことだろう。食事処が連なる山沿いの道へと向かうことにした。

辿りついた飲食店は、川を一望できるようにと高い位置にあった。湧き水が山肌を伝い、日陰のところはひんやりと冷えている。

『いらっしゃい。　どこでもどうぞ』

階段を上り店内に入ると、テレビの音と共に店のおばちゃんが快活な挨拶をしてくれた。奥の座敷に目をやれば地元のおじちゃんらしき人が数人、釣果の話で盛り上がっていた。

窓際の席を選んで、おしぼりで手を拭いていると、奥のおじちゃん達が声をかけてきた。

「兄ちゃん、観光かい？」

続いて、

「良い写真とれたかい？」と尋ねられた。

あまりにも生き生きとした口調で尋ねられて、笑顔を返さずにはいられなかった。

平日に訪れる若い男に不審を抱くこともなく、気兼ねなく接してくれる田舎の優しさが微笑ましい。明るく接してくれたからには等しく返すのが礼儀だろう。

「ここ、良いところですね、感動しましたよ」

そう告げると、地元のおじちゃん達は「そうだろう、そうだろう」

と相槌を打ち、顎をしゃくってビールを口に運んだ。生き生きとしている源はアルコールなのかと笑ってしまう。

釣果の話題に適当に合わせていると、頼んでいたヤマメ定食が届いた。

「これが山の幸か」

ぺろりと食べ切ってしまった。

程よく火の通った、くせのないヤマメ。ふっくらと、箸の上で輝く白米。年代ものの味噌を思わせる、芳醇な香りの味噌汁。ヌカの味が染み込みつつ、パリパリとした感触の漬物。

美味いと一言で片付けるのはもったいないと思える程の、素晴らしい料理だった。

食後に出されたほうじ茶を飲み、美食の余韻に浸っていると、店のおばさんが声をかけてくれた。

「どこから来たんね？」

おぼん片手にカウンター席に座り、おばさんは尋ねてきた。

多分、観光客と思われているのだろう。祖母の家付近を伝えようと、家の住所を言ってみた。

「へぇ。また珍しいとこに来たもんだね」

店のおばさんは感心してみせた。

その姿に、妙案を思いつく。

「そういえば」

それは、ここにいる地元の人達なら、もっと綺麗な場所を知っているかもしれないという期待だ。

「ここよりきれいな場所とかも、あったりするんですか？」

より穴場的な存在を求めて質問してみた。

すると、釣る側であるはずのおじちゃん達が、見事釣れた。聞き耳を立てていたのか、一瞬静かになって、それから大きな声で「兄ちゃん」と呼ばれた。

「あるよ、あるある！観光名所じゃないから車では行けんけど、歩きなら行ける。兄ちゃんになら教えやろう」

どうやら、あるらしい。

「自転車で来たんですけど、行けますかね？」

地元の人さえ絶賛する名所とは、どんな所なのだろうか。行けるなら是非とも行ってみたい。

すると、様子を見守っていたおばちゃんが立ち上がって声をかけた。

「ほら、来てごらん」

入口の方へと手招きをして呼ばれた。応じるままに外に出ると、階段を降りて、道路から上流を指さしてみせた。

「この道路をずうっと行くのよ。そうすると急な坂道が左にあるの。後はひたすら行く」

満足げにおばちゃんは言った。つまりは現地点から上流に向かって走り、途中左手にある急勾配の道を登るとのこと。

「ひたすら行くとね、昔使ってた公会堂があるのよ。その奥が、公園になってて見晴らしがすごくいいの」
持参した地図を広げて、なるほどと頷いていると、私もビールもって行こうかしらと、おばちゃんは呟いていた。

「ありがとうございます。行ってみます。ご馳走さまでした」
帰りが暗くなってもいい。せっかく来たのだから、せっかく教えてもらったのだから行ってみたい。

逸る気持ちを抑えきれず、自転車に跨り、おばちゃんに手を振った。

いざ勧められた場所へと。

## 頂上

走ること二十分。

右手に清流をのぞみ、ひらすら走っていると、ようやく左手に急勾配の坂道を見つけた。道幅は狭く自動車なら軽でしか通れないような道幅だ。それに、おばちゃんが言う通り自転車に乗ったままでは上ることができない程の急勾配だった。

「これを、行くのか」

立ちはだかる坂道は、まるで壁のようで延々と続いていた。

仕方なく自転車から降りて、更なる登り道を自転車を押して歩いてゆく。

まるで登山道のような、木々に囲まれた峠道だ。鳥の鳴き声に囲まれて不安になるほど、鬱蒼と茂る森を歩く。そしてしばらくして訪れたゆるやかな勾配に、再び自転車をまたいで立ち漕ぎをすることにした。

「確かにひたすらだな」

既に、かなりの時間走り続けている。

途中で道を間違っているのでは無いかと不安になり、引き返そうかと葛藤するも、とにかく行けるだけ行ってみようと決意して、ずっと立ち漕ぎを続けてきたのだ。

汗で霞んだ視界にようやく建物が入った時、募らせていた不安は

一気に吹き飛ばされて、安堵と共に熱い汗が吹き出した。

「穴場すぎだ。観光客は来たくても来れないだろ」

ハンドルをふらつかせて、目的の公会堂にようやく到着した。荒い呼吸を落ち着かせようと、森の中にひっそりと佇む公会堂の影に移動して建物を見上げた。

こんな山奥に使い道はあるのか、それすらも疑問に思ってしまう公会堂は、どこか趣があって懐かしい。白く塗装された板は横向きに平行して建ててあり大正時代を思わせた。昔からずっと、移り行く街と人とを支えてきたのだろう。暖かみのある公会堂にそっと自転車を寄りかからせた。

空に向かって溜息を吐き、すぐそこに迫っているはずの目的地へと歩く。

小道を進んで行くと森は開けて、ようやく公園に辿り着いた。見ればブランコやジャングルジムなどの遊具が置いてある。どれもこれも小ぶりで、塗装の剥げた銅褐色をしていた。

「誰が遊ぶんだ」

思わず鋭く指摘してしまった。

来るのさえ一苦労なのに、更に遊具で遊ぶ子供なんているのだろうか。昔の子供はたくましかったのだと無理に納得するしかない。それに驚くべき事はまだあった。何処を見渡しても視線の先には空があるのだ。

それは今、この場所が山の頂上だということ。

ぐるっと見回せば、公園の隅の一角に、木造の屋根と机とベンチとが見えた。

きっと昔から憩いの場所として使われてきたのだろう。それならば、そこから見える景色はさぞかし素晴しいに違いないと、走り出したい衝動を抑えて展望台へと足を急がせた。踏み固まれた黒土を懐かしみながら、開けてゆく視界に心を躍らせる。

景色はどんどんと広がり、もっともっとと前に進むうち、椅子に上り机の上に立ってしまう。そして言葉を失った。

この景色を前にすれば、ここまで来るのに払った苦労など実に安いと。

人間が作った都会の夜景よりも、自然の造形美のほうがはるかに美しいと、そう確信できる景色が目の前にあった。緻密な箱庭のように繊細で美しく、幾ら眺めても見飽きることがない。

ついさっきまでいたであろう清流は、まるで蛇のように谷をうねりキラキラと光っていた。高い山も小さな山も、皆それぞれに緑を装って、あるものは滝を持っていたり、あるものは小さな集落を抱えたりしていた。随分と高い所まで来たものだと感動する。

振り返って公園に目をやれば、中々どうしてか、公園にも情味を感じられた。

一回り小さい遊具たちが時代を感じさせる。木漏れ日がキラキラと差し込む中で、いつだって子供達を楽しませてきたのだろう。丸坊主に、ランニングと短パン、そんな姿で遊んでみたい。

「あれは……だれかいるな」
行儀悪く机の上から見渡していると、公園の正反対、隅に人影が見えた。どうやら向こう側にも、同じような展望台があるらしい。
きっと、ここと違った景色が見えるのだろう。
それならば声をかけてみようと、近づくことにした。定食屋で田舎のフレンドリーさを体感したためか、いつになくおおらかな気持ちだ。
ここならば、人なつっこく接しても受け入れてくれるはずだ。
公園を端伝いにベンチまで行くと、帽子を被ったおばさんが時々飲み物を口に入れてはスケッチに筆を走らせていた。それはとても楽しそうで微かに鼻歌も口ずさんでいる。打ち込んでいる最中に水を差すのは悪いと思ったものの、現在進行中で感じている感動をどうしても共感したかったので、声をかけることにした。
意を決して近づくと、その絵が景色に負けないほど素晴しい出来であることに気づく。美術に詳しくは無いけれど、それが良いものか悪いものかは分かるつもりだ。忠実な描写というよりは自分なりにアレンジした絵なのだろう。水彩画で優しく、それでいて色彩豊かで楽しげな景色がスケッチの上にあった。
「おばさん、絵うまいですね」
挨拶を忘れて、背後から感想を言ってしまった。
案の定、驚いたおばさんは『え、誰?』と言いながら振り返った。
その表情は大きく目を開けて、本当にびっくりしていた。

## 繕い

額に手を当てて考える。

何がどうなり、こうなってしまったのか。いや、そもそもどこでどう間違ってしまったのか。確かに帽子を被ったおばちゃんだったはずだ。

「ハル君？」

目の前の氷川さんは驚きの表情で俺を見上げていた。

「……久しぶり」

口角を無理矢理に引き上げて『元気？』と挨拶した。

昨日会ったばかりなのに適当な言葉が思いつかなかったのだ。氷川さんも口を開けたまま、言葉が出てこないと固まっている。

よりによって、微妙な関係にある氷川さんに「おばさん」呼ばわりしてしまった。

けれどあえて言わせて欲しい。

服がいけない。はっきり言えば、年寄りくさい。更に言うなら、その膝掛けと、帽子と、手袋とがいけない。どうしていつものような若者らしい格好をしていないのだ。絵を描くためだ、分かってはいる。分かってはいるが、地味すぎる。

「いや、目悪くって、間違えた」

おかしいなと何度も呟いて、指で目を押さえた。そして取り繕う。

「絵、うまいね」
悩み抜いて見つけた言い訳は、ともかく目が悪いことにして、何事も無かったかのように褒めちぎることだった。
複雑そうに、むっとした表情をした氷川さんの心中を察する。
今日は定休日だ。誰にも邪魔されず楽しく絵を描いていた。地味な格好で。それなのにいきなり背後から声をかけられて驚き、しかも失礼なことにおばさんと呼ばれ、その声のかけ主は現在進行中で気に入らない存在の自分だったのだ。
「何……してるの？」
つけて来たの？　からかいに来たの？　嫌がらせに来たの？
まるでそう言うかのように、氷川さんの声は冷たく、不機嫌な瞳をこちらに向けていた。
自然と冷たい汗が背中を伝って、喉にぐっと唾が通り過ぎる。偶然の出来事なのだ。
「いや、今日お店休みだし、カメラでいいとこ撮ろうかなって」
あたふたして、視線を泳がせて、精一杯に答える。悪気は無かったのだとカメラを見せて証明する。
「川沿いの定食屋行ったら、ここ教えてもらってさ」
他意はないと、笑ってみせた。
「そう」
「そそ。良いトコだね、ここ」
「……」

返事は無言だ。

まるで興味が無いような仕草で、氷川さんは視線をキャンパスへと戻し、絵をもくもくと描くことに戻っていった。無関心な背中だけが目の前にあり、その姿に切なさを味わう。

「まじすか」

心の中で呟くようにそっと囁いた。

確かに自分は無神経な事を言ってしまった。けれど、その態度は幾ら何でも冷たすぎやしないだろうか。

何かいい話題の切り口は無いものかと考えるも、やはり行き詰る。立ち上がって、ジーンズについた土をぱんぱんと払い落とした。こうなれば取るべき行動は一つしかない。これ以上、溝を広げても仕方ないのだ。カメラレンズにカバーを被せて帰る準備をする。

そして変化のない関係に一石を投じようと決意した。

きっと、この言葉を言えば白黒ついて嫌われてしまうだろう。それでもこんな半端な現状に悶え続けるなら、白黒ついてさっぱりと諦めたほうがずっといい。だから告げてから帰ろうと意を決して、絵を描くことに没頭している氷川さんの背中に声をかけた。

「あのさ」

完全に無視することは無理なのか、筆がぴたっと止まる。風にかき消されないようにゆっくりと口を開けた。

「俺の事、気に入らないの？」

# 融解

正直この台詞を言うには、かなりの勇気を必要とした。

しばしの沈黙から、やはり正面すぎたかと後悔する。暖かい風が幾重にも重なって、そっと通り過ぎる分だけ時間が長く感じた。

非常に遅く流れように感じる時間の中で、待ちわびた返答は結局帰ってこなかった。仕方無く、言うべきことだけ言って帰ろうと口を開いた。

「あの時は無神経なこと言って、ごめん」

ここ数日、何度も繰り返した謝罪の言葉だ。

少しの間を置くも返答は無し。

結果が分かっていても、やはりげんなりする。ここまで無視されると逆に開き直って、とことん言ってやろうかとも思えてくる。この際だ、全部言ってしまうのはどうだろうか。

幸いなのか、氷川さんの表情が見えない分だけ自己中っぷりを発揮して、謝罪という名の言い訳をぶちまけることにした。

ただ背中を眺めるのは寂しいだけだと、空を見上げて、流れゆく雲を追う。

「氷川さんの事情知ってたのに、無神経だった。ごめん」

さらさらと木の葉が揺れて、返答のない一方的な会話を風が流してゆく。

「でも、あれから俺も、何かを一生懸命目指そうかなって思ってさ。一応、勉強始めたんだよね」
これが謝罪になるかどうかは分からない。

けれど、無責任で無神経な言葉を言ってしまった自分に恥じて、あの時から何でも頑張れるものは頑張ろうと思ったのだ。以前のバイトの続きをしようと、会計関連を勉強し始めた。正直に言えば、会計の勉強を夢と言えるのかは分からないし、昔していた続きでしかないのだけれど、それでも頑張ってみようという気持ちにはなったのだ。

そう考えれば、少しずつは変わっているのかもしれない。ぼんやりと見上げていた雲から、氷川さんへと目を移す。氷川さんは筆を止めていた。

「できれば許して欲しい。それだけ」
おばさんと言った事も謝ろうと思ったが、それは言える雰囲気では無いのでやめておいた。とりあえず、今はこれでいいはずだ。後はなるようにしかならないだろう。伝えたかった謝罪を言えたからなのか、すっきりして別れの言葉を告げることにした。

「そいじゃ帰るよ。明日、また頑張るから、よろしくね」
帰ると決めて眺めた景色は体の疲れだけでなく、もやもやした心までも爽やかにしてくれた。

これで、もういいのだ。できれば周りの景色をもっと堪能したかったけれど、それはまたいつかでいいだろう。きっと自分は今、できる限りの最善を尽くしたはずだ。そう思うとやはり、どこかすっきりしたように思える。氷川さんに「さよなら」を告げようと視線を移した。

最後は背中に向かって笑ってやろうと目を向けて、焦ってしまう。
そこには、てっきり無関心な背中があると思っていたのだ。
氷川さんはいつの間にか、こちら側を向いていた。焦点のあっていない、くすんだ色の瞳をして、体はこちらを向いてるものの、視線は苔の生える地面に向けていた。その姿に呆けた顔をしてしまう。
「あのね」
小ぶりな唇は開いた。少しの間を空けて。
「違うの」
氷川さんは目を閉じて、首を横に振った。
「謝らなくちゃいけないのは、きっと私のほう」
静かに、悲しそうに、淡々と言ってみせた。
そんな表情に戸惑ってしまう。今の今まで怒っていたのではないだろうか。頑なに会話しようとせず、無関心という返答をしていたのは、自分への強い怒りがあったからではないだろうか。
自分を責め始める氷川さんを見て、心がちくっと痛んだ。怒られる事は覚悟していても、謝られる事は予想だにしていなかった。何と返答していいものかと迷って、
「よく、分かんないけど……ごめんね」と頭を下げた。
何がどうであれ、悪い事をしてしまったのは事実であり、何度だって謝る必要があるはずだ。

そして沈黙という返答に慣れてしまった自分は、のんびりと続きを待つことにした。氷川さんはしばらくすると筆をケースにしまって、両手を膝の上にちょこんとのせた。

「あのね、謝るのは私なの」

小さく決意したように、今度はきっぱりと言った。繰り返すその言葉は何を伝えようというのだろうか。

「なんで？」

その理由を教えて欲しい。

「ハル君に迷惑をかけたから。将来が怖いのはハル君のせいじゃないのにね」

目を閉じて、氷川さんは言った。

迷惑なんかかけていないと言おうとして、けれど言葉は出なかった。

その言葉が心に深く刺さったのだ。まるで心臓を鷲掴みしているように痛みを感じた。理由は違うけれど、その言葉はいつでもどこでも自分の心を支配していたものだ。将来が怖いと、いつも思っている。

「だから八つ当たりなんかしちゃって」

力ない口調で氷川さんは続けた。

「お母さんが病気になって、お店が大変になって」

「……うん」

「大学にも行けなくなっちゃって。……来年だって分からない」

ぽとん、と一滴、氷川さんの瞳から涙が零れた。それは膝掛けに落ちて、小さな染みを作り上げた。

後を追う様に涙は頬を伝い、氷川さんは懸命に手で拭う。けれど溢れだす涙は掌から零れて、肘を伝い、膝を濡らしていった。何度も哀咽を漏らし、今はもう止め度目無く泣いている。その姿が痛々しくて目をそらしてしまった。

何が楽しくて、何のために、氷川さんを泣かせてしまったのだろうか。

一体どこで間違えてしまったのかと唇を噛む。きっと、いつも葛藤に苦しんできたのだろう。家族の幸せと、自分の夢。どちらも選びたくて、どちらも選べない苦悩。それが分かるだけに、なお更自分の無神経さが腹立たしい。

涙を堪えて氷川さんは続ける。

「私は、絵を描きたい、大学に行ってみたいの」

声がか細く途切れ途切れになっていく。

「それは、私のただの我侭なのに、それなのにハル君にあたっちゃって」

「いや」

それは違うだろう。だから声に出して、はっきりと伝える。

「あれは俺が悪かったよ」

母親を責めることはできない。夢を諦めることもできない。そんな葛藤の最中で、何も考えず能天気に生きる自分がいた。平気な顔して、夢など無いとふざけていた。自分のことしか考えず、他人の事など考えずへらへらしていた。

ならば怒って当然だ。だから、言うべき事を再び告げる。

「俺は無神経だったよ。言葉も行動もね」

軽く笑ってみせた。そんな明るい口調に驚いたのか、氷川さんは顔を上げて視線を合わせた。涙の跡を頬に残して、きょとんとした泣き顔をよこす。

「氷川さんとは正反対で、ふらふらしてたからさ」

申し訳無さそうに笑ってみせる。

「だから、許して欲しい。それで……やっぱり氷川さんと仲直りしたい」

それだけが望みなのだ。

そう言うと、氷川さんはきょとんとした表情を崩してくれた。優しい表情をして静かに頷く。

「うん」

その仕草に、自分の頬が緩むのが分かって恥ずかしくなる。

「ありがとう」

振り返れば本当に長かったのだ。ようやく仲直りすることができた。飛び跳ねたい衝動を抑えて、ブランコを囲む柵に座った。

**綯交ぜ**

ブランコを囲む鈍色の柵は座り心地が悪かった。それは一本の鉄の棒なのだから当たり前だ。やはりブランコに移って座ろうかと、そう思った矢先、氷川さんは自分を呼んだ。

「ハル君。私、ハル君が勉強始めたことは、知ってたよ？」

「え」

言われなくても知ってたよと、氷川さんは笑ってみせた。

だから驚いてしまう。指摘されたその事実は氷川さんだけには知られないようにと、いつだって努力してきたのだから。急に勉強を始めたと思われたくないので、コソコソと勉強をしていたつもりだ。

「な……何で知ってるの？」

思わず大きな声を出してしまった。

「え、えーっとね、コソコソ本読んでたから、何の本かなって」

自分の表情は、思っているより厳しいのかもしれない。氷川さんは視線をずらしてあたふたと言った。

「でも、俺バレないように隠してたんだけど」

勉強時間と氷川さんとが重ならないよう、休憩時間や昼食時間を利用していた。

弁当箱を入れる紙袋に混ぜてこっそり持ち込み、こっそり勉強していた。ついさっき勉強してた事を告白するまで、氷川さんには知られていないと、そう確信していた。

氷川さんは涙をふいて、くすくすと笑う。
「うん、隠してたね。でも時々、夢中になりすぎて私が近くに居ても気づいてなかったから」
「全然気づかなかった……」
といより、隠していたことさえもバレている。

「うん。っていうか」
愕然とする自分に、氷川さんは強い口調で口を開けた。心なしか表情も厳しく見える。やや攻めるような瞳を向けて、言った。

「何で隠してたの？」
「はい……確かに」
もっともな質問に、もっともらしく同意してしまった。

確かにその通りだ。本来なら隠す必要など無い。勉強なんかしてる、と思われたくなくて、頑張っている姿を見られたくなくて、そんな小さくて下らない理由からなのだ。恥ずかしくて言えるわけがない。あまりにも子供すぎる理由に呆れてしまう。

「……確かに？」
質問してるんだよ、同意求めてるんじゃないんだよ、と氷川さんは冷たい視線を寄越した。

「いや、ごめん、何となく恥ずかしかったから？」
疑問系で言ってしまう。それ以上追い込まないで欲しい。
「ほんとに？」
「ほんと、ほんと」
疑る瞳に焦りながらも、これ以上追求しないで欲しいと苦笑いで返答した。氷川さんは、しばらく納得できないという表情をして、それから視線を地面にずらした。

「そっか頑張ってるんだね。私は……」
氷川さんは地面を軽く蹴った。
「私は全然だめかな。もう勉強する自信も無くなっちゃった」
どうしよっかと、頬をゆるめた。

「本当はね、今の仕事なんかやりたくなかったんだよ。絵を描く仕事に就いてみたかった」
きっぱりと歯切れのいい言葉遣いで、そう言った。

「それは……」
「こんな事、みんなには言えないけどね」
それはそうだろう。バイトで働く自分でさえ、返答に困ってしまうのだから。

「ねぇ、ハル君は、絵を描くって面白くないと思う？」
ベンチから少し身をのりだして氷川さんは尋ねてきた。

そんな事は考えたこともない。少し悩んで、似たような答えを見つけた。それは本心だ。
「いや、そんな風には思わないけど」
「どうして？」
間髪いれずに尋ねられた。知りたいのは、その理由なのだろうか。

正直にいえば、絵のイロハなどさっぱり分からない。絵を描くのが楽しいと思ったのも小学校以来感じたことはない。それでも似たような気持ちになら時々なる。

「絵の事は分からないけど。俺はカメラが好きだから」
一眼レフカメラを手にとって氷川さんに見せた。

「うん」
真剣な眼差しを寄越す氷川さんにたじろいで、しどろもどろにならないようにと景色を見つめながら話すことにした。

「うまく伝え辛いけれど。撮るだけでも好きなんだよ」
この感覚を、果たして分かってもらえるだろうか？
「確かに、撮った写真を誰かに見てもらって、うまいって褒められるのが一番嬉しいんだけどね」
ちらっと見る氷川さんは、じっと続きを待っていた。

「だけど、たとえ誰かに見てもらえなくても、俺は確かに、この時この場所にいて感動したなって、それを思い返すのが好きなんだ。絵のそれとは違うかもしれないけどね」
自分で言って、かなり恥ずかしい。かっこよく言えば過去に旅するのが好きだから今を残しているのだ。しかしカメラオタクに話すのならまだしも、普通の女の子にこんな事を言って、分かってもらえるのだろうか。恥ずかしさが込み上げてきて、
「氷川さんも絵を描くのが純粋に好きなんでしょ？」と、そう結論づけた。

## 伝心

氷川さんは、またもや涙を零した。
まるで雨上がりの葉が雫を落とすかのように、ぽたりと自然に涙を零した。

その姿に焦って声をかける。

「って、え、ちょっと。どうしたの？」

傷つけるような発言をしてしまったのだろうかと、あたふたしてしまう。単純に思った通りの感想を言ったのだけれど。そんな焦りをよそに氷川さんは静かに首をふった。

「ううん、違うの」
「違うって、何が？」
「今まで、そんな風に言ってくれる人はいなかったから」
頬に涙の後を残して、氷川さんは笑ってみせた。

それはつまり、満足のゆく答えを渡せたということだろうか。
氷川さんは袖で涙を拭いて、顔を上げる。

「私も同じかな」
はにかむように氷川さんは表情を緩ませた。その表情を見て心は軽くなる。

「そっか。あまりこれを分かってくれる人、いないんだけどね」
同じように笑ってみせた。

思い出すのは高校入学したての頃。部屋に写真を散らばらせていた時だ。『誰にも見せないなら処分しなさい』と母親に叱られた記憶がある。その時、『誰にも見せないけど捨てやしない』と反論したのだ。

純粋にカメラが好きだった。それでもやはり、絵のそれとは違うのかもしれないけれど。

あのね、と氷川さんは咳払いをした。

「うちには昔からクレヨンや色鉛筆が沢山あったの。だからいつの間にか絵を描く事が楽しくて、夢中になってた」

涙の跡を残しながらも、嬉しそうに楽しそうに話す。その表情に笑っていいのか悲しんだほうがいいのかと、迷ってしまう。

「いいね。俺も小さいときは絵描くの好きだったよ」

結局、向けられた笑顔に釣り合うようにと、笑うことにした。氷川さんは空を見上げて少しずつ言葉を続けていく。

「子供の頃は喫茶店で画廊を開いて、自分の絵をみんなに見せたいなって、そんな風に思ってた」

でも、と氷川さんは続けた。

「無理なんだけどね、そんなこと」

諦めたんだよと、そう加えてみせた。

「……そか」

「お店を継がなくちゃいけない。だから絵をみんなに見せる事はできないって。あの時も泣いたな。悔しくて」

自身の将来を悩む。氷川さんはずっとそれをしてきたのだろう。

自分はといえば、将来に危機感は持っても、真面目にどうしようかと悩んだ事は無かった。悩むというのは考えるということ。危機感を持っても、どうこうしようと思わず結局流されてしまう自分がいた。考える行動を避けていた。自分などが、悩みぬいて必死に将来を考えてきた氷川さんを慰められやしないだろう。自分の中にも、こみ上げる何かを感じて歯を食いしばる。

「それでも描く事は止められなかった。なんでだろうね、ハル君の言う通り純粋に絵が好きなのかも……」

同意を欲しがるような瞳を向けられる。

その表情が儚くて、何かの一言で壊れてしまいそうで、笑顔を意識して口を開ける。

「きっとそうだよ」

ふっと表情は優しくなり、氷川さんは透き通った瞳を遠くにした。

「それでね……高校の時に決めたの。卒業したら、お店を継ぐ。だから、お父さんに四年間だけ大学に行かせて欲しいって、そう頼もうって」

「そうだったんだ」

大学に行く夢さえようやく掴み取ったのだ。その重さは計り知れない。自分の将来を、自分で決めることさえも、実は恵まれているのかもしれない。

「でもね、それに何の意味があるんだって皆は言うの。誰も分かってくれなかった」

ふと、誰かを嘲笑うかのような、そんな感情が見えた。

涙が一筋零れ出て、思わず手を伸ばし拭いてしまった。

それは氷川さんの涙ではなく、不覚ながら自分の目から溢れてしまったものだ。涙を流してしまったのを気づかれないようにと、上を向く。

自分も同じように、誰にも理解されていないと思ったことがある。心の奥底から湧き上がる悲しみが随分と懐かしく感じた。

「結局、良い成績とったら良いよって言われて、それで一生懸命頑張って、なんとか大学だけは行かせてくれることになったの。それにお母さんも応援してくれて。でも……」

でも、お母さんが倒れてしまって大学どころでは無くなってしまった。続きが分かるだけに、何も言えなくなってしまう。夢のために家族を捨てられるわけがない。

最初は、楽しく絵を描いて生きられればと願った。でも家業を継がなければならない事に気づいてしまった。それでも美大にだけは行かせてもらえることになった。けれどそれさえも、今は適うかどうか分からない。幾度となく夢を追い、幾度となく挫折を味わってきたのだ。

「絵を描く事っていけないことなのかな」

いけないと言って欲しいかのように諦めが表情を覆い、口を噤ませる。

「絵をね、描いてみたいの。誰かに見てもらえなくてもいい。ただ、きれいな景色を描きたいだけ、それだけなの」

同意を求めるような、その表情は自分には持ってない感情で、自分にはできない表情だった。

全てを諦めて初めて得られるような、切ない微笑だ。何と声をか

ければいいのかも分からない、どこに視線をやればいいのかも分からない。打ちひしがれている女の子を慰めることもできず、ただぼんやりと見返してしまう。

「ごめんね、こんな話をして」

静かに謝った。

「いや……いいけど」

何もできないと、心が苦しくなった。理解することも、慰めることも、到底できやしない。何もかもが違うのだ。ただ両手を強く握りしめて、時間が流れるままに歯を食い縛る。

「うん、もう大丈夫かな。ありがと」

しばらくして氷川さんは、空を見上げてすっきりしようと、涙を乾かそうと、そんな仕草をした。この話は終わりにしようと、そう言っているのだろう。その気持ちに応じるくらいならできる。だから話題を変えることにした。

「これから、まだ絵を描くの？」

描いている最中に横槍を入れてしまったのだ。もはや話すことが無くなった今、これ以上ここに居ても気を使わせるだけだろう。カメラをしまって、今度こそ帰ろうと支度を始める。

「今日はもういいかな。　それよりハル君はこれからどうするの？」

「え、俺？」

「うん」

予期せぬ質問に戸惑って、腕時計に相談を持ちかけた。

時刻は十五時を過ぎた所だ。梅雨の狭間に訪れた、珍しい晴れの一日。周りの景色は色彩に溢れて清々しい。確かに、まだまだ何かができる時間だろう。

「んー、どうしよっか」
悩むフリをして先の言葉を考える。これから何をするのか決まっているのだ。身も心も疲れたので、すぐにでも家に帰って寝たいのだ。流す必要の無い涙も、少しだけど流してしまった。後々考えると恥ずかしくなってしまう。布団の中で、全部夢の中に流してしまいたい。

「色々寄り道しながら帰ろうかな」
一言で『帰る』と告げるのは寂しい感じがして、飾りをつけて告げた。帰って一時間半程寝たら買い物にでも行こう。そんなことを考えていると、氷川さんも帰る事にしたのか慣れた手つきでスケッチブック等を片付けながらこちらに向き合った。

「それなら、一緒に寄り道しない？　ここ以外にもいいとこあるから、行ってみない？」
明るい口調で言ってみせた氷川さんに驚いてしまう。

「え、えと、だから……」
氷川さんは顔を赤くして、口をぱくぱくさせながら慌てていた。言われたことをようやく理解して、はっとする。

随分と長い時間呆けていたらしい。
「他にも良いとこ知ってるの？　それなら行ってみたいけど」
正直に自分の気持ちを告げた。

その好意に、ぜひとも甘えたい。眠気など、とうに消えてしまった。
「ほんと？それじゃ連れてってあげるよ」
明るく嬉しそうに、その姿はとても眩しかった。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――――

「ほーう、良かったじゃんか。それでどこ行ったんだよ？」
その日の夕食時。にやにやと笑う樹を見て、しまった喋りすぎたと気づいた。

そもそも、毎度樹に事の進展を話す必要も無いのだが、自分の性格上、話たがり屋なので信頼できる奴にはどんどん喋ってしまう。

「あぁ、それから少しだけ回って帰ってきたんよ」
強制的に、簡潔に話を終わらせた。

「おいこら。話を終わらせんな」
「いやいや、もう終わりなんだって」
樹がすっぽんのように食らいついて、離そうとしない。
「嘘をつくな、嘘を」
「別に何もないから」
樹が望むような結末は何もない。

いやらしく下品な笑みを向けられても、またまたと言って肩をぺしぺしと叩かれても、無いものは無いのだ。

「あれから、澄んだ川に連れてってもらって、それで終わり」
「ほんとかよ……つまんねーな」
ちっと舌打ちされた。なんて失礼な奴だ。

「お前に話すんじゃ無かったよ」
結論はこれしかない。つまみの唐揚げを口に運んで焙じ茶を飲む。こんな会話になってしまうのは目に見えていた。

しかしそれでも嬉しかったのだ。樹の言葉が嬉しいわけではなく、樹が下らない発言をどんなにしようが、今日の出来事が嬉しかったのだ。だから、こうしてアホに何を言われても、笑いながら返せる。

「ま、今日は良い日だったってことだ」
言いたいのはそれだけだ。口元を緩ませて笑ってしまう。今日のところはこれで終わりだ。

また明日からが本番だろう。きっと今夜は、静かに眠れるに違いないと考えて、その日を後にした。

## 夏の朝

季節は夏の盛り。

暑さも本格的な八月だ。汗で濡れたシャツが、ねっとりと肌に纏わりついて気持ちが悪い。タオルケットを剥いで、冷たい場所をと、青竹色をした畳の上に這って移動した。

「熱い……」

外はすっかり陽が昇り、涼しかった明け方が名残惜しくなる。

セミの鳴き声が騒がしく、安眠どころではない。畳の上に移動したものの、今度は照りつく日差しに髪が焦げてしまわないかと思い、陽が差す窓辺から逃げることにした。動いたついでに枕元にあるはずの携帯を探して時刻を確認する。

時刻は朝の七時を過ぎたところだ。今日も二週間に一度の定休日だ。

携帯の画面をぼんやり見ながら六月の定休日を思い出し、あれから進展したなと思い返す。

進展したのは氷川さんとの仲だ。展望台の出来事から、ひと月半が経っている。

何が進展したのかと言われれば困るのだが、とにかくまぁまぁな関係で、まずまずの毎日を送れている。まぁまぁな関係と、まずまずの毎日というのは実際うまくいっているのかもしれない。

氷川さんのお母さんとも会うこともできた。あまり体調は良さそうではなかったが、氷川さんに似て朗らかで、やっぱり笑顔が良く

似合う人だった。

どうやら、氷川さんとの一部始終を知っているようで、笑いながら『若いうちは悩むこともあるよね』と慰めてくれた。その気遣いが嬉しくて、母親が恋しくなってしまったのは内緒だ。時々は病院から戻って来て、ひょっこりと店に顔を出してくれる。

「起きるか」

外から子供の騒ぐ声が聞こえて布団から起き上がった。

やはりここは良い。季節を感じ、季節を満喫できるので毎日が楽しくなる。

歯を磨こうと、居間に繋がる柿渋色の襖を開けた。

ふと、聞きなれない音が家の中を木霊していることに気づいた。トントントンと軽快な音が聞こえている。何だか懐かしい音だ。それに複数、人の声も台所から聞こえていた。また警察でも来たのかと台所に行くと、最近会う機会の無かった婆ちゃんがそこにいた。

割烹着姿をして忙しく動いていた。

「いつ来たんだよ、婆ちゃん」

「さっきじゃよ。あんたが元気にやってるか心配になってな」

はっはっはと威勢よく笑ってみせた。

婆ちゃんは忙しそうに料理に勤しんで、冷蔵庫とコンロと食器棚の間を行き来していた。そして、その脇に、

「樹はいつ起きたんだよ？」樹が顔に疲労を浮かべて、婆ちゃんの手伝いをしていた。すると樹はこちらを見て、苦々しく舌打ちをした。

「今日は樹しゃんの当番てあったからな。叩き起こしたんよ」
「あれか。俺と樹とで作った当番表か」
「そそ。そうなんよ」
なるほどと納得する。

台所に至るドアに、その貼り紙は張ってある。だから自分は寝ていられ、樹は働かされているというわけだ。

けれどあの当番表はとっくに使っていない。当番表なんてものは作るだけ無駄で、その時その時、作れるほうが食事を作ろうという取り決めになったのだ。道理で忌々しそうな視線を寄越すはずだ。

「すまん、樹」
寝起きでうまく表情を作れぬまま謝る。すると樹は無言で近づいてきて、婆ちゃんからは見えない台所の死角へと連れて行かれた。

「お前の婆ちゃん、半端ねぇぞ。寝起きに見たとき喰われると思ったぜ」
額に汗を浮かべた表情は重労働を物語っていた。半端ねぇ、半端ねぇと悔しさを吐露していると、婆ちゃんが樹を呼んだ。

「樹さん。樹しゃん。茶碗を向こうに並べておくれ」
時々、さんをうまく言えない婆ちゃんだ。

家を貸してもらい、尚且つ居候者である樹は逆らえるわけなく『分かりました』と、ただ従うしかない。茶碗を机に並べながら悲壮な顔をしている樹に、心から同情する。そしてそんな樹を見て、ふと何時に起きたのかという疑問が沸いた。

「ちなみに何時起き？」
ピクっと、樹の動作は止まった。
「何時だと思う？」
質問に質問を返してきた。その言葉に、これは相当早い時間から駆り出されたなと予測する。現時刻は七時半である。
「六時？」
用事も無く六時くらいに動き出すのが年寄りだと思っているのは自分だけだろうか。
「ごっじっはん。五時半だっつうの。ごっじっはっぁあん！」
噛み付かんばかりの形相だ。
「朝食に二時間もかけてるのか！」
今日の朝食はどんなに豪華なんだと驚く。
「ああ？　ふざけんなよ、お前」
樹は怒りを搾り出したような声で、
「そっから外見てみろ。よく見ろ」と、庭を指さした。
何事かと言われたとおりに庭を見ると、
「洗濯物干したのか。凄いなお前、偉すぎ」
Tシャツやジーンズが、芝生の上で気持ちよさそうに揺れていた。確かに朝食に二時間かけるなど聞いたこともない。
「偉いだろ。なぁ分かるか、俺の苦労をよ」
怒る気力も無くしたのか、樹はそう言って、げんなりと台所に戻っていった。その背中は小さくて泣いているように見えた。
「……手伝うよ」
親馬鹿と言うべきか婆馬鹿と言うべきか、さすがに樹が可哀想だ。

けれど、よくよく考えてみれば自分が当番だったら確実に樹と立場が逆転しているに違いない。孫が可愛いからではなく、たまたま樹が駆り出されただけに過ぎないのだ。婆ちゃんは朝食を一通り作り終わったらしく、自身の肩をとんとんと叩きながら居間に歩いてきた。

「ハル、涼ちゃんとはうまくやってるかい？」
よっこらしょと座りながらそう言った。
「意味が分からないから」
ちなみに仕事関係なら上々だ。
「ばっちりですよ、なあハル」
なぜか元気に樹は言う。早く起こされた怒りの矛先を、今ここで向けられても困る。

「婆ちゃん、連絡くれれば俺らで用意したのに」
下らない話題はさっさと変えた方がいい。
「嘘つくなよ。お前、お婆さん来ても何もしないだろ」
「おまえ……」
樹がいやにしつこかった。完全に敵対側だ。これこそが身に覚えの無い恨みというものだ。そして婆ちゃんは、そんなやりとりを気にもせず樹にねぎらいの言葉をかけた。

「樹しゃん、悪いね、助かったよ。座りなさいって」
そう告げられた樹は、開放された奴隷のように瞳に輝きを取り戻した。座るというよりは、崩れるように床に落ちていく。
「気にすんな。婆ちゃんのメシはうまいからいいじゃんか」
ぽんぽんっと樹の肩を叩いてやる。
「知ってるつうの。　寝てたお前が気にいらないんだよ」

人の手を乱暴に振り払い、樹は叫んだ。立場が逆なら、きっと自分も樹を恨むだろう。

「おいハル、俺は今日、昼まで寝る」

どたんと盛大な音をたてて樹は仰向けに倒れた。

「そうだな、することもないしな」

箸を手にとって、おかずをつまむ。氷川商店は定休日で、樹も予備校が休みだ。二人とも休日で特にすることもない。

すると婆ちゃんが何を思ったのか、肘で突付いてきた。

「あんたら、これから家の中を大掃除して、お客さん迎える準備をするんよ」

小鉢にのる煮物をパクパクと口に運んで、婆ちゃんは言った。

その言葉に樹は、まるで死刑宣告された囚人のように仰向けのまま瞬きを忘れて、天井を見つめ固まった。嫌な予感しかしない。

「……え、なんで、誰を、掃除って？」

幾つもの疑問が一斉に浮かんだ。

友達を集めて騒ぐならホームでやって欲しい。そして婆ちゃんの言葉は続く。

「ご飯食べたらな、すぐやるよ」

そう告げる婆ちゃんの声に樹は横になり、それからぐったりとうつぶせた。寝て過ごそうと決めた休日が、一転して掃除する日になってしまった。しかも、まだ疑問点が残っている。

「ちょいたんま。お客さんって誰、ホームの人？」

まさか孫のお披露目とかする気ではなかろうか。そんな事には付き合っていられないし、なによりアホらしい。

「なんでホームの人を呼ばなくちゃいけないん？」
呆れたように婆ちゃんは言う。
「それじゃあ誰を呼ぶんですか？」
樹が起き上がって、珍しく婆ちゃんに直接質問した。
「いつも世話なっとる人達よ。あんた達も知ってるだろ」
その言葉に、言い知れぬ嫌な感じが胸を満たしていった。

何かを謀ったかのような、含めた笑いを浮かべている祖母。
「まさか……氷川さん達じゃ」
樹は、ちゃぶだいに突っ伏した。それだ、そうに違いないと仮説が確信へと変わる。

「ん、お礼しなくちゃいけないからの。お昼に呼んだから昼ごろには来るじゃろ」
目を瞑りながら、婆ちゃんは大きく頷いた。
「もう呼んでたか」
既に手遅れだった。樹はちゃぶ台に突っ伏して微動だにしない。

「可愛い女の子が来るんだから喜んだらどうだい」
「そういう問題じゃないって」
どこかに一緒に出かけるならともかく、婆ちゃん含めて五人で食事というのがありえないのだ。婆ちゃんは何を言うか分からない、何をするのかも分からない。そんな爆弾を抱えて和気藹々とできるだろうか。

自分の知ってる婆ちゃんは、もっと優しい気がしたなと考えてしまう。なにより家族団欒という形式が恥ずかしい。

「なんでまた」

色々と沸き起こる疑問を押し殺して、それを聞く。婆ちゃんは尚もおかずをパクパクと口に運んで、
「あの子達も、喜んで行くって言ってたよ？」と笑ってみせた。
まさか。ありえないと手を横にふる。誰が好き好んで男の家に行くのか。仮に喜んでいたとしても、それを素直に言うわけがない。
「マジっすか？」
溜息交じりに漬物に箸を伸ばそうとして、ピタっと止まる。驚いて隣を見ると、樹がとても嬉しそうに瞳を輝かせていた。
「お前、嘘に決まってんだろ」
その姿を見て、哀れに思った。婆ちゃんに完全に踊らされている。
「あ……あぁそうだよな。分かってるって」
お前、分かってないよ、何でそんな残念そうな顔ができるんだよと、そう言ってやりたい。それにいい加減、食事を終えて欲しい。
「いいから早く食えよ。辛いのはこれからなんだから」
応じて、樹はぐったりと茶碗を手に、徐に食事を始めた。
「婆ちゃんさ、頼みがあんだけど」
あまり真面目に言っても流されそうなので、普通に問いかける。
「なん？」
「一時間だけ寝させてよ。それから掃除するから」
この要求だけは通して欲しいと真剣な表情を作る。
「若いからねぇ。そいじゃ掃除はやっとくから、気にせず昼まで寝たらいいよ」
婆ちゃんが言う、優しいセリフ。本当に優しいのだが、
「いや、手伝うよ」と言わずにはいられない。
それでも寝るための権利を家主から勝ち得る事ができたので、樹

も自分も喜んだ。

そうと決まれば逸早く寝るしかない。食器を片付けて、台所の調理道具も片付ける。寝るための用意を整えた。

自分の部屋は居間と襖を隔てた隣にある。襖を開けて自分の部屋にたどり着くと、なぜか樹も一緒についてきた。

「なんだよ。　自分の部屋で寝ろよ」
「陽あたりがいい」と樹はぼやいた。
「まぁいいけどさ」
なんでも暖かい畳が良いらしい。

「俺はこっちで寝るから好きなとこで寝りゃあいいよ」
八畳ある畳部屋で窓側を占領し、陽の光を遮るために窓の障子を閉めた。
「十時半らへんに起きればいいな」
十時半から掃除すれば昼には間に合うはずだ。計算上は二時間近く寝れる。

居間に目覚まし時計を取りに行くと、
「十時らへんに起こすから、大丈夫よ」と婆ちゃんはお茶をすすりながら言ってくれた。

「そいじゃあ頼みます」
居間との境を、バタンと襖で遮断する。樹はよほど疲れていたのか既に寝息をたてていた。自分も横になった瞬間寝れるなと考えて、ごろんと畳に転がった。

**計略**

程よく寝れたと実感する頃。襖一枚挟んだ居間から、賑やかなテレビの音が聞こえてきた。

誰の声だろうとの疑問は不安を含んだ仮説を生み、いつしか仮説は確信へと変わった。

「おい！　なんだこれ、おい樹！」

声を殺して樹を蹴り飛ばした。

跳ね起きて壁時計見れば、時刻は十一時を過ぎていた。またこのパターンかと枕に顔を埋めた。

何が『起こすから、大丈夫よ』だ。テレビの音だと思ったそれは、襖一枚挟んだ居間から聞こえる三人の話し声だった。

樹は蹴られたダメージに呻きながらも、事態の緊急性に気づいたのか目をきょろきょろと慌てていた。いつも樹を叩き起こしている事実に飽き飽きして、静かにしろとジェスチャーを送る。二人して「どうなってんだ」とひそひそ話す。

「おいハル、昼に来るんじゃなかったのかよ」

「知るかよ。　婆ちゃんは昼に来るって言ってただろ」

「じゃあ何でいるんだよ」

「分からないって」

答えに導けない、堂々巡りな会話にうんざりする。

「……どうせ二回目だしな」

樹は、いつかの朝を指して『もう慣れた』など諦め口調でぬかした。
「そりゃそうだけどよ」
確かに、どっきりの起床は確かにこれで二回目だ。寝てる姿は最初の騒ぎで見られており、自分達が知らないまま事が進展するのも今更だ。

「お、起きたみたいだよ。呑気に寝てたね～」
陽気な声と共に襖は開いて、白井さんが笑いながら立っていた。ショートパンツにTシャツという夏らしい格好をしている。奥では和気藹々とした雰囲気で婆ちゃんと氷川さんが和んでいた。

「あぁ……うん。　起きたよ、今ね。　いつ来たの？」
白井さんにそう尋ねると、
「畑も見ようかと思ってね。九時半頃かな」
なぜか氷川さんがこちらを向くことなく、ひょうひょうと背中で答えた。今日は若者らしく、ピンクのトップスにサブリナパンツらしきものを履いていた。これなら歳を間違えることもないだろう。

「そか、そか」
改めて思い知らされた。全然、聞いてた話と違うではないかと。樹は開き直り二度寝を始め、もはや全てが詰んでいる。

「まぁいいか」
何もかもが後の祭りだ。

今はとにかく気分転換を第一にすべきだろう。風が恋しくなって窓を開ける。網戸も開けて、すっきりさせてくれと風を呼んだ。遮る物が何も無くなった縁側から、目を覚ますのに丁度良いそよ風が吹いてくる。

「ハルー、水くれー」
寝ながら樹が叫んだ。寝起きで喉が渇いているのは自分も一緒だ。
「自分でやれ」
そう言って、ふと面白そうな妙案を思いつく。

「白井さん。白井さん」
うちわを手にとって、白井さんを呼び出す。
「なにー？」
「樹が水欲しがってるんだけど、あげてもらっていい？」
「樹君に？　いいけど」
白井さんが不思議な顔してパタパタと台所に向かう寸前で、
「い、いや、まって。　大丈夫だから」
樹は言って立ち上がり、ふらふらと台所へ消えていった。赤いパンツ姿のままで。

きっとあれは、ズボンを履いていないことに気づいていない。さすがやることが違うと感心する。自分にはとてもできないのだ。その姿を見て一通り笑いに身を任せ、居間へと行く。

居間はやたらと賑やかだった。狭いちゃぶ台を囲んで何がそんなに楽しいのか不思議でしょうがない。

「煎餅もらうわ」
特に切り出す話題も無いので、隅のほうに座ってパリっと煎餅をかじる。できれば、このままそっとしておいて欲しい。

「警察がいなくて良かったね」
台所から一足先に戻って来た白井さんがにやりと笑った。

あまりにも理不尽な言葉に少し固まって、
「白井さんが呼ばなけりゃあ来ないからね」と返した。
あれは偶然ではなく、白井さん達が呼んだから来たのだ。それはそうだねと、笑みを浮かべて白井さんは続ける。
「じゃあ変な女に殴られなくて良かったね、かな？」
「と、友子。それって私の事？」
「それは良かった」
適当に相槌を打つ。相変わらず、この二人が揃うと騒がしい。
氷川さんが反論しようと整理されていない言葉をあたふた言っているうちに樹が戻ってくる。
「うい～っす」
麦茶片手に俺の後ろに座り込んだ。赤いパンツ姿のままで。
「樹君、よく寝れた？」
白井さんが優しい言葉を樹にかけた。
「寝れた。超寝れた」
「寝起きは最悪だったけどな」
横槍を入れた。ふてくされているので、ぶっきらぼうに言ってみせた。そして婆ちゃんも煎餅に手を伸ばして会話に入ってきた。
「あれ以上起きなかったら、布団も服もひんむいちまうとこだったよ」
淡々と表情を変えずに婆ちゃんは言った。
やりかねない言葉と、空気を読まないセリフに全員が押し黙った。しかも、樹から服を剥いたら裸になってしまうだろうに。笑いが消え、皆が表情を固まらせて困惑する。特に氷川さんはどんなリアクションをしていいのか分からず、オロオロしていた。

「婆ちゃん女の子いるんだって」
人はどこで恥を忘れて歳をとってしまうのだろう。いつしか自分もそう思われてしまうのだろうか。

そう考えて、その答えは後側にあった。振り向いて、言ってやる。
「お前、そろそろ何か履けよ」
樹が丁度、恥を忘れてしまう真っ只中にいるのかもしれない。
「は？　うわ！」
我に返ったように樹は自分の部屋に飛んでいった。
「あはは。面白いね、文江お婆ちゃん」
白井さんが手を叩いて、涙を流して笑った。その姿が羨ましい。身内は笑えないのだ。本当にやりかねないのだから。

それからしばらくは雑談に花を咲かせて、結局なんの手伝いをしないまま婆ちゃんの昼食にありつき、そして忙しく片付け終えると婆ちゃんは帰っていった。なんでも午後はホームの中でイベントがあるらしい。

「お婆ちゃん凄いね。パワー溢れてるって感じだよね」
「白井さん達が来てくれて嬉しかったんじゃない？」
考えてみれば、久しぶりに婆ちゃんと笑った。あんな婆ちゃんでも大切な身内だ。
「元気でいてもらわないと困るんだよ」
元気でいてくれるからこそ、安心できる。あれなら、当分は心配いらないだろう。
「うん。そうだよね」
氷川さんは優しい笑顔をして頷いた。その姿に一抹の不安を抱いて、一人縁側に出る。

「婆ちゃんには世話になってるからな」
誰に言うのでもなく、芝が生い茂る庭を見て呟いた。

今日が健康で元気でも、いつ何があるかは分からない。突然の何かで体調を崩してしまうこともあるのだ。あたりまえの日常を感謝するのは大切なことだろう。だから今日は婆ちゃんと笑いあえて良かったと背伸びした。

## 濃縁

「俺、ヤマメがいる穴場知りたかったんだけど」
未練がましく呟いた。今更どうにもならない願望だ。

しばらく川魚を食べていない。あの癖の無い、素朴な味わいは塩と良くあう。だから、釣りができるような場所を教えて欲しかった。

それなのに、樹が自分だけが知らない例の絶景スポットに行きたいと駄々をこねた。そろそろ違う場所を新たに知りたかったのに。

「釣りは、魚券いるよ？」
乱獲防止のためだと白井さんは加えた。
「それは面倒だな」
そこまで気合入れるのなら、手っ取り早く金銭を払ってご馳走になった方がいい。

「死ぬから。まって。ペース早いって」
楽しく会話していると、苦しそうな声が後ろから聞こえてきた。

見れば樹がついて来ない。少し離れた所で地面に手をついて、ぜーぜーと頭を縦に揺らし、しゃがんでいた。予備校で夜遅くまで勉強している樹と違い、こちらは早寝早起きを身につけた健康体なのだ。

「だから釣りに行こうって言ったのに」
未だに女々しく引きずる。
「もっと、もっと、ゆっくり歩いてくれればいいんだよ」
ふらふらした足取りで、樹は苦しそうに言った。

「これでもゆっくり歩いてるんだけどね？」
白井さんが呆れて、同意を求めるように氷川さんに聞く。
「うん、どこか病気なの？」
「びょ……病気？」
思いがけない天然発言に樹が驚愕の表情をした。苦しそうな顔で汗を滴らせ、目を大きく開いている。病気にされるのは、さすがに可哀相だ。

「いやぁ、さすがにそれは樹が可哀相だろ」
本当に可哀相だと思っても、笑いが漏れる。
「病気って、不健康も病気かもな……っくっく」
とうとう堪えきれず、道端の木の幹をばしばしと叩いてしまう。

「あ、あんまりそっち行くとスズメバチでてくるよ！」
「マジで！　あぶね」
白井さんの注意に慌てて、道の中央に素早く戻る。調子に乗ると、とんだハプニングに巻き込まれかねない。
「あれだな。早く病気治そうぜ」
元気付けようと、未だ放心状態のまま立ち尽くす樹の肩を叩いた。

「病気じゃないから……けれどいいです、俺が遅いんですからね」
青いTシャツで顔の汗を拭き、盛大な染みを作って樹は歩き始めた。照りつく太陽に今にも負けてしまいそうな足取りだ。

樹のペースに合わせて、ようやく展望台に辿りつく。蔦が山となって木を覆い、真夏らしい鬱蒼とした緑で迎えてくれた。

「わぁ、きれい。涼音に連れられて時々来るけど、飽きないよね、ここは」
白井さんは両手を広げて深呼吸してみせた。

「確かに、絵を描くには、いいとこだな」
樹は息をきらせて死にそうな表情をしていた。それでも美大を目指しているだけあって、目に映る景色の価値は認識できるらしい。
氷川さんもまた、例の場所が好きなのか、反対側にあるベンチに座った。白井さんがたったったと氷川さんのもとに駆けて行く。
「こういうのもいいな」
樹は白井さんと氷川さんを眺め呟いた。
「おっさんだな、お前は」
事実、樹は老け顔だ。その場に座りこんで足を地面に放り投げた。
「おっさんだな」
「いいのか、おっさんで」
疲れすぎて、頭がおかしくなったのではないだろうか。
一人感傷に浸る樹を見て、長い付き合い故か、なぜかその心境が見える気がした。
つまり、今この瞬間を謳歌して名残惜しく思っているのではないだろうかという心境だ。
自分達はもうすぐいなくなる。来年にはいないのだ。彼女たちとの仲がこの十九の間だけ、今だけの短い仲だと分かっている。だからこそ、そう考えて樹は感傷に浸っているのではないだろうか。
「本当におっさんになったら……俺なにしてんだろ」
空を仰ぎ、樹は笑う。さすがに『それが今だろ』とは言いにくい。
「どうだろう、既にいないかもな」
けれども結局、毒舌になってしまう。

同じように、柱に寄りかかって空を見上げた。山の向こうには立派な入道雲がもくもくと立ち上っている。

もし将来、今を思い出したなら、その時は何を思い出すのだろうか。

楽しい思い出だったと懐かしく思うのだろうか。それとも、こうしておけば良かったと後悔してしまうのだろうか。

目指すべき目標を追うべきだったと、過去を消したくなるのだろうか。

樹と氷川さんは美大を目指している。白井さんは看護士だ。それぞれが、それぞれの道を、今この瞬間に決めて歩いて行こうとしている。

自分も、思い出に悔いを残さないように生きたいと思っている。

「良い場所だな、来て良かった」

樹は地面に倒れ、仰向けのまま空に反り返って両手を広げていた。いちいち仕草がおっさんくさい。

そこに、いつの間に来たのか、するりと表れた白井さんが樹の隣に座ってみせた。

だから驚いてしまった。

もしも、仮に樹のことを良く思ってくれているなら、それは嬉しい。樹も大喜びのはずだ。

変な奴だが良い奴でもあるので、是非とも、もらってあげて欲しい。もっとも深い意味は無いのだろうけれど。

「屋根も机もベンチもあるからね。　時々だけど、地元の人も飲み会してるよ」
来年から飲めるねと、白井さんは意気込んでみせた。
「いいね」
一緒に飲めたら、さぞかし楽しいのだろう。

適うかどうかは別にして、想像するのは悪くないはずだ。
こうして笑い合い、冗談を交え、将来に希望を馳せる。いつか今日を思い出したとき、あの時は楽しかったとそんな思い出になればいいと。

## 悲嘆

楽しい日常は足早に流れ、暑苦しかった夏もいつの間にか過ぎ去っていった。

秋も終わりに近づき、空気は冷たく布団から出るのも億劫だ。

秋がこれだけ寒いなら、冬はどれだけ寒くなるのだろうか。早朝の寒さが、寝惚け状態も重なって身に凍みる。

正直、居間まで体を連れて行くのが面倒で仕方ない。

それでもさっきからずっと、ひんやりと冷え切った家の中で電話のベル音が鳴り響いている。間違い電話であって欲しいと願いながらしばし待つも、鳴り止む気配はない。珍しく長い間鳴り続ける電話を不思議に思い、今更ながらやおら起き上がって居間に向かう。

「さむ……」

一体どこの誰が、こんな朝っぱらから用事があるのだろうか。

朝日の上っていない暁空の下、薄暗い部屋の中でぼうっと光るディスプレイには『老人ホーム』と表示されていた。時刻は五時四十五分になったところだ。

「はい。秋津ですけど」

頬に当たる受話器は冷たくて不安が募る。

「晴祐さんでしょうか？」

男の声が淡々と、電話越しに響いた。いつか会ったホームの管理人さんではないだろうか。

「そうですけど」
もしかしたら婆ちゃんに何かあったのかもしれないと、寒さに身を震わせて次の言葉を待つ。

「今、文江さんから話があるみたいなので変わりますね」
その言葉に安心する。どうやら婆ちゃんに何かがあったというわけではないらしい。不謹慎な考えかもしれないが、心からほっとしたのは事実だ。

「起きとったか、ハル」
婆ちゃんは開口一番にそう告げた。温度差を感じる電話越しにやはり疑問が浮かぶ。起きとったか、というより起こされたのだが何を伝えたいのだろうか？

「いいかい……よく聞くんだよ」
聞こえる声は諭すように静かで、いつもと何かが違った。
「なに」
「あのな……今朝な」
ふと、いつもと違う違和感が何なのか、分かる気がした。

聞こえてくる、その声は泣き声ではないだろうか。
時折震えるその声は、決して寒さのせいではないはずだ。確かに泣いている。

「婆ちゃん。泣いてんのか。何で、どうしたんだよ？」
電話の向こうで何が起きているのか、それが分からず混乱する。

「ハル、聞いておくれ」
強い口調で婆ちゃんは制した。
「何なんだよ、一体」

「いいから、聞きなさい」
声を押し殺したその口調は、言おうか言わまいか悩み、それでも伝えようとしている思惑が汲み取れた。
だからこそ、とても重要な話なんだと理解して、ゆっくりと婆ちゃんの先の言葉を促した。
「……聞くよ」
口調から読み取れる雰囲気は懐かしくて、ひどく悲しい。きっと聞いたら悲しくなる。聞かないほうがいい、良くない知らせだ。
「言うよ」
少しの間を空けて婆ちゃんはゆっくりと言った。それは覚悟を問う言葉だ。だから覚悟を決めて続きを促した。
「ああ、大丈夫だ」
「今朝な……氷川のおかみさんが死んだんよ」

## 哀哭

どこからともなくカランと透き通った音が響いて、頭の中は真っ白になった。

「さっき知らせが届いてな」

遠くから婆ちゃんの声だけが聞こえている。

視界は白と黒の世界に染まり、空白の時間が訪れた。

そして、どれくらいの時間が経ったのか、ようやく捻りだした言葉は、その現実を受け入れられない思いだった。

「う、嘘だろ？」

愕然としたまま、ありえないという文字が頭を覆った。

婆ちゃんが嘘をつくわけがない。分かってはいる。けれども聞き間違いであって欲しいと願うから聞き直すのだ。

「本当だ。本当なんよ」

あまりにも信じられない。氷川のお母さんは元気だった。ひと月に一度や二度、店に顔を出していたではないか。つい、この前でさえも。

「病気が進行していたんだとよ」

「そんな……なんで」

『あとちょっとで良くなるよ』と、そう言っていたのに。

『一緒に働けたらいいね』と言っていたのに。

あれは心配させないための気配りだったのだろうか。あの時の、あの笑顔が、あの台詞が、繰り返し頭の中を過る。

「なんでだよ」

涙は溢れて、忙しく頬を伝わる。

ここに来て半年と少し。長いようで短い付き合い。会うのは月に数回でも、その優しさは母親のようだった。おばさんは、いつも迷惑をかけてしまっていることを謝り、さっさと治らせて働くという意欲を目に秘めていた。

ハル君も何か夢中になれたらいいねと、二人きりの時には親身になってくれた。おばさんはまっすぐ自分を見て、微笑んでくれた。

『若いうちには悩むこともあるよ』と『気にすることなんてないよ』と優しく言ってくれた。

それが、どれだけ嬉しかったことか。どれだけ、これから頑張ろうと思えたことか。本当に気さくで良い人だった。だからこそ、おばさんが病院から帰る日を心待ちにしていた。それなのに。それなのに、どうして、あまりにも突然で、何も言えないままの別れ。

涙は受話器を濡らし、床に落ちてゆく。ぽたぽたと流れる涙はとても熱くて、尚更悲しくなった。電話の向こうでも、同じようにすすり泣く声が聞こえていた。

「幾つになろうが、人の死は慣れないもんよな」

もはや、泣き声としゃっくりでしか返答できない。

居間の襖が開いて、樹が「どうした？」と慌しく傍に来た。

朝早くの電話で自分が泣いている。そんな姿を見て、尋常では無いことが分かったのだろう。

「なにがあった？」

「氷川さんの……お母さんが亡くなった」

泣きながら、みっともない顔をして事実を伝えた。樹もまた愕然と目を見開いた。

「おい、まさか。そんな、嘘だろ。本当に？」

「本当だよ」

自分でさえ今になって、やっとのことで事実を受け入れられたのに、事実を受け入れられない樹に突き放すように言ってしまう。

「ハル、よく聞くんだよ」

電話の向こうで、婆ちゃんは力強く声を大きくした。

「これはな。　誰もが必ず、いつかは経験することなんだ」

幾つもの年月を経た想像しがたい重さを、婆ちゃんは言葉に紡ぐ。

「確かに……幼いあんた達を残して親が死ぬことは稀だがの」

ただ頷くだけの自分に、樹も内容を聞きたいと思ったのか、

「俺にも聞かせてくれ」と、ボタンを押して通話をスピーカに変更した。

婆ちゃんの声が冷えた居間に響き渡る。

「だから、氷川の家に行っておやり。いいかい、慰めは沢山あったほうがいい。一人でも多い方がいいんよ」

慰めと聞いて、氷川さんの姿が思い浮かんだ。

こうして自分が涙を流している今、氷川さんは何を思って何処で何をしているのだろうか。この凍えるような寒さに包まれて、きっと想像することのできない程の辛さが圧し掛かっているはずだ。

婆ちゃんの言う『慰めは沢山あったほうがいい』という言葉が重く聞こえた。例えそれが表面的なものであっても、慰めは沢山あったほうがいいだろう。

中には心から同情してくれて一緒に泣いてくれる人だっているはずだ。

それならば、すぐにでも氷川宅に行かなければならない。

「あぁ分かった。行くよ」

「いいかい、二人で行っておやり。私も行くけど二人は二人で行くんだよ。できることは何でもやるんだ。そして、それをきちんと伝えるんだ。それが大事なんだ」

言葉に出さなければ思いは伝わらないんだと婆ちゃんは続けた。

そんなやり取りの中で、樹が思い立ったかのように、こたつの下から電源ケーブルを取り出して、電源を入れた。

「入れよ、震えてるぞ」

樹がこたつ布団を上げて手招きした。

そう言われて気づく。唇も体もガクガクと震えていたのだ。生気の無い瞳をした樹に促されてこたつに入り、ようやく涙を拭く。

「大切なのはな……」

最後に付け加えるように、婆ちゃんの声が居間に響いた。

「一緒に泣いてあげるんだ。悲しみを共有しておやり。……今日は泣いていい日なんだから」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――

　支度を済ませ、どうにか氷川邸に着いたのは連絡があってから二時間後のこと。
　しばらくはコタツから動けず、心を落ち着かせるだけで精一杯だった。
　氷川商店は営業しておらず、裏の本家にて皆が悲しみを漂わせていた。黒い喪服姿で埋め尽くされた庭からは、至る所で泣き声が聞こえていた。氷川の親父さんも親戚に囲まれて泣いていた。近づく隙は無く、知り合いも数えるしかいないので様子を遠巻きに見守る事しかできなかった。
　唯一話せたのは氷川のお婆さんで、
「涼音は自分の部屋から出て来ないんじゃよ」と悲しげに教えてくれた。
　つくづく思い知らされた。死別という悲しみに溺れたとき、本人はどうすることもできないのかもしれない。
　氷川さんは今、きっと溺れているのだ。
　助けるために部屋に行けるわけもなく、
「そうですか……」としか返せなかった。

何もできないまま、寒々とした鉛色の空の下、立ち尽くす。

どうしようもないと、自分の無力さに悔しがっていると、白井さんが建物の奥から走って来た。

「来てくれたんだ。ありがとう」

白井さんもまた、頬に幾つもの涙の跡を残していた。涙を流して流して、ようやく落ち着きを取り戻せたような、疲れきった顔をしている。こちらに向ける、力ない笑顔が痛々しい。

「氷川さんと会った？」

「ううん」

白井さんは悲しそうに首を振った。

「誰とも会いたくないみたい」

遠い目をして白井さんは氷川家を見つめた。

つられて同じように視線を向ける。氷川さんは、あの大きな建物の何処かで、ただ一人で誰とも話さず、ひたすら泣き悲しんでいるのだろうか。

「ホントに何もできないな」

慰めることもできない。会うことさえできないのだ。一緒に泣くことなど適うわけがない。

しばらく前、無神経な発言をして氷川さんを怒らせた時を思い出して、尚更悲しくなった。自分の無力さが悔しくて、それでも何か役にたつ事があるなら教えて欲しいと、そう願わずにはいられない。

白井さんはハンカチで顔を覆って泣き始めた。

きっかけは分からない。波のように悲しみが引いては表れるのだ。

自分自身、ここに来る前は、泣くのが恥ずかしかった。道行く人に、見られないようにと涙を隠してここまで来た。

けれど、今となってはもはやどうでもいいのだ。涙に抵抗するだけ無駄であることを知った。ぽろぽろと涙を落として泣いてしまう。

泣く理由があるのだ。涙が止まるはずなどない。

樹も泣いた。失った悲しみ、別れの辛さ、全てが涙を引き寄せた。心にぽっかりと大きな穴が開いてしまったように感じて、冷たい風が頬を固まらせた。

結局、氷川さんと会おうと努力するも適うことはなかった。

## 温泉

頭が考えることを拒否して、言葉が出てこない。
思考は全て白く霞んで消えてしまう。家のこたつに寝転がり、天井を見つめた。

「なぁ樹」
樹は猫のようになって、こたつの中で丸まっていた。
「ん？」
しばらくして、くぐもった声が返ってきた。
「温泉でも行くか……」
幾らこたつに入っても、暖かさを感じられない。

ひどく凍えてしまうのは、悲しい出来事があったからなのだろうか。暖かいお湯が無性に恋しく感じてしまう。

昔から風呂は好きだった。悲しい出来事があると、いつも銭湯や温泉に行っていた。お湯に浸かれば涙を流しても拭く必要が無かった。凍える心を、体を暖かくすることによって誤魔化すことができた。

ちらほらいる温泉客も孤独を紛らわすには丁度いい。
そして何よりも、悲しみを洗い流してくれるような、そんな気がしたのだ。水音が響く浴場で、涙を幾度も流しては、お湯で顔を洗ったのを覚えている。時には一時間以上も、揺れる水面と景色とをぼんやり見ていたこともある。昔から悲しみに押しつぶされそうな時、風呂に行ったのだ。

湯冷めをしないようにと、暖かく装って着いた温泉は空いていた。

何かを話すわけでもなく、何かを行うわけでもなく、ただぼうっと湯船に浸かって窓に映る冬景色を見つめる。視界はぼんやりと湯煙に覆われ、時々揺れてしまう。

ここに来て色々な人達と出会い、沢山の繋がりを貰えた。今までを思い返せば自然と涙が流れるのも仕方が無い。

「ハルさ……こう言ったらあれだけど」

頭に手ぬぐいを置いた樹が、湯気の行き先を見つめながら話しかけてきた。

「死んでしまったから気づく事って沢山あって、気づいたときには遅いんだよな」

水音が響く浴場に、樹の声が通り抜けて心の奥深くまで届いた。

「そうだな」

自然と喉が熱くなる。

人はいつか死んでしまう。

それは誰しもが理解している事実だ。

けれど頭で理解してるだけで、現実として向き合うことは避けているのだ。

いつの日か、親しい人が死んでしまってから気づいてしまう。沢山伝えたいことがあったのにと。最後の最後まで心配をかけてしまったのではないかと、不安を抱かせたままではなかったかと、悔やむのだ。

歯を食い縛って、そんな表情を見られない様にとタオルを顔にのせた。自分は死にゆく人にとって、不安の種になってしまうのだろ

うか。それとも、あいつは一人でも大丈夫だと、そう思ってもらえるだろうか。そう考えると、しなければいけない事が山ほどある。このままではいけないと強く思う。

「氷川さん大丈夫かな」

小さな決意を湯船で抱いていると、樹が再び呟いた。

「大丈夫だろ。白井さんもいるし……時間が経てば、どんなことでも忘れるさ」

言い方は酷なのかもしれない。けれど、それも事実であることには変わりない。

必要なのは長い長い時間だ。長くて長くて、いつの間にか何とか立ち直れているような時間だ。

「そうかもな」

樹もタオルで顔を覆い、頭を壁に預けた。

「立ち直れるさ、きっと」

そうあって欲しいと、言葉にして何度も繰り返す。

氷川さんには白井さんがいる。頼りになる親父さんだっている。自分も役に立てるのであれば、どんな事もやりたい。何ができるかは分からないけれど何だってやるつもりだ。

そんな思いを抱いて、いつまでも悲しんではいられないと、心と体を温めた。

# 追悼

落ち葉が風に煽られて、足元を騒がしくする。

木枯しが、その名の通り木の葉を枯らし、あざ笑うかのように四方八方へと葉を散らかしていた。氷川商店の前を流れる川は冷たそうで、木々は隙間を空けて寒そうだ。景色も寂しげに朽葉色に染まっている。

ジーンズのポケットに両手を突っ込んで、マフラーに口を埋めながら呟いた。

「寒い……」

店先の落ち葉掃除もキリが無い。

掃いても掃いても、冷たい風が落ち葉を運んでくる。いっその事、捨てずに集めて店の前で焼き芋でもすれば、客も来るのではないだろうか。藍色の暖簾が重々しく揺れる中ぼんやりと考えた。

一体、これからどうなってしまうのだろうか。氷川のお母さんが亡くなってから、もう二週間以上が経つ。十一月の終わり、雪がちらほらと降り始めているこの頃だ。

昨日から氷川商店も営業を再開した。店を回すのは自分と氷川のお婆さんだけだ。涼音は未だに心を閉ざしたままですと親父さんは言う。

「まだ二週間ちょっとだもんな」

身内の死別から立ち直るのは、そんなに簡単なことではない。親父さんだって悲しい目をしていた。

寄せては返す悲しみを色々と思い巡らしながら、散らかる落ち葉を塵取りに収めて店の中に入った。

外が寒くて曇っているせいか、それとも氷川のお母さんが亡くなって皆が悲しんでいるせいか、店の中は薄暗くて、石油ストーブの燃える鉄だけがぼんやりと明るかった。お婆さんは、奥の部屋で黙々と何かを書いている。

「掃除やっておきました。しばらくレジ見ながら電話番してます」

そう言う自分の言葉も、やはり単調で落ち込んでいた。

お婆さんからの返事も返ってこない。昨日もそうだった。きっと聞こえていないか、答えるのが億劫なのか、そのどちらかだろう。あれだけ悲しい出来事があったのだ。

レジ脇に椅子を持ってきて座り、薄暗い店内の時計を見上げる。時計の針は十一時を指していた。開店は七時なので、そろそろ四時間が経つ。

うとらうとらとストーブの暖気が心地よく感じ始めた頃、親父さんがどたばたと足音を大にして裏の本家からやってきた。この時間帯に、店に顔をだすことはないので珍しい。何事かと動向を見守る。親父さんは店の中をぐるりと見回して、溜息をつき、お婆さんを呼んだ。

「お母さん。涼音を見ましたか？」

「いんや……。　どうかしたんか」

考え込むような仕草をして、親父さんは困った顔をした。

「いえ、部屋にいなかったものですから」

頭に巻いた手拭を取り、額の汗を拭っていた。
「どこにもいないのかい？」
お婆さんは立ち上がって声を大きくした。
「いえ。　多分、大丈夫です。　一応、置き手紙があったので」
「手紙？」
少しの間を空けて、親父さんは徐に口を開けた。
「えぇ。　少し出かけてきます、とね」
「それは、大丈夫なのかい？」
「大丈夫でしょう。　きっと」
店内に、親父さんとはっきりした言葉が響いた。

そんなやりとりが、なぜか美しく見えてしまう。家族の間だけに成り立つ信頼が見えたからだろうか。親父さんは優しい笑顔のまま、娘を信じていると、そんな眼差しをしていた。

「それに、暗くなるまでには帰るそうです」
お婆さんも、その言葉に安心したのか、いつもの場所に力なく座りこんだ。
「涼音は、ああ見えて芯の強い子です。大丈夫ですよ」
「そうやな」
親父さんは、ゆっくりと店先に出て空を見上げた。

一通り見上げてから、こちらを振り返って、言った。
「今日はもう閉めましょうか。こんな日です」
人はそんなにも力無く笑えるものかと、そんな表情をして親父さんは言った。その言葉が本気なのかどうかと悩んでいるうちに、親父さんは店を閉めるための鍵一式を寄こした。
「……大丈夫なんですか？」

胸のうちで渦巻く蟠り、その全てを解消したくて聞いてみた。開店してまだ四時間しか経っていない。こんな時間に閉店して大丈夫なのかということ。
それだけではない。他でもない氷川さんが、大丈夫なのかということだ。主語のないまま尋ねる。

「大丈夫ですよ」
きっぱりとした返事が返ってきた。

親父さんは外に出ている商品を店の中に運びこんだ。大きな畳椅子を中に入れながら、自分の方を向いた。

「涼音を分かってあげてください」
静かに、そう言ってみせた。

突然の、理解しがたい言葉に驚いてしまう。
「私は親ですが、できないこともあります。　きっとあの子は、誰にも分かってもらえないと思っているでしょうから」
言葉が出て来ない。
「……」
「晴祐君も、そう思ったことはないですか？」
シャッターをガラガラと閉めて、親父さんは言った。
「思った事はあります」
周りから理解されないと思う気持ちくらい、誰にでもあるはずだ。

けれど、それとこれとでは比較にならない。現に自分は中途半端な人間だ。
氷川さんと自分とでは、立っている場所も目指している場所も、何もかもが違うのだ。

閉ざされたシャッターに鍵をかけて、親父さんに返した。いつになく丁寧に接してくれる親父さんは、自分の言葉に何かの返答をするわけでもなく、笑顔のまま肩をぽんと叩いてくれて、奥へと消えていった。

薄暗いランプに照らされた店内で、一人孤独に立ちつくす。ぽつんと残された寂しい店内で、最後の締め作業と確認をして、足早に店を後にした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー

心がすっきりしない。

急な閉店に加えて氷川さんの事も心配だ。心の中さえも、鉛色した空模様のように、どんよりとしている。寒さで耳が痛むのを堪えて、自転車を走らせる。

「一体、俺は何やってんだろうな」

誰の役にもたてず、自分のためだけに頑張り、ただ夜を寝て朝を起きている。氷川さんの役になどたてるわけがない。自分の足取りさえ覚束ないのだ。

寒空を透かす枯れ木に氷川さんが心配になった。

もしかすると、白井さんの家にいるのかもしれない。何かしらの答えを見つけようとしているのかもしれない。

長く独りのまま、自室に篭っていた氷川さんが、置手紙を残して外出したのだから、何かに区切りをつけようとは思っているはずだ。もしかすると、これから先、将来について答えを出そうとしているのかもしれない。

「いや……」

否定の言葉を口にだして考えた。

氷川さんにとっての将来は、もう決まっているはずなのだ。それは逆らう事のできない将来だ。大学は諦めるしかない。親父さんと一緒に、店を支えてゆくしかないのだ。それ程の重圧が氷川さんには掛かっている。絵を諦めようと外出したのかもしれない。

けれど、所詮は自分の独りよがりな考えだ。もしかしたら違うかもしれない。それに考えるべきことは、こんなことではないはずだ。考えなければいけないのは他でもない、自分自身の事。

「俺はどうすっかね」

吐いた息が白く、ふわっと空に舞い上がった。

将来のため、勉強をしようと心に決めた。樹とも一年の約束でここにいる。一緒に頑張ろうぜと言う言葉の背後には、自分に気を使ってくれているびだ。おそらく、自身の大学を先延ばしにしてまでも樹は、一緒に夢を追いたいと願っている。

だからこそ、東京に帰って専門学校を探さなければならない。それが自分の将来であり、身近な夢なのだ。

「そうは言ってもな……」

氷川商店がやはり気になってしまう。偶然に働くこととなったと

いえ、思い返せば本当に世話になった。

亡くなった、氷川のお母さんも、親切に接してくれた。将来を考えて頑張ろうと思ったのも、氷川家あってのことなのだ。

本来なら、バイトの身分である自分がそこまで考える必要は無いのだろう。けれども、家族のように接してくれた氷川家のために何とかしたいと思うのも、また事実なのだ。

自分は今、何をしたいのだろうか。

子供達が数人、はしゃぎながら目の前を駆けて行った。

「……昔に戻る、か」

寒さの中でも、熱そうに頬を赤らめて動き回る子供達。ここに来る前は、そんな小学生や中学生の時に戻りたいと願っていた。こんな風に自信を無くして、深く悩むことなんて無かったように思えたからだ。

あの頃は、ただひたすら将来は明るくて、自分を嫌になるような悲しい未来は来ないと信じていた。

それでも今は、そんな昔に戻りたいという願いを下らないと考えられるようになった。

人は悩んで悩んで、そして成長する。ふわふわした足取りであっても、どこにゆこうか定まらなくても、それは無駄ではないのだ。自分は大事な何かを守れるような、そんな大人になりたい。そう考えられるようになった。

自分の気持ちに正直で、それに向かって一直線に頑張ることがで

きればいい。

やるべきことの膨大さから、悔しさに歯を食いしばり走っていると、分かれ道を前にしてまだ時刻が昼前である事に気づいた。

立ち止まってガードレールに足を置き、しばし考える。家に帰っても樹は予備校なので誰もいない。

今日の仕事用にと買った昼食も自転車カゴの中だ。

「家には帰りたくないよな」

秒針だけが動く家で、一人きりは寂しいのだ。

まだ風に弄ばれて寒さに凍えながらも、外で昼食をとったほうがマシだろう。

だから自分は、寒くなってすっかり足が遠のいていた、あの展望台のある山頂の公園に行ってみようと思い立った。

## 酷寒

途中でコンビニに寄り、暖かい缶コーヒーとチョコレートを買った。缶コーヒーはカイロの代わりだ。

冷たい風が吹き荒ぶ中、自転車で向かう山頂は予想以上のきつさだった。

よく聞く話で、動けば暖かくなると言うけれど、それ以前に寒さから体がうまく回らない。寒さに身を震わせて、ようやく山頂に辿り着いた。

気分転換をしながら昼食を取ろうと奥のベンチに向かい、はっとした。

小さな背中を見せて、その人はいた。カーキー色をしたモッズコートに、ストールを首に巻いて、こちらを振り返る。目と目があって立ち止まった。

「……ここに来てたんだ」

申し訳なく思う。その人は大きく目を開いてから、慌てて視線を逸らし背中を向けた。

「今日は……会いたくなかったかな」

ベンチに座る氷川さんは、寂しそうな背中で戸惑いがちに、そう言った。

その気持ちは分かるつもりだ。誰にも行き先を告げず、一人になるためにここに来たのだから。

そういう時は誰にでもある。一人静かに考えたいと願うのだ。だ

から自分は、それを尊重しなければいけない。

「ごめん、気づかなくて。帰るよ」

踵を返して、ふと立ち止まる。今まで会おうと、思いを伝えようと願っていたのだ。会えたら言おうと決めていた言葉だけ伝えることにした。

「あのさ……」

お互いが背中を向けたまま、少しだけ横を向いて告げる。

「できることあるなら何でも言ってよ。　役に立てないかもしれないけれど、頑張るからさ」

返事が返ってくるとは思っていない。それでも伝えなければいけないと思ったのだ。氷川さんのため、自分のために。

「そいじゃ。　またね」

氷川さんの背中に向かって手を振り、自転車に向かって歩き出す。こんな言い方しかできないけれど、何も伝えないよりかはマシなはずだ。

それに元気そうとはいえないが、激しく落ち込んでいるようにも見えなかった。やはり強いと、そう思った。

「家に帰って勉強でもするか」

小さな声で自分を勇気づけた。

氷川さんのように、自分もまた、頑張らなければならない。落ち葉を踏む音が懐かしくて、公園を後にする。

ふとそれに気づいたのは、落ち葉の軽快な音に耳を傾けていたから。

今にも雪が降りそうな程、暗く重い空に小さく響いたのは、すすり泣く声だった。

その声を聞いて、いつの間にか足は落ち葉を騒がせ、指先は氷川さんの肩に触れようとしていた。

触れた、肩は弱々しく揺れていて、思わず手を離してしまう。

「って、どうしたの、大丈夫？」

一瞬、知らないフリをして帰ったほうがいいのではないかという選択肢も、頭の中を過ぎった。

それでも選んだのは、声をかけるという勇気だ。帰れと言われたら帰ればいい。すぐそこで泣いている人がいる。こんなにも寒い山頂で、一人で泣いている人を放っておけるわけがない。

けれど氷川さんから聞こえた言葉は、予想していたものとは違うものだった。

背中を小さく丸めて泣いて、振り絞る声で氷川さんは言う。

「何が。　誰が。　どんな風に私を助けてくれるの。　何も知らないくせに勝手な事言わないでよ」

何かを守るように、吐き捨てるように、そう言った。

その口調は悲しみというより、憎しみの感情が見えた。手の甲でごしごしと涙を拭く氷川さんに、親父さんの言葉を思い出す。

『きっとあの子は、誰にも分かってもらえないと思ってます』
肩と唇を小刻みに震わし、こちらを向いたその表情は、誰も私の気持ちを分かるわけが無いと、世界の全てを侮蔑しているように見えた。口元が少し歪んでいる。

「ごめん、悪かった」
垣間見える怒りの感情を静めたいと思った故なのか、それとも何もできない自分を悔やむゆえなのか、謝罪の言葉が自然と口から出た。

「ねぇ。　誰が……誰が私を分かってくれるの？」
袖をぎゅっと掴まれて、不意に引っ張られた。繰り返し、上下に揺すられた。

濡れた瞳には、呆けた男の姿が映っていた。
「誰って……」
その質問には答えられない。

「お母さんが死んで、お父さんのために頑張らなくちゃいけなくって」
私の悲しみが分かるのかと、涙を溜めた瞳が言葉以上に訴えかけてくる。分かるなら答えてみせろと言わんばかりだ。

「頭の中が真っ白なの。分かるかな、分かるわけないよね。悲しくって苦しくって、でもいつまでも引きずっていられないって」
引きずっていたら皆に心配をかけてしまう。家族にも友達にも、そして店にも迷惑をかけてしまう。

けれど悲しさは取れない。何もしたくないという気持ち。もっと

泣いていたくても、それさえできない。悲しみにゆっくりと浸ることさえ、許されていないのだ。

「夢だって、まだ捨てられない」

「……」

「ねぇ、分かる？　私は何度自分を捨てればいいわけ？」

答えられるなら、答えてみせろと、そう言わんばかりの形相に思わず一歩後に下がってしまった。

溢れだす感情の矛先が自分に向けられている。けれど自分にはそれを受け止めることも、かわすことも、ましてや反撃することなどできやしない。

何とも答えられずに、ただ呆然と見つめ返すしかないのだ。

「ハル君は、いいよね」

ようやく聞こえた明るい声は、嬉しさも楽しさも感じられない、冷たいものだった。

「したいように遊んで、したいように生きてる。友子だって、樹君だって、他の皆も全部そう」

「……」

だから誰にも分からないはずだと、そう言いたいのだろうか。氷川さんの言葉には棘があった。

静かに聞こうと決めた心の中に、微かに燃え立つ熱いものが生まれてしまう。

確かに自分は我侭で、周りに甘え、したいようにして生きてきた。それは事実だ。それでも、少しなら分かるつもりでいた。

「……少しは分かるよ」
それが火に油を注ぐような発言だったとしても、言わずにいられなかった。人の心は理屈通りには動かない。
「何言ってるの？　そんなわけないじゃない」
向けられたのは嘲笑。泣いているのに笑って、明るい声なのに見下して、からかうかのように氷川さんは言ってみせた。
「文江さんから、あんないいお家に住まわせてもらって、樹君と一緒に楽しく過ごしてて、どこが分かるの？　まるっきり正反対じゃない」
呆れたように、早口で、白い吐息を舞わせて言い放った。
「それは……」
反論しようとして、思い出した。
それは体を凍えさせている冬の寒さをだ。今の今まで会話に夢中で、寒さを忘れていた。けれど今の言葉で自分がなぜここに居るのか、その理由が分からなくなってしまった。突然の虚無感に襲われてしまう。
寒さで身を震わせまでして、一体自分は何をしているのだろうか。怒りの矛先を向けられた今、何の返答もできずただ遠くの景色を眺めている。
少しでも支えになればと思ったのだ。少しでも元気になってくれればと思ったのだ。その願いが憎しみとなって返って来た。これなら『そうかよ』と一瞥して帰ったほうがいいのではないだろうか。そうすれば、きっと自分は楽になれるはずだ。

けれど、それをしないのは、それが悲しい結末に繋がる事が分かっているからだ。自分も氷川さんも、悲しいままで終わってしまう。何を言われても帰れと言われない限り、ただ頷いて氷川さんの言葉に耳を傾けようと、そう決めたのだから。

それでも、硬く踏み均された地面を見つめながら、自然と口が開いてしまった。

自分が可愛い故なのか、それともプライド故なのか、湧き起こる感情とに堪えきれなくなっていた。

気づいた時には涙が滲んでいて、いらない過去を口走っていた。

「俺だって……」

涙を止められない。感情が抑えられない。

「俺だって、父ちゃんと母ちゃん、二人とも死んでんだよ」

何が何だか分からなくなって、吐露してしまう。

泣くまいと、誰にも言うまいと、そう決めて引越しして来たのに。結局は、氷川さんの『どこが分かるの？』という言葉に反応してしまったのだ。

「去年、妹も一緒に三人とも死んでんだよ」

歯止めがかからない。

「俺なんか両親いないんだよ。そっちこそ分からないだろ、俺の気持ち」

向けられた侮蔑の表情を、同じようにして返した。吐き捨てるように、強い口調で告げた。

自分のほうが辛い目にあったのだと、そんな感情が生まれてしまう。分かってあげようとしていたのに、いつの間にか分かってもら

おうとしている自分がいた。

だから、その感情に溺れるわけにはいかないと、今更ながら溢れ出す涙を懸命に拭いて、胸から沸いて出てくる言葉を言わないようにと歯を食いしばる。氷川さんは驚いた表情を見せて、何も言えないまま、ただ自分を見つめていた。

言いたい事を言ってしまったせいか、少しの落ち着きを取り戻して、数回の深呼吸の後、感情の荒波から抜け出した。

「……ごめん、間違えた。　こんな事言うつもりなかった、ごめん」

未だ目を丸くしたまま、驚いた表情が目の前にある。

「昔の話だった。　強く言ってごめん」

さっきとは一転、心配そうに見上げる氷川さんを見て後悔する。

ポケットにあった缶コーヒーを、せめてもの罪滅ぼしになればと、氷川さんにそっと手渡した。驚いたまま呆然とする氷川さんに笑ってみせた。

「ごめんね、これあげる。それで……、せっかくだから、ちょっと聞いて欲しい」

躊躇いがちにも受け取ってくれた氷川さんを見て、少し笑うことができた。

重たい雲に覆われた空を見つめ、口を開く。

「言うまいと決めてたんだけどね、俺も親いないんだよ」

驚かせてしまったのだ。言ってしまったのだから、その過去を晒すことにした。中途半端に終えるのは多分、良くないだろうから。

## 昔日

奥にしまった記憶を少しずつ引き出していく。
鍵をかけて、二度と思い出さないようにと押し隠した記憶だ。簡単には引き出せない。

「えっとね……」
そういえばあの日も、今日のように寒さが厳しく、空が重たくて、凍えるような風が吹いていた。

「高校二年の終わり頃、去年の二月かな。　父ちゃんと母ちゃんと妹が死んじゃったんだよ」
今度は泣くまいと、軽く笑みを浮かべながら話す。

自分の過去を語るから悲しくなる。だから、頭の中で他人から聞いた経験談として人に伝えることにしているのだ。

「その日、俺は試験があって、父ちゃんと母ちゃんと妹だけが三人で日帰り旅行に行ってたんだ」
試験問題を解きながら、時折窓から見える雲を追い、今頃は美味しいものを食べて楽しんでいるのだろうかと嫉妬していた。

「その旅行先で、大馬鹿野郎のトラックに巻き込まれてさ」
出かけて高速に乗ってしばらくのことだった。トラックに巻き込まれて即死だったと教えられた。
学校から帰って来て、体を温める間もなく玄関で、その報せを婆ちゃんから聞いたのだ。

「即死だったと……婆ちゃんが電話で教えてくれたんだ」

その時の感覚だけは今も鮮明に覚えている。思い出すだけでも、未だぞっとする。突如として足元の地面が崩れ、真っ暗な奈落に落ちていくような感覚だった。足腰が立たず、その場に座りこんでしまった。

氷川さんは驚いた表情のまま固まっていた。せっかくなので一気に喋ってしまおうと、淡々と話すことにした。

「それで思ったよ。　一人きりになってしまったってね」

あれは悲しみなどではなかった。身内を失った寂しさでもなかった。ただの絶望だったのだ。唇は震えて、ただただ怖いと、全てが恐ろしいと思った。

何もできない、どうすれば良いかも分からない。誰にも相談できない。足も動かない。腰を抜かしたまま、しばらく動けなかったのを覚えている。

悲しい出来事があった時、辛いことがあった時、人は人と対面して慰めてもらいたいと願うはずだ。

「相談したくても、両親はいないし、事故が起きた現場にもお金が無くて行けなかった」

一番の理解者であるはずの親がいなくなってしまった。唯一、兄貴がいるのだけれど、かなり遠くに住んでいた。

あの時ほど貯金が無いことを悔やんだことはない。誰か親戚が来てくれるのを、ただひたすら寒い家で待つことしかできなかったのだ。

「結局、親と妹の顔を見れたのは、翌日に兄貴が来てくれてからだったんだ」

兄貴が来るまで玄関の電話機の下でずっと、うずくまって泣いて

いた。制服のまま着替える事もせず、灯りをつけることもせず、いつの間にか陽は沈み、夜通し泣いていた。

灯りをつけても消しても、全てが真っ暗に見えた。何かを食べたいとか、飲みたいとも思わなかった。ひたすら寂しくて、一人ぼっちで孤独で、心の中でうねる悲しみや辛さを吐き出す事もできず、それらを全部、圧縮して圧縮して心の中につめこんだ。

体を丸めて過ごした夜は、悪夢として今も時々見てしまう。

少しの休止を置いて、氷川さんを見ると相変わらず驚いたままで、何を言っていいか分からないと、瞳を揺らしていた。

「それからは、ずっと一人で過ごしてたよ」

両親が亡くなって、ぽつんと残されたのは、一人では生きていけない高校生だった。何日も家に閉じこもった。学校にも行けなかった。

「……ずっと？」

氷川さんが恐る恐る小さな声で、疑問を口にした。

「そう。　自分の家にいたかったから。　駄々をこねて離れなかったんだ」

ずっとずっと閉じこもっていたいとさえ思っていた。両親の写真も妹の部屋も全部そこにはあったのだ。少しすれば何てことなく、両親も妹も帰ってくるような気がした。

どの親戚のもとにも行かず、家で最低限生きていければそれでいいと思っていた。それに、それだけではなかった。

「それに自分の家で、このまま死ぬのもいいかもしれないと、そん

な事も考えてた。今考えると随分追い詰められてたんだけどね」
そこまで追い込まれたのはその時だけだ。

結局、自分の家にいたいという願いは、所詮子供の浅はかなものでしかなかった。家を一個維持するだけでも、学生にはとうてい払えないような金額が必要なのだ。未だローンが残る家を、親戚も維持させたいとは思っていなかった。

「どうしたの？」
心配そうに氷川さんは尋ねた。
「結局、家を維持するのは無理ってことで手放すことになったよ」
「……そう」
家と土地は親戚によって処分された。

自分の存在が始まった場所。小さいときからずっとずっと温かく見守られて、唯一心の全てを晒すことのできた場所。見渡せば、父さんが、母さんが、そして妹が存在した証拠が沢山あった。旅行先で撮った、楽しそうに笑っている家族写真。今にも『ご飯ですよ』という声が聞こえてきそうな台所。今にも笑い声が聞こえてきそうなテレビの居間。妹が階段から降りて来る時間。そんな思い出に浸ることさえ、もはや自分にはできない。

ベンチに座る氷川さんの隣で立ちながら、マフラーを口元に寄せて、準備する。
「それで残る荷物が、俺一人」
思い出すのも苦い、嫌な記憶だ。
「誰が引き取るかで親戚は揉めるに揉めた。　こうなると本当にお荷物だよね」
自分は生きていた。けれど体の置き場所に、自由は与えられていなかった。文字通り荷物だった。

「案外血の縁って薄いのかもね」
これは今だから笑って話せる事で、当時は笑えなかった。今だからこそ、本当に笑える。お前らなんかの世話になるものかよと、そう笑えるのだ。後二，三年で自立できる歳になるのだから、それまでの辛抱だと擦り合っていた。

「唯一理解してくれた兄貴は結婚してて子供もいるからね。しかも遠くに住んでるから甘えるわけにもいかなくてさ」
あの時の兄貴の顔が脳裏に浮かぶ。何とかして自分を安心させようと、必死に説得しようとしていた。

しばらく一緒に住もうと誘ってくれた。無理に決まっているのに。子供が二人いて何とか生活していたはずだ。現に奥さんは、後で顔を曇らせて困っていた。

だから、そこまで迷惑をかけるわけには行かない。
「それでさ……」
ぐっと声がかすれて涙が目に溜まる。これを言うのは正直きつい。他人の話だと、過ぎた話だと自分に言い聞かせても涙がこみ上げてくるのだ。

マフラーを更に目元に上げて、涙を隠す準備をする。氷川さんか少し顔を背けた。

「それで、俺は探したんだよ」
兄貴にだけは迷惑をかけられない。荷物扱いする親戚共の手を借りようとも思わない。恩を作ってたまるかよと、そう思い、家を手放さなければ行けない日が刻々と近づく中で必死に探したのだ。

「タウンページで、自分を引き取ってくれる場所を……」
自分のうちに眠る、一番悲しい記憶だ。自分が可哀相で、惨めで、守ってあげられなくて本当に悔しくて沢山泣いた。

ページをめくる自分の手が小さく見えて、悔しくて二冊あったタウンページを二冊とも破り捨ててしまった。泣いて、叫んで、怒鳴りながらビリビリと破いて家を散らかした。ダメにしてしまったタウンページを見ながら、破ってしまったことを後悔して再び何度も泣いた。

そして樹に電話して、元気になったと、ちょっと探し物がしたいからと言って再び自分を引き取ってくれる場所探しのためにタウンページを借りたのだ。

頬に流れる涙を、氷川さんには見せまいと、マフラーで拭く。
「どの項目を探せばいいのか分からなくってさ。孤児院とか。子供で探したり、施設で探したんだよ」
どこが良いのか分かるわけもなく、ただ暗がりの中ぼうっと施設の名前と電話番号が並ぶ紙を眺めていた。

電話する勇気など、簡単に振り絞れるものではない。それでも、なんとなく好印象的な名前の施設に電話したことはある。

ちらりと氷川さんを見れば、言葉を失っていた。戸惑いの色を瞳に浮かべて、自分と氷川さんの間にある空間を見つめていた。
「結構あるんだよね、そういうとこ。電話して、まともに相手してくれるとこは稀だけど」
毎日、少しずつ電話したのだ。無碍な態度で断られたり切られたりもした。引き取り先の親戚の同意はあるのかと、未成年からの直接の依頼は対応しかねるとも言われた。

「まぁ、結局どうなったかというと、家の電話が繋がらなくなったんだよ。金払ってなかったから」
ようやく涙も乾いた。だから氷川さんの方を向いて笑って告げた。たまたま親がいつも遅めに料金を払っていた事もあり、電話が止められた。

笑って言う自分に、氷川さんは視線を合わしては逸らし、気まずそうな表情をした。
「……うん」
やはり、気まずそうな返答が返ってきた。
「電話が止められて嬉しかったけどね。もう自分を売らなくてもいいと思ったから。やっぱりこのまま、思い出が眠るこの家で死ぬのもいいと思ったよ」
本気に思っていた。人は追い詰められると色々考えてしまう。

「それでさ。そう思ってぐったりしてた真夜中に、玄関を誰かが叩いたんだよ。誰かと思って覗いたら、それが婆ちゃんだったというわけ」
「そう……なんだ」
「婆ちゃんには世話になったんだ」
引き取る親戚同士の話し合いの中に、婆ちゃんは含まれていなかった。爺ちゃんが死んだばかりの婆ちゃんに任せられるわけがないと、始めから蚊帳の外だった。

けれど自分が誰かのところに行くのを頑なに拒んでいることを兄貴から聞き、飛んで来てくれたのだ。これだけ離れている田舎から、夜通し列車を乗り継いでやってきてくれた。列車が終電で動かなくなってからも、そこからタクシーで来てくれたのだ。

「婆ちゃんは、あんたがここにいるなら私もいる、って聞かなくて」
ここで死ぬんだと、夜中に騒いだり喚いたりもした。婆ちゃんは一緒に行動する、と頑なに意思を通した。

それが、どんなに嬉しかったことか。今だから理解できる。

その時初めて悲しみを露にして泣く事ができたのだ。どんなに悲しかったか、一人で暗闇の中、自分を引き取ってくれるところを探すのがどんなに惨めだったか、誰にも頼れなくて家族の枕を集めて寝ていたことも全部、全部話した。夜はいつも叫びそうな程に心が痛くって苦しかったことも吐露した。周りから家も何もかも消えて本当に親と妹の存在が消えてしまいそうで、自分を守ってくれと、婆ちゃんに頼んだのだ。高二にもなって婆ちゃんにしがみついて泣いたのを覚えている。

「それで婆ちゃんに頼んだんだ。迷惑をかけないから……俺の傍にいて下さいってね」
婆ちゃんは頷きながら話を聞いてくれた。一緒に涙を流してくれた。婆ちゃんが涙を流す度に、自分の悲しみも減っていく気がした。

何よりも誰かに、自分の気持ちを分かってほしかったのだ。眠ることも惜しくて、ただひたすら婆ちゃんに泣いては、苦しみを話した。

だからこそ、一緒に泣いてもらう事が本人にとって、どんなに嬉しいことかを知っている。泣いて泣いて疲れた後に、婆ちゃんが買ってきて作ってくれた朝食が忘れられない。暖かくて、優しくて、とても美味しかったのを覚えている。

「それで色々話し合って、やっぱ家を維持するのは無理だけど卒業

するまでは一人暮らしできるよう取り計らってくれたんだよ。　婆ちゃんも引き取るわけには行かなくて。　というより、爺ちゃん死んだばかりの婆ちゃんに全部頼るわけにもいかないしね」

それからは今を生きるため、明日を迎えるためだけに精一杯に頑張った。親と妹の突然の死によって、将来のために頑張ろうとは思えなかった。今を生きるために将来のことを考えると言うけれど、それは環境に恵まれた奴の言う台詞だ。

人なんて簡単に死ぬ。あっという間に死んでしまう。今を何とか生きてさえいればいいと、そう考えていた。

「全然、知らなかった」

どうして教えてくれなかったのと、氷川さんは続けた。

「思い出したくないから。　ましてや人になんて話せない」

話せば思い出してしまう。

「樹君も知らないの？」

「まさか。　何とか学校に通うようになって、それから俺を助けてくれたのが樹だからね」

樹は登下校を一緒にしてくれた。昼飯も一緒に食おうぜと誘ってくれた。今までの友達と遊ぶことなく、殻に閉じこもってしまった自分に根気よく接し続けてくれた。

「だから俺は婆ちゃんと樹には世話になってるんだよ」

今更ながら、樹と婆ちゃんにはもっと感謝しなくてはならないと思わせられる。心に喜怒哀楽を思い出させてくれたのは樹と婆ちゃんだ。

おかげで、過ぎてしまったものはしょうがないと思うことができ

た。親が死んで妹が死んだ。それはどうしようもなく大きくて不幸な現実だけれど、それでも生きたいと思えたのだ。励ましてくれた人のためにも立ち直ることができた。

「そうだったんだ」

そう言う氷川さんの眼差しは優しくて柔らかい。

「これで、俺の話はお終い。　そういうことが、あったってだけだよ」

本来の目的を忘れてはいけない。今度は氷川さんの話を聞こうと、ベンチの脇にある欄干に腰掛けた。

照れ隠しに似た笑みを氷川さんに向けて、

「だから親が死んじゃった悲しみは分かるかなって。だからゆっくりと元気になればいいと思う」

伝えたいのはそれだけだ。

そしてこの言葉は自分への言葉でもある。自分もまた、昔のように元気になったかというと、そうでもないからだ。それでもずば抜けて明るかった自分が、平均的な普通に戻ったと思えばいいのだけれど。

「でも私、やっぱり教えて欲しかった」

俯いて、戸惑いがちに氷川さんは言った。

「もう過ぎたことだから」

気兼ねなく普通に接して欲しかった。気を使って欲しく無かった。

「もう大分忘れたしね」

「でも、辛かったでしょ？」

「そりゃあね」

けれど伝えたいのは、味わった辛さではなく、必ず立ち直れるという事実だ。悲しみだって、誰かが分かってくれるということ。

「俺は自分なりに立ち直った。　だから氷川さんもゆっくりで良いと思う」

「……うん」

氷川さんは、こくんと頷いて唇を閉じた。

幾分かの沈黙が通り過ぎて、

「ありがとう。暗くなってきちゃった。　帰らなきゃ」と氷川さんは言った。

もう大丈夫、気にしないでと、そんな表情をくれた。

「雨振るかもだしね・・・」

結局、自分の過去話をしただけで終わってしまった。話さなければ良かったと後悔して空を見上げた。山頂からの空は、すぐ近くに見えた。今にも崩れそうで、重く垂れ下がった黒い雲が間近に迫っている。

「泣かせちゃって……ごめん」

せめてもの償いをと謝る。

「ハル君も泣いてたよ？」

うっすらとした暗がりの中で、氷川さんは笑ってみせた。その笑顔が、幾らか心からのものに見えて、少し安心する。

「だったね。久しぶりに泣いたな」

いつか自分は、人の役にたてるような大人になれるのだろうか。心にもどかしさを感じた。

「私はハル君と話せてよかった」

きっぱりとした口調で、強い眼差しをのぞかせて、氷川さんは言

ってみせた。少しは役にたてたのだろうかと、そう思う。
「それじゃ、帰るね」
氷川さんは立ち上がって、笑顔で「またね」と付け加え、急ぐように公会堂の方へと向かって行った。そして何処から引っ張り出したのか、自転車に乗って、去っていった。

## 氷雨

氷川さんの後姿が見えなくなって、ベンチに腰かけたまま空を見上げた。

視線の先には黒ずんだ、重そうな空がある。ゆっくりと、悲しげな様子で動いていた。時折吹き荒ぶ風も冷たくて、皮膚を切られるかのような痛みを覚えさせた。

「誰もが経験することか」

婆ちゃんの言葉を思い出す。

人が死ぬ現実、その過程を経て人は成長するとしたら、残酷な話ではないだろうか。死を乗り越えることなど、できやしない。乗り越えるのではなく、忘れるしかないのだ。

暗い空はどこまでも、果てしなく続いているように見える。この空の下には、同じように悲しみにくれている人が沢山いるのだろうか。見上げた空から、ぽつんと雫が落ちてきて、頬にあたった。

「つめて……」

頬に落ちた雨水が、まるで涙のように頬をつたる。氷が滑っているようで、とても冷たく、けれども心を冷やすようで気持ちが良い。

「久しぶりに泣いたな」

雨水を拭って笑ってしまう。最近は昔を思い出しても、悲しくなることは無くなっていた。それだけ立ち直ることができたのだろう。

それとは別に、自分だけがこんなに楽しい思いをして良いのだろ

うかと、虚しさを感じることはある。ここに来て沢山のきれいな景色を見ることができた。いろんな人と和気藹々に、楽しく過ごすこともできた。そんな幸せを感じている時に考えてしまう。

親はもちろんのこと妹に、もっと楽しんで欲しかったと残念に思うのだ。嬉しくて楽しい気分になればなるほど、妹の元気な姿が思い浮かび、それ以上自分を喜ばせる事に躊躇いを感じてしまう。一瞬、我に返って現実から一歩遠ざかってしまうのだ。

そんな時は、自分に言い聞かせている。感じるままに素直に楽しもうと。一歩先に飛び込もうと。そうするのが一番いいように思えるのだ。理由はない。それが良い様な気がするだけだ。

「降ってきたな」

ぽつぽつと、雨は勢いを増して顔に落ちてきた。空を見上げて、吸い込まれそうな感覚を味わうのもそろそろ辛い。このままいれば、きっと風邪を引いてしまうだろう。

「帰るか」

踏ん切りをつけるように、勢いよくベンチから立ち上がって、そのまま歩き出す。落ち葉がしんなりと雨を吸って、何だか寂しい。

目の前の視界はいつしか白く靄がかり、雨の感触も重たくなっていた。このままだといつ雪になってもおかしくないだろう。

公会堂の脇で、ひっそりと立つ自転車に跨ぎ、帰ったらすぐにでも風呂を沸かせて体を温めようと家に急いだ。

## 師走

山頂での出来事から数日、氷川さんは姿を表さなかった。

少ない人数での仕事にも慣れ、平日くらいならお婆さんと二人で店も回せていた。

ようやく姿を見せたのは、山頂の出来事から一週間程経ってからのこと。久しぶりに見る姿に驚いていると、氷川さんはこちらを向いて頭をぺこりと下げた。

「ごめんなさい。もう大丈夫」

氷川さんの表情は、語った言葉とはまるで正反対で、未だ答えを見つけられず、素直に感情を表すことのできない曇った表情をしていた。

話しかければ明るい表情をするものの、それが返って痛々しく見えてしまう。客足が途絶えると、いつも何処かをぼうっと見つめて、悲しい表情をしていた。もう何日もそんな日が続いている。

――――――――――――――――――――
――――――――――――

十二月も後半。

いよいよ冬らしく、雪が高く積み重なる頃。

昨日積もった新雪をギシギシと踏み固め、荷物を両手にぶらさげて川沿いの道を歩く。道路は凍り自転車が使えないので、徒歩で買い物から帰る途中だ。雪道にも慣れて、すっかり転ばない歩き方を

身につけてしまった。

「ちょい、見ていくか」

久しぶりの外出に寄り道がしたくなった。最近行っていない、あの場所に行ってみようと足を向かわせることにした。

目的の場所に辿り着き、川の反対側から気づかれないように、こっそりと覗いてみる。すると、半分開いたシャッターから、氷川さんが忙しそうに出入りして、閉店作業をしていた。

川の向こうにある氷川商店が、何だかとても懐かしい。

「……」

せっせと働く氷川さんの姿に、一抹の侘しさを覚えた。蚊帳の外のいるような、そんな感じだ。

自分は今、二週間ほど休みをもらっている。氷川商店本来の休みは年末年始だけなので特別待遇だ。

きっと、気まずい思いをしていると思ったのだろう。勉強のためだよとも言ってくれた。親父さんは自分の従姉妹を臨時で雇うことにして、突然、休みをくれたのだ。

言いかえれば自分の代わりになる人を入れたということだ。休みというより、もうそんなに働かなくてもいいよと、そう言っているのかもしれない。家庭の事情で迷惑をかけられないと、そう思ってくれている。その優しさが辛く思えた。

「なんだかな」

透き通った冷たい空気の中に、やり場の無い思いを吐き出した。眺めていても未練がましいだけだと、その場所を後にする。

頭から後悔の念を拭えない。結局、自分は何の役にも立たなかったのだ。色々なことを教えてもらい、大切な事にも気づかせてもらったのに、恩を返せないまま、ここを立ち去ろうとしている。

せめて氷川さんの助けになればと思った。親を無くした悲しさなら、誰よりも分かって上げられると思っていた。けれど、それを分かって上げられたとしても、一体何になるというのだろうか。

自分は夢を追い、氷川さんは夢を諦める。その事実は少しも変わらないのだ。あの日も結局、自分の悲しみを吐露しただけで終わってしまった。

「しょうがないな」

後悔だらけの人生だ。いつかは人に役にたてる日が来るのだろうか。その日が少しでも早く訪れるよう、願わずにはいられない。

「靴下ぐっしょりだ」

雪が付着した、冷たく濡れた靴下を玄関に脱ぎ捨てた。

裸足のまま台所に駆けて行き、机の上に荷物を放った。そのまま居間に走り、こたつに潜り込む。

最近は買い物から帰ると、いつもこの繰り返しだ。

こたつの中で手を擦りながら、寒い寒いと繰り返していると、「手と喉くらい洗って来いって」と、こたつで寝ていた樹が呆れたように呟いた。

「やるよ、温まったらな」
このやり取りも、いつものことだ。

「ホントかよ。それでメシ買って来たのか？」
「買って来た。和牛買って来た」
ここ数日、大雪が続いて外に出られなかったのだ。だから今日は、ここぞとばかりに食材を買い込んで来た。肉も大量買いしたので、夕食は期待していい。

「超寒いんだぞ、外」
今も窓を打ち叩くかのように、冷たい風が吹いている。おかげで耳が痛くなってしまった。手を温めては、耳に熱を譲る、その繰り返しだ。

「知ってる。そういや、コンビニで氷川さんに会ったぞ」
和牛にも寒さにも感心を払わず、樹は話を変えた。
「まじか。どうだった」
樹は、んーっと唸ってから、
「別に普通って感じだったけどな」と言った。

「そっか。なら、良いな」
あまり深く言及しないことにした。それ以上考えないようにする。氷川さんについては、ただのバイト仲間なのだと、割り切る事にした。

ここに来て半年と数ヶ月。短いようで長く感じる期間だ。
氷川さんと親しくなり、毎日のように接してきた。これ以上深入りすれば、きっと別れるのが辛くなってしまう。

向こうも、気を使わせない様にと休みをくれたのだ。それに、少しずつ氷川さんに惹かれている自分もいる。今はまだ、少し気になる女の子くらいで留めることができるのだ。

来月、一月の初めにバイトに復帰して、三月には辞める。引っ越す準備も着々と整いつつある。心に荒波を立てないように、いつも通り普通のまま過ごして、普通に別れようと、そう決めている。

窓から見える外はいつの間にか真っ暗で、見回りの消防車の鐘がカンカンカンと悲しく木霊していた。

## 安穏

バイトの無い年末年始は暇を持て余した。

することといえば、雪かきか勉強くらいなもの。時々、人が恋しくなっては温泉に行き、ぬくぬくと暖まるくらいがせめてもの気晴らしだった。

雪がひたすら降り続け、雪かきというものに疲れを感じ始める頃、ようやく一月の初めになりバイトに出勤した。

「……おはようございます」

朝の挨拶を控えめにして店内にお邪魔する。

年明けの初出勤。

まるで冬休みに誰とも遊ばず、新学期を迎えるような心境だ。自分の居場所はまだあるのだろうかと不安を抱いて、氷川家の反応を伺う。

「あ、ハル君、久しぶり」

店内に響いた声に意表をつかれて振り返る。何事かと思う程の、明るい声が聞こえたのだ。見ると、はたきを片手に氷川さんが駆けて来る。人違いかと思うほどに、明るい笑顔をしていた。

「お、おはよう。元気だね」

あまりの眩しさに一歩遠ざかってしまう。自分のいない間に何があったのだろうか。すぐ近くに迫った満面の笑みに、訳もなく恥ずかしくなる。

「うん、おかげさまで」
氷川さんも頬をほんのり赤くして、照れている。その姿に安心する。きっと沢山の励ましと支えとで立ち直れたのだろうと。

「ねぇハル君」
「ん？」
「色々ありがとう」
氷川さんは、客に接するように礼儀正しく、深々とお辞儀した。

その姿に顔が熱くなった。耳まで熱い。感謝される謂れなどないはずだ。

頭を下げられて、どう返したらいいのかも分からず、ひたすら恥ずかしくなって時間を止めてしまう。

「な、何か……したっけ？」
ようやく言葉をひねり出して、手で顔を仰ぐ。どうやら自分は褒められることが苦手らしい。
「ほら、色々と迷惑かけちゃったから」
ごめんねと氷川さんは、はにかんでみせる。
「いやいや、そんなことないよ」
素直に言うなら、役にたてなかったことを悔やんでいるくらいだ。
「本当にありがとう。これからも、よろしくね」
再び頭を下げる氷川さんに、
「うん、こちらこそ」と、同じように丁寧にお辞儀した。何はともあれ、元気そうで本当に良かった。

「そいじゃ仕事頑張るかな」
肩を回してみせて、早々と休憩部屋に逃げることにした。くすぐったいやり取りは苦手なのだ。どうにもこうにも恥ずかしくなって

しまう。

休憩部屋に荷物を置いて、しばらくぶりの店内を見渡した。ここにいる期間も長くはない。一日一日を充実させて、少しでも役に立ちたいと、そう思う。いつまでも忘れないように。

「お！　もしかして、晴祐君？　はじめまして」

さあ仕事をしようと、ダンボールを抱えた時、背後から声をかけられた。聞き覚えの無い声に振り向くと、見たことのない女性が立っていた。外見は三十代半ばくらいの女性だ。

「そうですけど。はじめまして」

「やっぱり！　そうだと思った」

女性は屈託の無いさわやかな笑顔を見せて、親父さんの従兄弟なのだと自己紹介をしてくれた。言われてみれば、頼りがいのある格好の良さは、親父さんに似ているかもしれない。

応じるように、自己紹介を返すと、従兄弟さんは突然周りをきょろきょろ見渡して、艶やかな小さな口を近づけてきた。

「晴祐君、ありがとね。色々と助けてくれたみたいで」

耳元で囁かれた。吐息が耳に当たってくすぐったい。すかさず離れて、耳をかばう。

「な、何の話ですか？」

従兄弟さんは両手を腰に、偉そうに笑っていた。

「あの子、素直に言えないんだけどね。ハル君には感謝してるのよ」

ようやく断片的な言葉が繋がって意味を掴む。あの子とは氷川さんのことらしい。

氷川さんが商品を補充しに行って、店内にいなくなった隙に、こんな話をしているのだろう。

従兄弟さんは、周りをバッバッと素早く見渡して、

「涼音は我慢しすぎなのよね、いつもいつも。まぁ、私みたいに我侭なのも問題だけどね」

ハァとため息をついて、やれやれと首を振った。

その姿を見て思う。この人、親父さんには似ていない。我先にと、どんどん話を進めていく。

従兄弟さんは、思いついたように手のひらを叩き「あ、これ涼音には内緒だからね」と、思い付きもしないのに「聞かれても、言っちゃダメよ」と神妙な顔をしだした。

「あ、それとね」

従兄弟さんは、まだまだ話は終わらないと嬉しそうに口を開けた。まだ何かあるのかと続きを待つと、従兄弟さんは目を大きく開いて、

「それじゃ、晴祐君はそっちよろしくね！」と言い放ち、人差し指をこちらに向け、訳の分からない指示を残し売り場へと走っていった。

「は。ちょっと」

呼びとめようと声を上げたと同時に、後から、重いーと唸るような声が聞こえて氷川さんがやってきた。大きなダンボールを抱えて、右に左にふらふらしている。

「……なるほど」

従兄弟さんは、氷川さんが戻ってきたのをいち早く感知して、仕事を装うことにしたのだろう。そそくさと歩き回り、こちらに訳の

分からない目配せを送って、見るからに怪しい素振りのまま働くフリをしている。

案の定、氷川さんにどうしたの？と聞かれ、びっくりしている。
その挙動不審な行動がバレないと思っている方がおかしい。

結局、従姉妹さんの「それとね……」の続きを聞くこともなく、
その日は過ぎてしまった。

## 来更来

忙しかった一月は瞬く間に過ぎて、二月の始めになった。

銀色の世界にも慣れて、いい加減違う景色が見たいと春が恋しくなる。

いよいよ引っ越しがより鮮明に、現実味を帯びて迫っていた。予定より早く、今月の終わりには引っ越すことになっている。そのためか毎日が感慨深い。

どこの業者に頼み、どこのアパートに引っ越すかも、もう決まっている。通う専門学校も、後は入学手続きを済ませるだけだ。

けれどそんな詳しい引越しの内容を、未だ氷川さんには伝えていない。前もって伝えてしまえば、あれこれ気を使わせてしまうだろうと考えたからだ。

お昼の休憩時間。無用な気を使わせないようにと、雑談の合間にさらりと切り出すことにした。

「そういえば、今月の終わりに東京に帰ることになったよ」

弁当をつまみながら、氷川さんとも従姉妹さんとも視線を合わせないように、事もなさげに切り出した。返ってきた反応は、一方は騒がしく、一方は静かなものだった。

「え。　ちょっと、本当なのそれ？」

サンドイッチを片手に身を乗り出して、食いつくような視線を向けるのは従兄弟さんだ。相変わらず、顔が近い。

「一応、親父さんには言ってあるんですけど」

目の前にある迫力をかわそうと、たどたどしく言い訳する。親父さんには一月の始めに伝え済みだ。

「聞いてないわよ。本当に？」

「ホントですけど」

なぜか怖い形相の従兄弟さんが言葉を続けようとした時。

「そうなんだ。もう学校は決まったの？」

氷川さんが従兄弟さんを制止させるかのように告げた。

訪れたのは一瞬の沈黙で、従兄弟さんは徐に口を閉じ、

「用事を思い出したわ」と言い残して立ち上がり、何処かへ行ってしまった。明らかに不機嫌そうに扉の音を大きくして。

「いいの、気にしなくて。それより良かったね」

優しい口調で氷川さんは微笑んでみせた。

そうは言っても、どうして従兄弟さんはあんなに怒っているのか、さすがに伝えるのが遅すぎたのかと気が気でない。従兄弟さんを気にせず会話を続けていいのかも悩んでしまう。僅かな時間で散々悩んだ挙句、氷川さんの心中を酌んで素直な返答をすることにした。

「ん、ありがと。　住む場所から近い専門学校にね。　またそのうち遊びに来るよ」

せめて明るく、氷川さんの背景故にさっぱりと、後腐れないように口にした。

ここに戻るのが、いつの日なのか正確には分からない。簡単には来れないはずだ。自分は変わったと、人の役に立てる程に成長したら、また来たいと思っている。五年後なのか十年後なのか、随分と先の長い話になりそうで笑ってしまう。

そしてその時、まだそれが許されるのなら。改めて氷川さんを好きになりたい。

好きになって報われるかどうかは別として、唯一ここでやり残したことなのだから。可能性は限りなく薄いのは仕方ない。どちらにしても、いつかは『ありがとう』と『好きでした』を伝えに来なければならないだろう。

「うん、頑張ってね。待ってる」

氷川さんの、その言葉に恥ずかしくて嬉しくなったのは言うまでもない。ここはあえて、都合の良いように解釈しておこう。

励まそうとしているのか、それとも自分は心配ないと安心させようとしているのか、氷川さんは終始優しい笑顔のままで、頑張ってねと応援してくれた。

「さて……と」

弁当を片付けて、残り僅かしか過ごせないこの場所を堪能しようと、店の外に出た。

氷川さんと将来の話ばかりするのは寂しい気がしたのだ。サンダルを引きずって外に出ると、冬らしく銀色に満ちた景色が広がっていた。

下に何があるかも分からない、雪の起伏だけが広がっていた。人通りも疎らで、氷柱が雫を滴らせては時を刻んでいた。この景色と別れるのはやはり寂しい。冷たい空気が気持ちが良いと感じる最初の数分を過ぎて、体が震え始める頃、店内に戻ろうと暖簾をあげた。

思わず、暖簾を押しやる手が止まった。なにやら店内に、険悪な

雰囲気が満ちていた。

「涼音。　涼音、ちょっと来なって」

従兄弟さんは氷川さんを見つけると、片手を掴んでそのまま奥の勝手口へと引っ張って行った。視線をずらし、見ていない振りを装い、店内に一人残される。

ほどなくして店の裏側から話し声が聞こえてきた。従姉妹さんの強い口調が壁越しに聞こえてくる。氷川さんの声は聞こえない。内容も掴めない。

そういうのは仕事が終わってから、自分がいなくなってからやって欲しい。何分か経って戻ってきた二人は案の定、第三者にとって非常に気まずい空気を纏っていた。

「若いのに頑固だと……先が思いやられるよ？」

仕事をキビキビとこなしながら従姉妹さんが吐き捨てる。

勘弁して欲しい。自分がいるのだから、やめて欲しい。空気が肌に刺さって、第三者の存在を拒絶する。自分は関係ないですからと、常に距離を置いて知らないフリをするしかない。

ちらっと見る氷川さんは困った顔をしていた。ふと目が合ってしまうと、氷川さんは申し訳なさそうに笑って返すだけだった。

さぁ、これからどうしようか。

## 火点頃

夕方。閉店作業をしていると、氷川さんが近づいて来た。

「ハル君これから予定ある？　良かったら、買い物に付き合って欲しいんだけど」

夕焼けに染まる空を背景に、氷川さんは遠慮がちに言った。

「ん……構わないけど」

涼しげな瞳に見つめられ、即答した。

外は身も凍るような極寒の寒さだ。慣れない寒さが身に凍みる。シャッターを閉じて、よそ行き姿をした氷川さんに鍵を渡す。

「やっぱり、寒いよ」

試しに空に向かって息を吐くと、煙のようにくっきりと白い吐息が立ちのぼった。もう日も落ち始めている。これからどんどんと気温は下がるばかりだ。

「いいお店知ってるから。そこに行こうか」

氷川さんは赤いマフラーを巻きなおして、ゆっくりと歩き始めた。後を追うように付いて行き、追いついて並んで歩く。

見上げれば、茜色は地平線に移動して、真上には色温度の高い青みがかった空が広がっていた。

遠くの景色がくっきりと見えるほど空気は澄み、凛と冷えている。無音が辺りを包み、どんな話題を切り出そうかと悩んでいると、氷川さんは足を速めて、少し先を進みはじめた。

「あのね、さっき言われちゃった」

氷川さんは横顔に笑顔を見せた。
「さっき？」
「ほら。　私、店の裏に連れていかれたじゃない」
昼間、従姉妹さんに連行された時の話だ。
「あぁあれね。どうかしたの？」
「うん……えっとね。　自分の気持ちをはっきりさせろって言われたの」
「自分の気持ち？」
冷たい横風が吹いてきて、マフラーを口元に引き寄せさせる。
氷川さんは歩くのをやめて、優しい眼差しで道の先を見つめていた。同じように少し後ろで立ち止まり、同じように道の彼方に目を向ける。
氷川さんはゆっくりと、白い吐息を舞わせて口を開けた。
「ハル君の事が好きなら正直になれって……そう叱られたの」
その横顔は昔を思い出すかのように、懐かしむ微笑を浮かべていた。冷たい風に髪をなびかせて、瞳には、遠くの茜色が映っている。
「驚いた？」
いたずらっぽく笑って氷川さんはこちらを向いた。
「……え」
その姿があまりにも自然で、氷川さんの言葉が何を意味するのか理解できなかった。
「え！？」
聞き間違いではなかろうかと、もう一度言って欲しいと言おうとして口を結ぶ。確かに聞いたのだ。

「私はね、ハル君は樹君と一緒に行かないで、ここにいてくれればなって、そう思ってたの」
実に淡々と、涼しげな瞳をして続ける。こっちは整理できないことだらけで混乱しているというのに、どうしてそんな余裕な表情をすることができるのだろうか。

「ま、まって。　たんま」
ようやく、声を捻り出す。慌ててそう言うと、氷川さんは不思議そうな顔をした。何で慌てているの、とでも言いたげな表情だ。
「えっと……」
慌てる要素も、言いたい事も、聞きたい事も、沢山ある。額に手をあてて目を瞑る。それは、そもそも最初から疑問だったこと。

「俺は、そんな風に思ってくれてたなんて、全然知らなかったけど」
未だに信じられないのが事実だ。

十九になるまで多少の恋愛はしてきたつもりだ。お互い好意を持っているかどうかくらいは、分かるつもりでいた。だから氷川さんの言葉に納得がいかない。氷川さんに好意を持たれているはずがないのだ。

いつだって好意を持たれるような行動はできなかったつもりだ。だから、それが本当だと言うのなら信じさせて欲しい。

「不思議なの？」
氷川さんは嬉しそうにした。まるで、気づかない自分が可笑しいというかのように。
「そりゃあね。　嫌われる理由はあっても好かれる理由なんて思いつかない」
自分で言って悲しくなる。

過去にデリカシーの無い言葉を吐き、自分勝手な行動もした。氷川さんの不幸を踏み台にして、自分の将来への糧にしようともしている。だから好かれることなどありえないと思っている。

「あのね……理由なんてなかったの」
そう言って始めて、氷川さんは顔を赤くした。
「どういうこと？」
「最初はね、理由なんてなかったの」
寒さの故なのか、それとも恥ずかしさを隠すためか口元にマフラーをよせて氷川さんは、目を伏せた。

「つまりね。　気づいたら好きだったの」
早口で、耳を赤くしていた。
「ほんとに？」
それでも信じられない自分がいる。

氷川さんはこちらを見上げて、恥ずかしさを我慢するかのように瞳を揺らして、こくんと頷いた。
その仕草に、胸が熱くなってしまった。塞いでいたはずの感情が、怒涛の勢いで溢れてくる。

「それなら！」
自分にだって伝えたい感情があるのだ。
「俺も同じ。　俺も氷川さんのこと好きだよ」
とてもくすぐったい。この想いは、積もらせないようにと努力してきたのだ。好きにならないように、これ以上惹かれないようにと、実らない恋だと距離を置いていた。

まさか想いを伝える場面になるとは思いもしなかった。

けれども、今度は氷川さんは先程の自分のように、きょとんとしていた。

「え……、ほんとに？」

心配そうに戸惑っていた。

「ホントにほんと。　それに、ちゃんと理由もあるよ」

氷川さんとは違うと、少し意地悪な笑みを浮かべてみせた。

「……それって？」

自分を好きになった理由を聞く時。

人はこんなにも儚くて、言葉一つで大きく揺らいでしまいそうな表情をするものなのか。先程の自分もきっとそうだったのだろうと苦笑いする。

「もちろん可愛かったから。　あと、とても偉く見えた」

憧れという感情も、もしかしたら含まれているのかもしれない。一生懸命、自分の夢を掴むために頑張っている姿は眩しかった。

「全然偉くなんてないよ」

「いや、偉く見えたんだよ」

「偉くないよ」

「偉いって」

断言する。氷川さんは心底困った顔をして、小さくなってしまった。

「俺がなくしてしまったものを持っていたからね。　だから格好良かった」

人は自分の持ってないものに惹かれるのだろうか。いつも前を向いて歩く氷川さんの姿は美しかった。

氷川さんは顔を赤くしたまま固まって、何を言ったらいいか分からないという表情を向けていた。

だから少しの笑みが零れる。今なら何でも素直に言えそうだ。

「本当だよ。いつだって皆に優しくて、夢に向かっている氷川さんを、俺は好きだった」

そう締めくくって笑ってみせると、氷川さんはようやく顔の緊張を解いて口を開けた。

「わ……私だって」

その表情は、何かを伝えようと必死になっていた。

「ハル君を好きになった理由はきちんとあるよ？」

思わず笑ってしまった。そんなことで張り合う事はないのにと。

「どんなの？」

もし本当に理由があるとすれば是非とも聞いてみたいものだ。

「確かに、気にいらないとこはあったけど」

「……」

視線をずらして、あっちの方向向いて呟いた。その前振りはいらないと思うのは自分だけだろうか。面と向かって言われると、分かっていても辛くなる。

「けどね、ほら」

氷川さんは人差し指を立てて言った。せめてまともな理由であって欲しいと願い、続きを待ち焦がれる。こんな風に会話の一つ一つで簡単に浮き沈みする自分は、とっくに惚れていたのだ。

「ハル君は頑張っていたから。　私は夢が無ければ頑張れないと思ってたけど、ハル君は仕事も家事も頑張ってた」

どうだと言わんばかりに氷川さんは胸を張った。

一瞬の沈黙が流れて、氷川さんの理由は告げ終わったのだと理解する。

「え、それが理由？」

人を好きになるのに理由はいらないと聞くけれど、やはり少しは具体的な理由が欲しい。すると氷川さんは顔を横に振った。

「それにね。　あとで教えてくれたでしょ？ハル君のこと」

「あぁ。　うん」

それはきっと展望台での出来事。親を亡くした不幸については理解できると語ったのだが、今考えると言わなければ良かったと後悔する一つだ。

「ハル君は強いんだなって、凄く思った」

理解した？と言いたげな表情を向けられた。

分からない。分からないけれど、そんな表情を向けられたら、

「そっか」

と言うしかない。

要するに、とにかく色々あって好きになってくれたのだろう。とことん突き詰めるのは野暮なので、もうやめておく。

「そんなこともないんだけどね。でも、そう言ってくれるのは嬉しいよ」

氷川さんの言った『強い』という言葉を振り返った。

あれは強さと呼べるものではなかったのだ。そうしなければ生きられなかった。生きる希望を無くすか、無くさないか。生きる希望

は無くさないと決めたから、得られた強さなのだ。無くしていたのなら、ここにはいない。だから当たり前の結果だと思っている。

「俺はやっぱり、氷川さんのことが好きだよ。本当に大切な人だと思ってる」

湧き起こる想いから、改めて伝えたくなった。

何度言っても伝えきれないと思う程、好きという気持ちが溢れてしまう。手を伸ばして、氷川さんの右手をそっと掴んだ。

氷川さんは僅かに驚いたものの、ぎこちなく手を委ねてくれた。戸惑う視線を笑顔で返し、冷たい右手を両手で包んだ。この右手は今までずっと、絵を描きたいと懸命に努めてきた右手だ。夢を追うことを決して諦めず、掴もうとした手なのだ。冷たくて小さな手が、とても可哀想に思えた。

「いつか。　いつか俺がさ」

もちろん、こんな言葉で慰められるとは思っていないけれど。

「誰かを助けられるような、そんな大人になれたら」

頬が痛い。何だか涙も零れそうだ。

「また氷川のお店で働いてもいいかな」

本当に伝えたい自分なりの告白。

今はまだ幸せを掴むことができない。こんな不確かな将来の話でしか、氷川さんの想いに応えることができない。氷川さんは、うっすらと涙をうかべて嬉しそうに笑ってくれた。

「うん……待ってる」

「ごめん」

不甲斐無いと心の底から悔しくなる。報われない無力感が喉を熱

くさせる。

「ねぇ……ハル君」

氷川さんは左手を添えて、二人して両手を繋いだ。

顔を上げると、氷川さんは嬉しそうに微笑んでいた。

「私の夢もね。　変わったんだよ」

その表情に不安や悲しみはなく、落ち着きだけが見えていた。

「変わったって？」

絵を描く夢は諦めてしまったのだろうか。

「私の夢は二つになったの。　一つは、絵をうまくなること」

いつもと変わらず、夢を秘めた瞳に安心する。

「そうだよね。　二つ目は？」

「うん、でもその前にね……絵をうまくなりたいって思う理由が変わったの。何だか分かる？」

微笑みながら目を伏せて、氷川さんは言う。

「何だろ。　分からないけど」

握る手に力が込められた。

「それはね、いつかハル君が戻って来た時、私の絵を見て上手だねって言って欲しいの。　だからうまくなりたいなって。　そして二つ目の夢が、そんなハル君が追う夢を、私の夢にすることかな」

すらすらと、そしてさっぱりと言った。どうだと言わんばかりに。

驚いて、口を開けて、閉じて、歯を食い縛る。

自分にとって、その言葉はそんなにさっぱりと簡単に流せるようなものではなく、胸に深く突き刺さってしまうのだ。

「あのさ……」

「な、なに？」

氷川さんはびっくりしていた。きっと、今にも崩れそうな自分の顔に驚いているのだろう。
「ちょい泣いていいかな。　ていうか泣く、ごめん」
言うと同時に、涙が零れてしまった。唇を固く結んで、歯を食いしばっても、涙が頬を伝ってしまう。

自分は人並み以上の不幸を味わってきたと思い続けていた。
それは感情の起伏を乏しくし、幸せを感じても同時に虚しさをも呼び起こす程の不幸だった。

ところが今はどうだろうか。自分は今、幸せを味わっているのだ。
氷川さんの言葉が優しくて、温かくて涙がでてしまう。

「え、泣くって……大丈夫？」
あたふたとハンカチを探している氷川さんをよそに、尚も泣きながら話す。
「ごめん、本当にごめん。　ホントにごめん」
最後の最後まで慰めてもらってばかりだ。辛い状況で頑張っている人が目の前にいるというのに、自分は何もできないでいる。

「いつか。　いつか絶対、氷川さんのためになるから」
だから、そのいつかまで許して欲しいのだ。自分勝手に夢を追う自分を許して欲しい。

涙がマフラーを濡らしていく。溢れる涙は、ただ自分の不甲斐なさのために流れて止まらない。
「大丈夫だよ。　ありがとう」
その涙は杞憂であると言うかのように、まるで心配する必要ないと言うかのように、氷川さんは優しく微笑んでハンカチをくれた。

自分に向けられた優しい瞳には、いつかの将来が映っているのだろうか。

こんな自分でも、夢を叶えられると信じているのだろうか。ハンカチを受け取って、涙を拭く。氷川さんは太陽がすっかり沈んでしまった彼方を眺めて『そろそろ行こっか』と告げた。

涙を拭きながら、手をつないで歩き出す。歩きながら、まるで母親に手をひかれる子供のようだと恥ずかしくなった。

寒空の下を二人で歩き、しばらくして辿り着いたのは文房具屋だった。

それから食事処に行き、最後の共有できる時間を噛み締めて、明るく、楽しく打ち解けて笑いあった。過去も今も語り尽くして、いつか訪れるであろう将来の幸せも思い描いて、その夜は過ぎていった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1660y/

灯夢

2011年12月20日00時53分発行